
ウルトラマンネクサス アージュブルー

馬耳東風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウルトラマンネクサス アージューブルー

【Nコード】

N2213Y

【作者名】

馬耳東風

【あらすじ】

ウルトラシリーズに革命を起こすかと言われる程の評価を未だに保つ「ULTRA N PROJECT」。しかし、その評価とは裏腹に打ち切りと言う非常に残念な結果に。

その際に噂になった、未発表エピソードの存在。打ち切り決定の時期から、それはありえなかったのだが、未使用の設定も数多く残っている。そこで、失われてしまったジュネスブルー編のエピソードを蘇らせようという試みに挑戦する。

散逸した欠片を発掘し、復元、そして再生して浮かびあがる、幻の

八つのエピソード。

*時系列はEXから32話の間となります。

蟻の一穴。些細なことが原因となり、大きな結果を招く事を指す言葉だ。ビーストと言うとてつもない脅威、そしてウルトラマンと言う巨人の出現。それは、様々な因子による「結果」だと僕は思っていた。でも、本当の災厄に向かって、目には見えない小さな綻びができてつつあるのを、僕達はまだ知らなかったに過ぎない……。

「君達、ちょっと聞きたい事がるんだけど、少しだけ時間を貸してもらえるかな」

一人の中年男性は、二人組の女子高生に声をかけた。見ず知らずの中年男性から声をかけられれば、少女達は当然のごとく警戒する。しかし、そそくさとに逃げるのではなく、上から目線の様に強気になるのが、今時の世代である。

「何、おじさん。ナンパのつもり？マジウケるんだけど」

警戒しておきながら、あざ笑うかのような態度をとるのだから、こいつらは世間の本当の怖さと言うものを知らないのだろーと思いつつ溜息をついた。取材を始めてから、この手の反応は慣れっことはいえ、やはり腹立たしさはある。先日などは、男子高校生に話を聞くとしたところ、あわや親父狩りに巻き込まれそうになり、肝を冷やしたものだ。偶然通りがかった警官のおかげで事なきを得たが、それ以来ターゲットは女性に絞る様にしていた。それでも、メインの年齢層である十代から二十代前半の女性に対しては、自分との年齢差もあって、警戒感を抱かせやすい。そこで役に立っているのは、彼の名刺であった。

「別に怪しいもんじゃないよ。れっきとした仕事もあるんだ。はい、

名刺」

物珍しそうに彼の名詞を覗き込んでいた彼女達は、名詞の裏表に書かれている文字を読んで、先程までとは違う目つきに変わった。

「すごい、おじさん、ジャーナリストなんだ」

「ほんとだ。読切新聞とか週刊文秋とかそこで、名刺にも職歴も嫌味にならない程度に載せている。この名刺のおかげで、今の取材も当初懸念したよりは、彼らの不信感を払しょくするのに役立ち、大きな武器になっていた。

「えーと、この名前、何て読むの」

「ねごろだよ。根来甚蔵。年寄り臭いからね、読めなくても仕方ないか」

フリージャーナリスト・根来甚蔵。彼は、新聞や雑誌にコラムを持つ、それなりに売れているジャーナリストである。しかし、フリーと言う立場上、自分の足でネタを集め、文章を起こし、そして読者の審判をたった一人で受けなければならない。評判が悪かったり、編集部でつまらないと判断されれば打ち切りとなる。聞こえはいい職業だが、実際は毎日が締め切りと読者や編集部の評価と戦う修羅場の仕事である。最近も、これはと言うネタをつかんだはずなのだが、すっかり記録をとるの忘れてしまい、おじさんとなってしまったばかりだった。どうも、自分が酒でも飲んでいたのか、

「特ダネを掴みそうだから、期待していてよ」

と、雑誌社に放言したらしく、先方でもかなり期待感を持って待ち構えている。そんな記憶はないのだが、彼自身は酒好きだからありえなくはないと言う思いはある。それでも、それを聞いた瞬間、雑誌に穴を開けるかもしれないと言う思いで、肝を冷やした根来であ

った。そのため、ここいらで少しアクセントのある記事を書く必要があった。さもなければ、食い扶持が一つ減る事になる。その恐怖から逃れようと必死に取り組んでいるのが、今行っている取材だった。

根来はボイスレコーダーを取り出し、それを取材対象の女子高生に向けると、取材の目的となる質問を開始した。

「今、噂になっている、『バンニップ』について、詳しく聞かせてくれるかな」

バンニップ。近頃、若者の間で話題になっている、一種の都市伝説である。バンニップと言う怪物が現われ、その姿を見た者は殺されるか、記憶をなくすというものである。ここ一、二カ月もたたない内に、急速に広まっている噂であり、小学生でも普通に話題にしているほどである。

普段の根来であれば、このような都市伝説などネタにするものではなかった。フリージャーナリストと言う肩書へのプライドもあり、このような与太話にまともに付き合う気はさらさらなかった。しかし、自分自身の放言で、生活の糧を失いかねない状況では、このような都市伝説も「藁にすぎる思い」と言う言葉の藁に相当する。その藁がこの一つ目のバンニップの噂だった。

しかし、原稿を納めるのは、タブロイド紙やゴシップネタを扱うような週刊誌ではなく、名のある作家が連載したり、政治や文化を扱うような類の本を出版する所である。こんな都市伝説をネタにできるはずもないのだが、根来には一つの勝算があった。

大学時代の事を思い出したのだが、卒論のテーマを決めあぐねていた時、教授からアドバイスされたのは、奇抜なテーマは求めなくていいから、ありふれたテーマを違った角度から覗くような視点を持つといい、と言う事だった。その言葉の影で、それほど素晴らしき内容ではなかったが、自分にも教授にも満足してもらえぬ論文が完成したのだった。これが、根来のジャーナリスト人生の糧となっ

ていた。つまり、一つ目のバンニップも、色々視点を変えてみれば、実に興味深く奇妙な点を持つ話であった。

一つは、あまりに早い急速な広まり。一カ月を超えるぐらいの期間で、かなりの年代層にまで浸透していると言うのは、携帯などでネットがさらに細分化した情報化社会を分析する切り口になる。

二つ目は、過去の都市伝説に比べて、ストーリー性が欠如しているにも拘らず、忘れられることなく定着している点。かつて、猛威を振るった口裂け女の伝説は、その背後にあるストーリー性がリアリティを増し、社会全体を覆いつくすほどだった。これは、人面犬騒動にも言えることである。しかし、バンニップは人を食らうか、記憶を消す以外は、ストーリーも何もない。何故、そんなものがここまで定着するのか、伝承と言う面での切り口もできる。

そして、根来が一番妙に思っているのは、情報を発信する中心地と言える東京都心ほどこの噂が広まっておらず、郊外に向かう程この噂は高い密度で広まり定着を見せている。情報化社会なら、もっと都心に近いほどこの手の情報は広まりやすいのに、その逆で、郊外からじわじわと噂が伝搬し定着しているのだ。これだけは、どう理屈で考えても根来には納得できる結論を得る事が出来ないでいた。しかし、ここを最大の山と考えて、しばらくこのテーマで乗り切れるだろうと考えていた。「情報化社会における、都市伝説の伝搬とその構造の分析」という題名を考え、根来は取材を続けていたが、不思議とこの取材が面白く感じ始めていた。普段は接しない若者との対話もいい刺激であったが、言葉では言い表せない情熱と言うか、何か衝動に突き動かされる様に取材に熱中し始めていた。

「年柄もなく、ジャーナリスト魂って言う奴に火がついたかな」

それはそれで、根来にとって嬉しい事ではあった。この歳になると、どこか仕事が一ティンワークに感じる部分が出てくる。流れ作業でやれば苦痛はないが、何のために仕事をしているのかわからない無間地獄にはまり込んでいく。そんな時、若い頃のような情熱

を燃やし、ガッツを与えてくれるネタに出会った際は、迷わずの熱に浮かされて仕事に集中する事が、何よりのカンフル剤である。

取材を終え、女子高生と別れると、根来は近くのコンビニで遅い夕食や煙草などを買い込み、家路についた。いつも以上に仕事への楽しみと好奇心がわき上がり、取材の結果を分析したくで胸が高鳴っている。本当に、普段の彼には珍しい事である。

ダムに偽装され、水中に設置されたT L T - Jの基地となるフォートレスフリーダム。そのブリーフィングルームでは、T L T - Jで最も発言力のある松永管理官が、M・Pセクションのリーダーである首藤沙耶の報告と今後の彼らの活動に対する事で、二人きりで話し合いをしていた。

「気になる報告がありましたね。先日的事件でしたか」

「はい。対象となったのは、警察官の高槻茂樹、男性です。彼は以前も記憶消去の対象となっており、その際の消去は成功しております。今回は、M・Pが関わる消去で二度目となりますが、そこで気になる事がありました」

「ナイトレイダーの平木隊員の報告書も目を通しました。本来は休暇中での出来事、提出義務はないのですが、事態が事態だけに報告書を上に上げてもらいました。高槻と言う男、記憶を取り戻したと」

M・Pによる記憶消去。ビーストと戦うT L T のとしては、実力行使部隊がナイトレイダーなら、M・Pは情報部門のセクションと言える。だが、彼らが何故記憶消去と言う手段をとっているのかは、M・Pのメンバーですら把握できておらず、パニック阻止のための情報操作の一環や、被害者の心的外傷のケアのためという説明がされておき、任務の本来の目的は首藤リーダーとT L T の上層部だけの極秘事項の一つであった。そこまでの情報の機密性保持のた

めに完璧な仕事を目指す彼らにとって、記憶が再生すると言うのは決して見逃せない事であると同時に、それ以上の意味を持っていた。「はい。記憶処理の担当は野々宮瑞生。彼女の報告によると、彼女がメモレイザーを取り出した際、高槻は、『あんた達に世話になるのは二度目か。覚悟は決めたよ、やってくれ』と発言したと言っています。これは、彼が最初のメモレイザーによる消去の記憶を思い出したと言う事です」

「消したはずの記憶の再生、ですか。確かにこれは由々しき事態ですね。その案件については、上の方でも話し合う必要があります。それと、もう一つ報告と言うか、相談があるとか……」

「はい……。最近、街で噂になっている『バンニップ』の話ですが、どう考えてもビーストによる被害と、我々M・Pのメモレイザーによる記憶消去の事としか思えません。噂は次第に広範囲に広がり、秘密裏の活動にも支障が出始めています」

「記憶を消し、情報操作してまでもビーストやウルトラマン、そしてT・L・Tの活動を隠蔽している状況でありながら、どこからかそれらの情報が人々の間で形を変えて知れ渡っている。奇妙であり、見逃せませんね。緊急性は高くはありませんが、しかるべき処置が必要です。わかりました、この事は上層部とも見当した上で処遇を伝えます」

「わかりました。では、失礼します」

首藤は挨拶を終えると、基壇を上がり部屋を退出した。一人残った松永は、報告書を眉間にしわを寄せながら、再び目を通していた。冷静を通り越し、冷徹とも思える程の決断を無表情に口にする彼にしてみれば、珍しく人間らしい表情と言える。その松永の背後に、人影が音もなく現われた。吉良沢優、イラストレーターのコードネ

ームを持つ作戦参謀である。彼は、その姿は人前にさらすことはなく、基地内のあらゆる場所に設置された立体映像機に姿を投影し、外部の者とコンタクトをとる。松永は、イラストレーターが現われた事に気が付いており、振り向きもせずに話を始めた。

「消したはずの記憶が戻る。レーテに変化が表れていると言う事ですか」

「その通りだよ。でも、これは避けられない事だった。物質である限り時の流れには逆らえないからね」

「こういう事態は今後起こると言う事ですか。予測以上の早さで、事態は進んでいます。では、その先にある物は一体何でしょう」

「レーテの開放が何をもたらすのか、それはわからない。ウルトラマンやビーストの出現、それ以上の事態を引き起こす可能性もある」

レーテと言うものが何を指すのかはわからない。しかし、彼らの口調はそれがすべての核心であり、最も秘匿しなければならないものと言う慎重さが現われていた。秘密を守ると言う注意を保ちながら、二人は会話を続ける。

「事態は、僕達が思っている以上に進行している。でも、僕達は今の歩みを止めることはできない。出来うる事を為すまで。ところで、興味深い話だね、バンニップ」

「くだらない与太話と言いたいところですが、話が出来過ぎています。あからさまに我々の活動を妨害、或は世に広めようとする意思が感じられます」

「僕も同じ意見だ。ＴＬＴの活動を世に広めようとするのなら、記憶消去から逃れた者や何かを嗅ぎつけた人間が情報の開示を画策し

ているとも考えられる。面倒な事態だけれど、それは人のロジックだから、相手が人である以上は対処はできる。でも、それが人以外の意思介在しているとしたら……」

「人以外の意思とは、まさか」

「アンノウハンド。奴は、今まではウルトラマンやナイトレイダーの脅威として立ち上がる正体不明の意思だった。でも、T・L・Tそのものも奴の標的となつているとすると、この噂も奴の情報戦かもしれない」

「情報戦、ですか。それこそ、人間のロジックですね」

「確かにね。でも、アンノウハンドは明らかに意思を持った行動しているから、人間の様な思考を持っているのかもしれない。道徳や倫理などはまるで違うだろうけどね。そして、奴はナイトレイダーだけでなく、M・Pの活動も邪魔を始めた。噂じゃメモレイザーは使えないからね」

「……、なるほど、そう言うことですか。噂は我々の網の目をくぐりぬけ、社会に侵攻し、広がり、そして定着する。そして、人が抱くイメージは……」

「僕が言う情報戦の意味がわかったね。だから、こちらで戦術を変えていく必要がある。ナイトレイダーの再編成がその一つ」

「再編成ですって。チェスターの運用上の目的からも、今さら手を加えることは最善ではないかと」

「もちろん、現行ナイトレイダーはそのまま手を加えない。僕が言

う再編成は、レッドトルーパーをもつと有機的に作戦に投入するの
が目的さ」

根来は家に帰り、そそくさと夕食を済ませ、酒を飲みたい気分を
ごまかすためにノンアルコールビールを一気に飲み干すと、デスク
に座りノートパソコンを開き、ボイスレコーダーの中のインタビュ
ー内容を再生しながら、大事な要点をメモし、それを原稿にまとめ
ていった。ありきたりの題材を、一風変わった視点から覗いてみる
と言う手法で考察していくと思った以上に作業は進み、編集部に送
るだけの体裁が整い始めていく。都市伝説の歴史、ネット社会、特
に携帯の発達における情報の伝達速度やルート、伝説のベースと思
われる伝承などの文学面などの知識を絡めると、驚くほど高尚な文
章に仕上がっていく。これはいける、という期待が確信に変わり、
段々と仕事が面白くなっていく。

食うための仕事だから、決して面白いばかりではない。いや、む
しろしんどい事の方が多い。好きで入った仕事なのだからと言い聞
かせるのだが、そういう仕事ばかりだとストレスがたまる。そんな
中で、今回の様にノリノリで取り組める仕事というのは貴重である。
一気に連載の二回分の原稿を仕上げてしまう驚くほどのペースだ。

余裕ができ、少しばかり、自分の好奇心のためにこの取材を分析
してみようと言う気が湧いてきた。と言うより、早々と食事を終え、
ハイペースで原稿を仕上げたのも、この取材を個人的な趣味で分析
したいと言う強い好奇心があったからだ。こんな感覚も稀であ
るのだが、仕事が面白く感じるのは結構なことだ。仕事が相棒の様
な根来にとっては、面白い仕事は歓迎すべき事だった。

要点をメモしたノートを見返してみると、やはり際立った特徴が
出てくる。この噂を知っているのは、やはり郊外からで、普通の流
行の伝わり方とは明らかに違う。しかし、地方の局所的な流行では
なく、郊外から徐々に都心に向かっていくのだ。普通とは違う情報

の伝搬が見受けられる事が一点。

次に、急速な噂の発生。バンニップの噂を知っている者たちの大半は、ここ一カ月から二カ月の間に伝え聞いている。一世を風靡した口裂け女の伝説の場合、マスコミが取り上げ収束するのが半年以上があるから、メディアが取り上げる前の期間を考えると、かなりの期間熟成された都市伝説である。しかし、いくら情報化社会とは言え、バンニップの伝説は異様な短期間で広がり定着している。口裂け女は岐阜県が発祥ではないかという推測がされているが、バンニップは短期間で限定された地域で発生した噂なのに、情報源が全くつかめない事が、特徴の二点目。

そして、根来が気になっているのは、このバンニップの噂は、固定化されたストーリーという事だった。つまり、噂につく尾ひれなどが全くなく、バンニップが人を襲う、消される記憶と言う事に終始し、サブストーリーなどが全く発生していないのだ。伝言ゲームでも明らかのように、二、三人の人間の間で情報を伝え合うだけで話の内容があやふやになる。いくらメールで転送できるとはいえ、ここまで情報が固定化されているのは、妙と言えば妙である。若者なら、何か話を面白くしようとオリジナルの表現を入れようとする方が自然である。しかし、バンニップはたった一つのイメージとストーリーの中で生きている。何かの意思が働いているかのように……。

根来は、もう一度ボイスレコーダーを最初から聞き直した。口調や言い回しは個人で違う。それでも、話の内容は気持ち悪いと思うほど変化がない。

「こいつあ妙だぞ」

根来の嗅覚は、この発見にかなり鋭敏になってきた。これは新しい食い扶持を増やす最高のネタかもしれない。その欲望が、さらに彼の能力を高めていく。さらに、インタビューを聞いていく内に、根来は何か妙な感覚を得た。何かはわからないが、どうしても拭い

きれない違和感があった。もう一度ボイスレコーダを戻し、再生して内容を聞き直したが、やはり胸がざわざわする。もう一度、インタビューを聞き直していると、ある一件だけが妙な事を言う取材対象がいた。

根来は手帳を取り出し、ボイスレコーダーの記録と取材した時間と場所、簡単な人物像をメモした項目を見た。この声の持ち主は、今日の午後に訪れた遊園地で働いているアルバイトの十代の少年に聞いたものだった。録音内容はこうであった。

「バンニップだろ。知ってるよ。そいつに見つかった人間は食われてしまうって。でも、運がいいと記憶を消してくれるだけで済むんだろ」

なんだ、この「消してくれる」って言う表現は。他の人間はみな「記憶を消されてしまう」という被害意識のある表現を使っている。しかし、この少年の表現だと、相手に善意を感じているかのような表現になる。この遊園地では、他にも取材をしていたが、こんな表現を使った人物はいなく、この少年だけが「消してくれる」という表現を使っているのだ。根来は、さっきからその事を無意識に発見していたのだ。

ここが根来の記者の感覚を刺激してきた。変化しない噂の中で、たった一人だけ妙な表現を使う者がいる。ここ数日、とにかくサンブルをとるために百は確実に超える取材を敢行した根来の対象人物に、少年以外このような表現を使った人物は一人もない。この広い東京で一人もないにも拘らず、この少年だけが異質な答えをしている。この少年は、何かを知っている。バンニップを目撃したか、或は記憶を消す行為の意味を知っているのではないか、そんな推論が彼の頭の中で次第にでき上がっていく。

「こいつは、もう一度取材してみる価値があるな……」

記憶を消すなど、にわかには信じられない事ではある。しかし、

変化しない噂が限定された範囲で広がり続け、一人の少年だけが異質な回答している。これだけでも十分奇妙な話だ。記事とは全く関係のない考察になるが、根来はどういうわけか、この案件の虜になりつつあった。

少し資料を調べてみようと思い、引き出しの中を探している内に、一冊のファイルを落としてしまった。あまり細かい整理はせずにも何でもそこに放り込んだ結果、些細な衝撃で中の物が床に散らばってしまった。

「あ、畜生め、やっちゃったか」

仕事に興味がわいている時に、それに水をさすようにミスをした。かした事に舌打ちをしながら、根来は散らばった資料を整理し始めた。自分の原稿やスクラップ記事、資料、そして写真などである。ファイルに無造作に挟み込みながら片付けていくと、彼に興味を引く物が目に入った。

「おお、懐かしいな。姫矢の駆け出しの頃の写真か」

姫矢准。根来は昔この若手写真家に注目していた。彼が撮る写真には見るものを惹きつけると言うより、自ら語りかけてくるような力があつた。彼が勤めていた会社に根来の知り合いがいて、それがきっかけであり合う事ができ、彼も根来の事を人生の先輩として色々と相談してくる事があつた。

純粹すぎる。根来の姫矢に対する評価である。仕事に対しても一切の妥協がなく真剣。フアインダー越しに見る世界にも誠実に向き合う。だからこそ彼が素晴らしい写真が撮れる事を、根来は納得できるのであつたが、それと同時に、彼のその姿勢に懸念を覚えずにもいられなかった。仕事に真面目に取り組むあまり、自分を納得させられないのである。やるだけやったのだからこれでいいんだと納得しないと、仕事などはいつまでも経つても終わらないし、後ろ髪引かれる思いを引きずり続ける。しかし、姫矢はそれができなかった

た。写真を撮ること、社会に何かを発信したいと言う思いが強く、会社の仕事で要求された写真だけを撮るだけでは納得できず、これでいいのかという焦りが彼を追い詰めていった。根来も、彼の仕事への姿勢を否定はできなかったが、あのまま思い詰めるなどこまでいくかわからない危なっかしさもあり、大人になれと諭したこともあった。姫矢の純粋さは、思いこんだら周りが見えなくなるほどのめり込む十代の少年の様な所があったからだ。しかし、姫矢は自身に嘘をつけず、自分の撮るべきものを求めて、海外勤務を希望した。

そして、しばらく経ち、姫矢准の名を世に知らしめた戦場の少女の写真が撮る事が出来たのだが、皮肉にもそれが彼を苦しめる事になった。世界に何かを発信したいと言う思いで彼がカメラに収めた被写体は、意図しなかった戦場での若い少女の死。そして、彼はその少女の死で名声を得た。世の中から見れば普通の事であっても、純粋な彼にとっては重すぎる十字架となった。やがて、姫矢はとてつもなく重い罪悪感に苛まれ、カメラを置き姿を消した。

「姫矢よう。お前の写真は人々に命の尊さ、戦争の悲惨さ、そしてこの少女が何を思っただけで戦場をかけたのかを世間に考えさせ、問いかけ、真実が何かを気付かせようと言う力を持ってるんだ。お前も、そんな人々の姿に気づけよ……」

根来は、姫矢の写真の順を追って見返してみた。就職した頃のものでは、会社の取材で行った航空自衛隊の航空祭の写真が出てくる。戦闘機などを移すカメラマンが多い中、姫矢の写真は人を写しているものが多い。空を飛ぶという特殊なスキルを持つ事に胸を張っているパイロット。パイロットや空を見上げている観客。日の目を見ることなく、縁の下で力持ちであるプライドを持ったプロフェッショナルの整備士。戦闘機をバックに息子を抱きながら妻と一緒に写るイーグルドライバー……。やはり、姫矢は人間を撮りたかったのだと根来は痛感した。しかし、要求されるのは情報としての写

真。追い詰められるのも無理はなかった。政治や社会の暗部に取り組んだ写真を撮ったのも、そこにいる人間の姿をリアルに炙り出し、世に問いかけ続けたのだろうが、若い姫矢の精神は、その誠実さの余りに苦悩に押しつぶされていったのだろう。アメリカに渡っていた頃の写真には、果てしない道を夕日をバックに疾走するライダー、立ち寄ったガソリンスタンドの陽気な親父、海岸で一人寂しく何かを思いながら海を眺める少年……。

根来は懐かしい思いで写真を見ていると、どうも頭が痛くなってくるのを感じた。少し、仕事に熱中し過ぎてパソコンの画面を見過ぎたせいだろうか。寝てしまえば治るのだが、もう少し仕事をしたい根来は、痛み止めでも飲もうと薬箱の所に向かった。あまり使う薬もないのですぐに見つかったが、薬のそばに妙なものを見つけた。メモリースティックである。根来は仕事柄様々なデータを保存する際、重要なデータが多いため、慎重すぎる程の何重ものバックアップを取る。一度、大事なデータがハードディスクから紛失して痛い目に遭っているため、パソコンのハードドライブの他、DVD-ROMが2枚、メモリースティック二つ、それに外付けハードディスクと神経質なほどにバックアップを取る。だから、家にメモリースティックがあっても当たり前なのだが、薬箱に保存する習慣はない。

「こんなところに入れたっけか、俺」

奇妙に思った根来は薬を飲むと、メモリースティックを持ってデスクのパソコンに向き合った。その時、彼が踏んだ写真、姫矢のアメリカで撮影した写真に写る少年の中に、バンニップは記憶を「消してくれる」と表現した少年、千樹憐が映っていた事に根来は気付かない、いや、見ても気がつかなかったであろう。

スペースビースト殲滅を目的とする特殊任務班、ナイトレイダーの作戦室では、松永管理官とイラストレーターが、隊員達を相手に、今後の方針の説明をしていた。

「管理官、再編成とはどういう理由ですか。我々のこれまでの作戦行動に何か問題があると言うのですか」

「和倉隊長、そういう意味ではありません。メンバーをいじると言う事ではなく、ナイトレイダーの運用をもう少し有機的にして、小回りの利く態勢にしようと言う事です」

「おっしゃる意味がよくわかりませんが……」

隊長の和倉は、まだ話の内容が解せないと言う表情だった。副隊長であつた溝呂木真也の離反とその後の顛末は暗い影を落とした件はあつたが、そのほかの隊員には問題はなく、新人である孤門一輝は予想以上の成長を見せており、和倉としては今考えうる最高のユニットだと考えていた。そんな中での再編成と言う話は青天の霹靂だった。事態を飲み込めない和倉に管理官とイラストレーターは誤解を解くべく、説明を続ける。

「再編成については、イラストレーターから説明があります。本来なら、もう一人ここにいるべきなのですが、仕方ありませんね。では、お願いします」

「では僕から説明をします。バグバズンブローラーの一件から、次第に人口が多い場所での小ビーストの発生が頻発しています。しかし、巨大ビーストの発生も引き続き起こっている。それは理解していますね」

「はい、それは理解していますが」

「問題は、人員と兵器には限りがある事です。小ビーストに人員を割かれるとチェスターの使用に重大な支障が出ます。ここがウィークポイントとなる可能性も十分考えられます。そこで、考えているのがレッドトルーパーとの作戦の棲み分けです」

「レッドトルーパーですって」

「ナイトレイダーにレッドトルーパー、他の支部にもそれぞれユニットが設置されていますが、スクランブルの回数はみなさんが群を抜いています。そのため、ナイトレイダーはビーストへの対策の要になります。そこで、チェスターを使用する対巨大ビーストを専任してもらいます」

「我々が巨大ビーストを専任する理由は」

「最も大きな理由は、δ機です。δ機は試作機としてデータ採集の役目があるので、まだ実戦配備されているのはナイトレイダーだけです。メタフィールド、ダークフィールドGという環境で安全かつ機能的に活動するには、ハイパーストライクチェスターが最も安定しています。そのためのナイトレイダーの推薦です」

「そう言うことであれば、話はわかりました。ですが、レッドトルーパーの方には……」

和倉がそこまで言いかけると、コマンドルームのドアが開き、一人の男が入ってきた。ナイトレイダーが青が基調の隊員服なのに対し、黒地にワインレッドの色が施されたレッドトルーパーの制服を着たその男は、肩幅が広くたくましい体を揺らし、顎にはひげを蓄え、実にワイルドな雰囲気醸し出していた。

「遅れて申し訳ありません。レッドトルーパーを代表し、隊長、小

林敏夫、ただ今参りました」

必要以上に大きい声で挨拶をすると、小林は孤門の隣にどっかりと腰を下ろした。ナイトレイダーの面々とは明らかに違う雰囲気の小林の迫力に孤門は圧倒されてしまう。それでも、以前の職場の上司に似たイメージもあるので嫌いではなかった。

「小林隊長には、大幅な任務変更になるので、先に案件は伝えてあげましたが、問題ありませんね」

「管理官、全く問題はありません。隊員達も作戦対象が限定されるなら、却って行動はしやすいと言う事で意見は一致しております。それに加えて、実践装備された光学迷彩がありますので、うってつけの任務です」

「わかりました。では、双方の隊長で話し合いをお願いします。わたくし達はこれで失礼します」

イラストレーターのホログラムが消え、松永も退室すると小林は一気に緊張感をほぐし、見かけどおりのあけっぱりな態度を表に出してきた。

「和倉よう、まさかこんな形の業務提携になるとは、正直驚きだぜ」

「俺もだ。最初は、背広組に現場を引っかき回されるんじゃないかと冷や冷やしたがな。この最高のメンバーをいじられてたまるかよ」

和倉はいつになく饒舌で、普段の勤勉な雰囲気とは明らかに違っている。これも、和倉と小林の付き合いが長い上に仲が非常によく、二人の間では組織の縛りが一切ないからだ。

「和倉、チェスターでビーストと戦うのは危険度は高い。それでいいのか」

「まあ、スクランブルの回数が多いせいでもう慣れている。だが、生身をさらす都内での活動も危険度は変わらないだろ。機密保持の制約も多くなる」

「それなんだよな。ま、それはイラストレーターの指示に素直に従って、現場で考えるさ。光学迷彩の投入もでかいしな。おう、孤門。新人隊員って聞いて、最初は何だか頼りないと思ってが、今じゃ貴重な機的主要パイロットとはな」

いきなり話を振られた上、背中を力強く叩かれた孤門は、言葉もまともに返す事も出来ず、ただ圧倒されるしかない。

「はあ。あ、ありがとうございます」

「馬鹿野郎、褒め言葉を真に受ける奴があるか。若者は怒られて育たなきゃいかん。怒られている内が華だからな」

「どうも……」

言うだけ言うと、小林は席を立ち、和倉とあいさつを交わしながら部屋を出ていった。

「じゃあ、お互いに頑張ろうな、和倉。孤門、氣い抜くんじゃねえぞ。それと西条。たまには笑えよ、美人なんだからよ。じゃあな」

小林は、まさに嵐のように去っていった。たまには笑えと言われた風は、どうしたらいいかわからず、手当たりて周りに当たり散らす。

「隊長、何か言いたい事でも。孤門隊員、何を見てるの。石掘隊員、頼んだ資料はできたの。平木隊員、爪の手入れはオフにして」

風の怖さを知っているため、全員が無言で仕事に取り組む。たとえ手元になくても、仕事を作る。孤門と和倉は目を合わせると、和倉の方からウインクしてきた。どうやら、お互いに同じことを考えているらしい。触らぬ神に祟りなし、と。

「やっと終わったよ。余計な仕事が増えてえらい目にあつたよな」

「本当だよ。まさかあんなでかいネズミが出るなんてな。見た事ねえよ」

「都会のネズミは食い物がいいんだ。年中あたたかいし、どんどんでかくなるらしいぞ。人を怖がらなくて、逆に噛みついてくるものもあるし。憐、お前も部屋を綺麗にしとけよ。お前の部屋ならまだしも、今日みたいに調理場に出てこられると、面倒だからな。食中毒が出たら、営業停止になっちまう」

「わかってるつて。じゃ、もう上がろうぜ。また明日な」

「ああ、じゃあな」

そんな会話をしていた二人の少年は、それぞれ別の帰路についた。一人は園外へ、憐と呼ばれたもう一人の少年は園内にあるスタッフルームへとそれぞれの家路を歩いている。

千樹憐。根来の取材に協力し、姫矢准の写真の一枚に移り込んでいた少年は、ごく最近日本に訪れ、根なし草の様に放浪していたところを、現在勤めている遊園地内のレストランのマスターの針巢直市に拾われ、空いていたスタッフルームに住み込みで働かせてもらっているのだった。食費、光熱費、家賃を面倒をみてもらっている

ため、仕事も一つではなく、遊園地のあらゆる業務を憐は担当しているが、嫌がる素振りは一つも見せず、はつらつとした表情で仕事に励むため、同年代の同僚の尾白はもちろん、遊園地の職員全員から可愛がられていた。あらゆる仕事に前向きに励む憐ではあったが、さすがの彼もうんざりする出来事が閉園後に発生した。

いつものように、レストランの厨房の掃除をしていた際、大きなクマネズミが侵入してしまい、厨房の中を走りまわった後、外に出て姿を消したのだ。その事を針巢に報告した際、彼は食べ物を扱う人間として神経質なほどの反応を見せ、食器や調理道具はもちろん、厨房全体に徹底的に消毒をかけ、それを二度繰り返すという徹底ぶりを見せた。当然と言えば当然なのだが、一度清掃を終えかけ、もう帰るだけという段階でのネズミ騒動だけだっただけに、そこからすべてやり直し、しかも二倍の量の消毒作業に捕まる羽目になり、もう外はすっかり夜だった。憐は、ようやくねぐらのスタツフルームに辿り着いたが、空腹のあまり腹が鳴って仕方ない。しかし、ネズミ騒動でいつもなら持ち帰る賄いも針巢に処分するように言われて食べ物がなく、かといって間に合わせの物で夕食を自炊する気力も今日はない。

「コンビ二弁当で済ませるかあ」

憐は、部屋から財布を持ち出し、自転車に乗って最寄りのコンビ二に向かった。近くにコンビ二はないが、15分ほど走れば着く距離なのでそれほど遠い距離ではない。疲れ切った体で自転車をこぐのは面倒だが、静かな夜に吹く夜風が体に当たるのは気持ちいものである。萎えていた気持ちがいとし、ペダルをこぐ足に力が入り始めた時、ポケット中で何かが脈打つのような感覚を覚え、憐は急ブレーキをかけポケットから、小さなスティック状のものを取り出した。

エボルトラスター。ウルトラマンの光と同化するデユナミストにのみ扱える神秘の道具。それが脈打つ時、エボルトラスターはデユ

ナミストをビーストの許に誘い、ウルトラマンとしての役目を求める。そのエボルトスターが反応したと言うことは、ビーストの出現を意味するのだが、取り出したそれは沈黙を保っている。

「あれ、気のせいだったかな。最近多いよな、微妙な反応が」

周りも静けさを保ち、とてもビーストなどいるような気配がない。疲れているせいで、錯覚を覚えたのだろうかと思は訝りながら、再びペダルを漕ぎ始めた。

「なんだい、こりゃ」

根来は、薬箱から見つけたメモリースティックの中にあつたファイルを開き、そこに保存されていた画像を見て、驚くしかなかった。その被写体は、見たこともない戦闘機と、信じがたいほど巨大な生物との戦いだった。下らない合成写真かと思つたが、前後の背景や被写体との距離感、影や質感などを見ると、とても合成とは思えない。そうなると本物としか思えず、驚異的な写真であるのは間違いないのだが、根来自身にそんな写真を撮つた覚えがないので、どうしても釈然としない。いつもの習慣であるバックアップを調べてみたが、このような画像ファイルは存在せず、このメモリースティックのみにこのデータが存在するのだ。ましてや、電子記録に関しては非常に几帳面な管理をする根来には、プライベートの画像を仕事の記憶媒体に紛れ込ませることは絶対にしない。つまり、この画像ファイルは彼自身で保存し、しかも見つけにくい薬箱にしまった事になる。「何で俺の手元に、こんな覚えのないファイルが、このメモリースティックに一つだけポツンとあるんだ」

考えても思い出せないし、段々頭痛もひどくなってくる。薬がま

だ効かないだろうと思ひ、根来はもつと念入りに画像を拡大して調べてみた。戦闘機は、どう見たって航空自衛隊の物に見えない。極秘に製造された新兵器だろうか。そうなると、日本は影で兵器を作っている事になるぞと、根来は考えてみた。それはものすごいスcoopなのだが、その戦闘機と交戦しているこの巨大な生物が気になった。どう考えても常軌を逸した存在だ。こんな生物がこの世にいてたまるかと根来は考えたが、こうして被写体として残っているのだから、この生物も実在している可能性がある。問題は、戦闘機は現実的なこじつけができるが、この生物はどう考えても、納得行く仮説を引っ張り出せない。

根来は、さらに食い入るように画像を拡大して画像を調べ、細部まで手掛かりを探そうとしていた。しかし、その作業を進める程、頭痛はひどくなり、次第に作業が続けられないほど痛みが激しくなっていく。これはまずいと、薬箱からもう一錠痛みどめを飲もうと立ち上がったが足元がふらつき倒れ込んでしまった。そして、そのショックが頭に伝わると、根来の視界は真っ白になり、自分の部屋の中ではない別の光景が挿入されてきた。何かを渡す男女の二人組、自分を追う黒いスーツの集団、青い服を着た青年、不思議な三人組がいる部屋、どこかの地下施設、そこで出会う姫矢、そして眩い銀色の光を放つ人影……。それらが、フラッシュバックの様に視界に展開され、根来は息を呑んでそれらを知覚した。それは、誰かの行動を見たのではない、自分自身の視線で展開する光景、つまり一人称の物であった。そうなると、根来は記憶にないこれらの鮮明な場面に立ち会っていた事になる。

「何だった、今のは……」

自分の身に起こった事が理解できず茫然とするしかない彼であったが、頭痛はさらに根来を苦しめる。床の上で唸りながら苦しみ続けること、数分間。次第に痛みが引いていった根来は、ようやく平静を取り戻した。しかし、その目は見開き、顔には驚愕の表情が浮

かび上がっている。

「覚えている、俺は覚えているぞ。あの画像も、それにまつわることも、姫矢のこと……。」

根来は、床から跳ね起きると、メモリースティックや取材資料を鞆に詰め込み、部屋の電気を消し忘れるほどの慌てようで、部屋を飛び出していった。

憐は夜道をコンビニを目指して自転車を走らせていたが、再びエポルトラスターが反応したのを確信した。しかも、反応は弱いが確実に続いており、どこかにビーストが潜んでいる事は確かなようだ。

「飯どころじゃないな」

憐は方向を変え、自転車をこぎ出した。そのそばを一台の運送トラックが追い越していった。運送会社のペイントがしてあるが、実はこれがレッドトルーパーの移動指令室であった。人口密集地での行動のため、迅速に現場に移動するために、近郊に仮設の基地を増設し、そこから武器や通信、分析機器を搭載したトラックで彼らは現場に向かっていった。小林は、画面に移るイメージ画像のイラストレーターから指示を受ける。

「小林隊長、先程検知したビースト振動波は非常に微弱です。小ビーストにしても小さすぎる程の反応ですが、このケースはあまりありません。こちらでも位置は随時指示しますが、後はレッドトルーパーの足と目で調査する事になります」

「了解。光学迷彩使用の許可をお願いします」

「許可します。試験運用も兼ねていきますので、データ採集も並行して行います」

「わかりました。中山、塚本。バイク部隊、光学迷彩を起動し、出勤。嵯川と名古屋はこのまま俺と現場に向かう」

中山が無線で指示すると、了解と言う返事を変えてきた。小林達とは別の場所と待機していた中山、塚本両隊員は、隊員服を隠すために来ていた服を脱ぎ捨てると、バイクに乗りこみスイッチを押した。すると、彼らとバイクの姿は周りに溶け込み、完全に見えなくなった。これは、チェスターに使用されているオプチカムフラージュの技術を小型化し、隊員服や搭乗するバイクに搭載したものある。制限時間はあるものの、光学迷彩としてのレベルは非常に高く、人口密集地での活動には絶大な効果を発揮する。姿を消した二人は、小林達を追って現場に向かった。

トラックの中では、通信の名古屋を除き、小林と嵯川がプロテクターなどを装備し、デイトランチャーの準備を整えていた。レッドトルーパーはナイトレイダーとは違い全員が男性メンバーの構成で、通信、策敵、運転担当の名古屋以外は体の大きい肉体派で、見るからに陸戦部隊と言った風貌である。そのため、携行するデイトランチャーのような大型火器も幾分小さく見えるほどだ。

「隊長、もうすぐイラストレーターから指示されたポイントに到着しますが、ここはかなり人通りの追い所です」

「妙だな。これだけ人が密集する場所でのビースト出現とは……。
第一、目撃者が頻発するだろう」

「私に疑問をぶつけられても……」

「それはそうだな。イラストレーター、ここはあまりに人通りが多すぎます。ポイントに間違いはありませんか」

「ビースト振動波の発生地点に間違いありません。ターゲットも一直線に移動しています」

「一直線、ですか」

トラックは指定されたポイントについたが、人々の様子に騒ぎはなく、とてもビーストが発生しているように思えない。

「名古屋、策敵して、上空にレーダー感度を上げる」

「了解。……、隊長、反応は全くありません」

「やはりそうか。ん、待てよ。名古屋、レーダーを最高感度にして地下に向ける」

「了解。……、隊長、反応が微弱ですがあります。この車両から後方より接近しています」

相手は地下から来る、小林は何かに気付き、フロントガラスから前方を除き、何かを発見した。

「名古屋、あのマンホールの上に駐車しろ。嵯川、整備用の蓋をあけて、そこから地下に潜入する。敵は恐らく下水道を伝って移動して、出口を探しているんだ」

「わかりました」

「中山と塚本には、敵の後方からマンホールに侵入しろと伝える。下水道内は一本道だ、確実にはさみ撃ちにして仕留められる」

小林は適切な指示を部下に素早く与え、嵯川に続いてマンホールの中に飛び込んでいった。梯子を使う暇も惜しみ、壁面に足をつ

張らせて滑り落ちていく。下水道内は悪臭がひどく、ヘルメットをあらかじめフルフェイスにしていたのが幸いだった。

「フルフェイスじゃなきゃ、ビースト以前にこの悪臭でやられそうでしたね、隊長」

「まったくだな。まあ、この汚水も我ら人間様が垂れ流しているんだ。ビーストと同じくらい始末が悪いな。おう、サイレントモードにしておけよ。何しろ上は人でこった返している。ランチャーの音は派手だから、聞こえるとまずい」

「了解。若干威力は落ちますが、4人で狙い撃ちにすりゃ、小ビーストなら楽勝でしょう」

「馬鹿野郎、楽勝なんて現場にはないんだ。そう言う奴から先に死んでいくと思え」

「わかりました」

二人は、注意を前方に向け足を進めていく。暗い下水道の中は視界が悪く、いやがうえにも恐怖を喚起する。果たして、前方からどんなビーストが来るのか、小林と瑳川は背中に嫌な汗が流れるのを感じた。

「待て。何か来るぞ。音がする」

「確かに。中山と塚本が来るにしては早過ぎますね」

「ランチャーを構えろ」

緊張感が最高に張り詰めた中、二人は銃を構えた。逃げ場はない、最悪でも進行を止めなければ、命はないだろう。次第に足音が高く

なる。コンクリートに何かが擦れる音まで聞こえてくる。引き金に賭ける指が今にも引きそうになったその時、暗い下水道の中で、ライトに照らされたのはおぞましい生物の姿だった。

全身の毛が金属質の輝きを持ちながら輝き、長い尾を振り回し、口からはげっ歯目のような歯が突き出している。まさにその姿はラットのフォルムをしているが、ビースト特有の奇怪な生物感がより一層不気味さと恐怖を振りまいている。しかも、ラット類の特徴を持っているため、異常に足が早く機動力がある。

「撃て、奴の足を止める」

小林と嵯川は発砲を開始した。ランチャーを食らえば、大抵のビーストは殲滅できるのだが、体毛が固く変異しているため、攻撃がなかなか効力を発揮しない。しかし、冷静な小林は、体毛の少ないうえ、どんな生物でも弱点となる顔面を的確にとらえる。そのため、ビーストは前進を止めざるをえない。嵯川もすぐにそれに気がつき、標準を修正してビーストの顔面に攻撃を集中する。

しかし、足止めだけできても倒せなければ意味がない。ランチャーのエネルギーも無限ではないため、いつまでもこんなことは続けられない。焦りが生まれそうになったその時、後方からも攻撃が始まった。中山と塚本が合流したのだ。完全に挟み込まれた形になったビーストにも焦りが生まれ、挙動がおろおろし始めている。ビースト一体にランチャー4丁なら十分に勝ち目はある、4人がそう思ったとき、動きを止めていたビーストに変化が起こった。

金属質の体毛がさらに伸長し、尾が太く長くなり、鋭い歯がさらに刃のような鋭さを増していく。

「クソ、変異しやがった」

小林の危惧は最悪の形であたっていく。後方に展開していた中山と塚本は強靱な尾で薙ぎ払われ、コンクリートの壁面に叩きつけられた。防御力を増したビーストは、ゆっくりと前進し、小林と嵯川

との距離を詰めていく。ああ、これで殉職、二階級特進か。そんなあきらめが小林の脳裏をよぎった瞬間、守護神が現われた。

暗い下水道内に眩い光が走ったかと思われた次の瞬間、ビーストは何かに引きずられるかのように後方に下がっていく。ビーストの背中越しに小林が見たのは、光輝く銀色の人影だった。

「ウルトラマン、だと」

コードネーム・ウルトラマン。ビーストと戦う謎の存在。ナイトレイダーとも共同戦線を張れる知能を持ち、人に味方する者とTLTでは認識されている。ただ、小林が聞いていたのは、ウルトラマンは、「銀色の巨人」、「光の巨人」というように、ウルトラマンは巨人だという認識だった。しかし、今はこの狭い空間で、自分達と同じ大きさで戦っているのを見るのは、何とも奇妙な感覚であった。

ウルトラマンは必死にビーストの尾を引っ張っているが、それ以上の事はしない。一体彼は何を狙っているのだろうと小林は訝しかったが、彼と瞬間的に目があつた瞬間、その意図を理解した。

「嵯川、少しだけスリルを味わおうぜ」

「どういうことですか。……、隊長、やめて下さい。死んでしましますっ」

小林は佐川の腕を撮ると、ビーストに向かって駆けだし、口元の近くでスライディングし、腹下を滑って後方に回り込み、ウルトラマンの足元に辿り着いた。

「よう、あんた、なかなか味な真似をするじゃないか」

小林の言葉に、ウルトラマンは理解を示したのか、相槌を打つと、手にしていた尾を降ろし、大胆にもビーストの背中を前転しながら移動し、前方に降り立った。噂以上に、今のウルトラマンは怖いも

の知らずと言うか、大胆不敵な性格の様だ。

「全員ウルトラマンを援護。借りは今すぐ返すぞ」

その頃、根来は取り乱した様子である駅で下車していた。そして、息を切らせながら、夜道を必死に走り続けた。突然自分が見つけた、記憶の意味を求めて……。

人工密集地で展開するレッドトルーパーの車両の近くに、黒塗りの車が駐車してきた。メモリーポリスのものだ。これだけ人通りの多い所だけに、目撃者が多くなる可能性が高苦、いつも以上に緊張感が張り詰めている。首藤リーダーはレッドトルーパーとの連携を築くべく、通信で向こうの状況の確認をとる。

「レッドトルーパーへ。これより、M・Pもミッションに入ります。そちらの状況をお願いします」

通信を専用車両で受信した名古屋は、すぐさま周到に状況を伝える。

「こちら、レッドトルーパー。現在、小林隊長以下4名は、地下の下水道内にてビーストと交戦中。なお、この戦いにウルトラマンも介入。ビーストの画像は、すぐに送りますので、各員で確認してください。以上、状況報告を終わります」

「了解」

首藤リーダーは、状況の確認をとると、冷静に的確な指示を飛ばす。

「ビーストだけではなく、ウルトラマンもこの地下で交戦している。容易ではない状況だけど、情報の漏えいは許されないわ。三沢、瑞生は向こうの通りでバックアップ。それ以外の者は、私と一緒にレッドトルーパーが展開している周囲を徹底マーク。もし、目撃者が発生した場合は、……、各自の判断でメモレイザーの使用を許可します。責任は私が持ちます」

「了解」

M・Pは車から降り、それぞれで場所を割り振りながら、配置につく。人通りも多く、目撃者も発生しやすい中でのデリケートな任務が始まる。

その頃地下では、ラットタイプのビーストと、ウルトラマンとレッドトルーパーが連携チームが激しい戦いを展開していた。先程まで、この狭い空間がレッドトルーパーに負の要素であったが、ウルトラマンの介入で逆の状況に変わる。狭さゆえにビーストも方向を変えられず、前方にウルトラマン、後方にレッドトルーパーと言う彼らにとっては、またとない有利な状況になり、逆に双方に挟まれたビーストは逃げ場を失った。

ウルトラマンは、ビーストの最大の武器である鋭い歯をかわしながら、素早い動きで懷に飛び込み速攻を重ねて、少しずつ相手の体力を削っていく。レッドトルーパーは、ビーストがウルトラマンから逃げられないようにデイバイトランチャーの集中砲火で絶対に後退させない。

しかし、ビーストも黙ってやられるつもりはない。まさしく「窮鼠、猫を噛む」の格言通り、追い詰められたネズミの様な執念を見せる。特攻覚悟で前進し、鋭い歯でウルトラマンの胸を傷つけて弾き飛ばす。そして、後方のレッドトルーパーには長くしなやかな尾を鞭に様に使い、武器を叩き落としたり、隊員を吹き飛ばした。邪魔者が鎮まるとビーストは前進して、この場を逃げるうとするが、跳ね起きたウルトラマンが腕からパティクルフェザーを発射し、ビーストの肩に傷を負わせ足を止めた上で、前進を阻む。同じようにレッドトルーパーも体勢を立て直し、再び攻撃態勢を立て直す。肉体派の外見に違わぬタフさがこのユニットの大きな特徴でもある。

「中山、塚本。パルスブレイガーで冷却弾発射。奴の尾を凍結しろ」

「了解っ」

二人は、左腕に装着している索敵や通信用ツールのパルスブレイガーを180度回転させ、アタックモードに切り替えると、ビーストの尾の付け根に照準を合わせ、冷却弾を発射した。着弾と同時に凍結が始まり、ビーストの尾が凍りつき、その尾の付け根を狙って小林は発砲し、これにより脆くなっている尾は切断された。

「これで、こっち側は丸腰同然だな」

尾を切断されたビーストは、痛みに耐えかねコンクリートの液面に体をぶつけながらもだえている。その隙を狙い、ウルトラマンは真つはむ―部を使いながら体を回転させ、高速のスピッキクを固く鋭いビーストの歯に命中させた。回転を加えたことで威力を倍増させていたことで、ビーストの歯は粉々に砕け散った。攻撃機手段をすべて失い、逃げ場を失ったビーストは闇雲に全身を試みる。それを察知したウルトラマンは、一旦後ろに飛び下がって距離を作ると、腰だめの態勢を作って脇腹の辺りにエネルギーを貯め込み、クロスレイシュトロームの態勢に入り始めた。

「やばい、伏せる。吹き飛ばされるぞ」

小林はウルトラマンの構えを見て熱線の発射を察知し、部下とともに伏せた。汚水の中に顔や体を伏せるのは気分のいいものではないが、命には代えられない。その姿を確認したウルトラマンは、向かって来るビーストに向かってクロスレイシュトロームを発射した。着弾の瞬間に閃光が走り、爆発が起こる。

しかし、爆発や手ごたえの割に手ごたえが軽すぎた。爆風が止み顔をあげたレッドトルーパーの面々も、首をかしげていた。ウルトラマンとの共闘は初めてだが、ナイトレイダーのデータからある程度はその能力を把握している。あの熱線を食らって爆発すれば、四方をコンクリートで囲まれたこの空間には単一方向に爆風と炎が突

き抜けるはずである。しかし、予想以上に爆発が小さく、本当にビーストを仕留めたのかと言う疑問が拭えないのだ。

その疑問は、熱線を放ったウルトラマンの方が大きいようだ。手ごたえを感じなかったのか、辺りに注意を払い続けている。そして何かを察したのか、後方に向かって猛スピードで飛び去り、その姿は闇に消えた。

小林達は立ち上がり、地上に状況を報告した。戦闘員である自分達にできることはここまでだった。この周辺をしばらく調査し、索敵の結果相手が見つからないようであれば、地上に戻っていったん撤退するしかない。まだ敵がいなか辺りを警戒する彼らの足元には、凍結させて切断したビーストの尾が転がっていた。

ビルの間の細い路地裏。人通りからは目の届かない所にあるマンホールのふたが開き、中から人影が這い出てきた。変身を解いた憐だ。重い鋼鉄製のふたを元に戻し一息ついた憐だったが、すぐにエボルトラスターを取り出し、辺りにかざしてビースト反応を探している。

「あいつ、確かにこっち側に逃げた。俺の攻撃をかすただけでやり過ごして、姿を変えて逃げたんだ」

憐は、ゆつくりとエボルトラスターを周りに向け相手を探している。こんなに人がいるところでビーストを逃がすわけにいかないからだ。そして、本当にかすかな反応を見つけた。あまりにも小さいが、確かに反応がある。

「ネズミ退治はもううんざりだよ……」

今日だけで二件目のネズミ騒動にばやいてしまうが、危険度のレベルが違いため、今は追い続けるしかない。表通りに出てエボルトラスターの反応を頼りに、ビーストの痕跡を探す憐。しかし、注意

が手元に向けられているため人の流れに乗れず、通行人とぶつかってしまった。

「あ、ごめん。大丈夫」

「いえ、大丈夫ですか……、って、憐じゃない。どうしてここに」

憐がぶつかつた相手は瑞生だった。監視者と標的。元々そういう関係だったはずなのだが、憐の勘のよさやフランクな性格、瑞生の真面目で居ながらどこかが抜けている性格のバランスと、松永の彼らの人間関係が何を生むのかと言う過程を観察してみたいという関心もあって、相手に手の内が知られている上での監視を続けながら交友関係を築くという奇妙な間柄ではあった。互いに口にはしないものの、もう友達以上の存在として認識している。もっとも、瑞生は憐がデユナミストである事を知らない。

「あ、瑞生。え、何してるのそっちこそ」

「そ、それは仕事よ、わかってるでしょ。でも、こんな時間に憐が何でここにいるわけ。遊園地から大分離れているけど」

「ああ、それは、その……。ま、たまには賄いやコンビ二弁当じゃなくて、ちゃんとした食事でもとろうかと思って」

「独りで……。憐、あなた少し臭うよ」

臭うと言われて、憐は自分の行動に不審をもたれて、デユナミストだと言う事が勘付かれたのかと思った。一人の人間としての関係を築きたい憐にとっては、出来る事なら知られたくない事だった。でも、どうしても勘付かれたのだろう……。

「え、俺は別に怪しいことはしていないけど」

「それはわかってるわよ。そうじゃなくて、憐の服とか体から、変

な臭いがするわよ。ちゃんと、着替えてきたの」

「ああ、そう言う事……」

憐は自分の早とちりだった事に気がつき、一先ずホツと胸をなでおろした。下水道の中にいて、近くのマンホールからはい出てきたのである。臭って当然だろう。

「そんなに臭うかな。じゃあ、食事はやめてスーパー銭湯にしようかな。日本のでかい風呂って気持ちいいからね、ハハハ。瑞生、仕事の途中だろ、早くいきなよ」

「わかったわよ。じゃあね」

走っていく瑞生の後ろ姿を見て、憐はほつとした。デユナミストであることは知られたくないし、本当はこれ以上は彼女に秘密なんて持ちたくない……。彼女の姿を見ながら憐は考えていたが、気持ちを撮り直し、再びビーストの追跡を始めた。それに、瑞生が近くにいるならなおさらビーストを見つけて仕留めなければいけない。エポルトラスターを覗きながら、ポケットの中のブラストショットはいつでも撃てるようにしてある。後は、敵を見つけさえすれば……。

その時、前方から悲鳴が聞こえてきた。男の声だが近い。被害者が出てしまったかと思い、憐はあわてて走りだした。悲鳴があった所まで憐が駆けつけると、一人の男が倒れ込み転がりまわっていた。原因は、彼の太股に深々と噛みついていて大きなネズミだ。

「あいつだ……」

憐は確信を得たが、ここでブラストショットを使う訳には行かず、静観せざるを得ないのがもどかしい。男の悲鳴は激痛とネズミの異様な大きさや凶暴性からくる恐怖が混じっているのは明らかだ。このままでは、足の肉を食いちぎられかねない。

その時、のたうちまわる男に噛みついているネズミと憐の目があつた。敵の存在に気がついたネズミは、現在の力関係を認識したか、男から離れると野次馬の足元に飛び込んだ。周りはハチの巣をついたように大騒ぎになり、憐はネズミを見失いそうになる。しかし、エポルトラスタールはビーストの反応を捉え続けている。ついにその姿を捉えた憐は、ネズミを追って裏路地に向かって走り出した。そしてゴミ捨て場に飛び乗り、さらに壁面を登って行くとするネズミに向かってブラストショットを発射した。光弾が命中し、派手な光が飛び散る。しかし、憐は地下で熱線を撃った時と同じ手ごたえのなさを感じた。

「また、逃げた……」

憐は、着弾した壁の近くに近寄った。その時、足が何か弾力性のあるものを踏んだ。まさかと思い、恐る恐る足をずらしてみると、そこには一匹のネズミの死体が転がっていた。寄宿学校時代、マウスの解剖もした事のある憐にとって、ネズミの死体を触ることは別にどうということはない。手にとりその体を観察した憐は、そのネズミが地下で戦ったビーストと同じ個体である事を確信した。そのネズミは尾がちぎれ、ウルトラマンの攻撃で負傷した肩と欠けた歯があつたからだ。ビルの奥所を見回してもなにも見えず、ビーストの反応もない。

「こいつがビーストだったんじゃない。寄生されて、ビーストに変えられたんだ」

憐は、そつとネズミの死体をその場に置くと、表通りを覗き込んでみた。ネズミに噛まれていた男の足からはおびただしい出血があり、欠けた歯ではいえ相当深く噛みちぎられたのだろうというのがわかる。そこに、瑞生が駆け寄ってきて男の手当てを始めた。

「三沢さん、大丈夫ですか」

「瑞生か。すまない、リーダーに連絡しろ。俺に噛みついたのはネズミだ。そして、彼らが目撃者だ……。お前は、この意味がわかるな」

「はい……」

憐はその様子を見守っていた。どうやらあの男は瑞生の同僚、先輩のようだ。それなら、それなりの対応や手当をされるだろうと思い、憐はひとまず自分はこの場から去るべきだと考え、彼らがいる通りと反対方向に向かい姿を消した。

人気の少なくなった夜道を走っている根来は、息を切らせ、ほとんど足が前に出ないも関わらず、それでも走り続けると言う意志は衰えていない。少々太り気味になってきたこの体では、これだけ激しい運動を続けるのは拷問に近いが、今の彼にとってその苦しみなど些細なことであった。突如として自分の脳裏にひらめいたビジョン、記憶の意味を理解した根来は、もうじつとしていられないのだ。記憶の意味がわかれば、その確証をとりたい。そして、もう一度何をすべきかを確認したいのだ。

信号待ちで交差点で立ち止まった根来は、息を整えながら青になるのを待ち、次第に待ちきれなくなり飛び出しを敢行した。運悪く車が右折してきた肝を冷やし、けたたましいクラクションを鳴らされる羽目になるが、根来はそれもお構いなしに走り続け、とうとうある建物に辿り着いた。うらぶれた外見の建物の立てつけの悪いドアを音を立てながら開け、暗い階段を上って一つのドアの前に根来は立っている。ドアには、「世界UFO研究所」という、いかにも胡散臭い表札が掲げられているが、根来は全く躊躇することなく、ドアを激しく叩き始めた。「おい、あんたら。俺だ、根来だ。もう一度あんた達と話がしたい。ここを開けてくれ、頼む」

根来は叫びながらドアを叩き続けたが、中からの応答はない。もうここは空き家なのだろうか、根来は不信感と諦めの気持ちで肩を落とした。すると、カチャリと鍵の開く音がした。やはりここにはまだ人がいるのだ。しかし、いくら待ってもドアが開く気配はない。根来は意を決してそつとドアを開けた。中を覗き込むと、部屋の中は明かりもついておらず真つ暗だった。誰かいるはずなのに気配が全くない。もつと中を見ようと身を乗り出した瞬間、襟をつかまれて部屋に引きずり込まれ、みぞおちに思い一撃をくらった。根来はせき込みながら床に倒れ伏したが、追い討ちをかけるように背中に人が覆いかぶさり腕をねじり上げられ、根来は全く身動きをが取れなくなってしまった。

声も上げられず、体を拘束された根来の頭上で部屋の明かりがつき、眩しい光が目にし込んできた。根来は、唸り声をあげながら必死に声を張り上げ、自分の名を名乗った。

「俺だ、俺だよ。根来甚蔵だ。まさか、記憶を消されてこの顔を見忘れたとは言わせねえぞ」

そう名乗った瞬間、体を押さえつけていた重みがなくなり、辺りを包んでいた緊張感がなくなった。根来は息を切らせながら体を起こすと、そこには知っているあの三人の顔があった。以前、隠蔽されている世間の秘密を知ってしまった根来が、謎の組織に追われていた時に助けられたのがこの三人だった。山田、青野、広川、この三人は世界UFO研究所と言いかにも胡散臭い組織を主宰し、事実でつち上げの様なため記事を流していたのだが、それは仮の姿で、本当は世の中に裏側に潜む真実をある程度把握しており、それを強大な力でもみ消されないようにするためにため記事の中に真実を紛れ込ませるという方法をとっているのだった。記憶をなくしていた根来は、一連の秘密を知った上で関係を持った彼らの記憶もなくしていたのだが、すべてを思い出したことで、ここに再び

訪れたのだった。

「これはこれは。失礼しました、根来さん。まさか、あなたがまたここに訪れるとは思っていませんでした」

そう言ったのは、この組織を主催する山田と言う男だった。見るからに平凡な男で、仕事中也作務衣を着ている変わった男なのだが、眼鏡の奥に潜む目は凡庸な人間のものとは思えないほど鋭い光を携えている。

「俺だって、まさか会えるとは思ってなかったよ。何しろ、記憶を消されちまってたんだからな」

「そうだと思いましたよ。あれ以来、音沙汰がないんですから。ま、あの組織に喧嘩を売れば、我々の様に地下に潜るか、あなたの様に記憶を消されるか、二つに一つです。しかし、ここに再び現れたということは、あなたは記憶を取り戻した事になる。これは面白い」

「そうだろ。俺も、あんた達にここを出た後の事を話してやる。それと引き換えに、もっと深い情報が欲しい。こんな取引はどうだい」

「大胆なお人だ。だが、お互いにこっち側に足を踏み入れた者同士。ネットワークを築くのも悪い事ではない。その話、乗りましょう」

二人は顔を合わせ、にんまりと笑った。彼らは非常に近いタイプの人間の様だ。

TLETでは、レッドトルーパーとビーストとの交戦から得られた情報の分析と今後の対策が話し合われていた。レッドトルーパー隊長の小林も、ネットを介して会議に参加している。イラストレータ―は、これまでにわかった事実を検証しながら、分析を伝えている。

「今回都市部に現われたビーストは、ノスフェルに似た特徴を持っています。類似と言うレベルとは言えないほどの変異を遂げています。まず、このビーストですが仮にノスフェルバスターと呼称しましょう。ノスフェルバスターの体は、ビーストと言えませんがこの点については石掘隊員から願います」

イラストレーターの指示を受けて、分析担当の石掘りがスクリーン上にデータを表示し、説明を始める。

「レッドトルーパーとウルトラマンと交戦したノスフェルバスターから回収された尾、さらに現場付近で死んでいたネズミの細胞は一致しています。つまりこれがなにを意味するかと言うと、あのビーストはただのドブネズミに過ぎないと言う事です」

「おいおい、待ってくれよ。俺達はドブネズミを相手にして命懸けで戦っていたのかよ」

小林は思わず大声をあげてしまったが、それも仕方がない。自分たちが、決死の覚悟で戦った相手がドブネズミと言われてはたまったものではないのだろう。小林の嘆きに石掘は苦笑いを浮かべながら、説明を続ける。

「小林隊長、核心はこれからです。確かにこのノスフェルバスターが残した痕跡はただのネズミ。しかし、交戦中に見せた戦闘力や生命力はビーストのものです。つまり、この時点までは奴はビーストだった」

「どういうことだ、石掘。話が見えないぞ」

「隊長、以前ノズフェルが関わった事件で、奴に襲われた家族の両親がビースト化した件がありましたよね」

その話を聞いて、孤門は唾をぐくりと飲み込んだ。彼の中でどうしてもぬぐえない記憶となっているあの家族の一件。彼は、ビースト化した両親を目撃しているし、あの家族の悲劇にも深く関わっている。そして、あのおぞましい記憶だけを残してすべてを忘れてしまった、自分が愛した女性と同じ名を持つ理子と言う少女。つい先日もその少女と再会する機会があったのだが、理子は記憶を取り戻した上で過去とも向き合いながら足を踏み出したのを知った。それでもあの事件の事は、孤門の中では負の財産として心にこびりつき決して繰り返してはならない戒めとなっている。少しだけつらい記憶をチクリと刺激された孤門は少し目を伏せがちに、話に静かに耳を傾けている。

「ノスフェルには、他の生物をビースト化する能力があった。恐らくバスタードの場合は、他の生物に憑依することでビースト化すると言う能力に変化させたのではないでしょうか」

「そうになると、次に現われた時は、どんな姿や能力、体の大きさをしているのかわからないと言う事が」

「そう言う事になりますね、隊長」

「いっしー、それってビーストまで現れるまでこっちは待つしかないってことになるじゃない。いっどこにかもわからないし。姿も形もわからないんじゃないあさ、推理のしようもないでしょ」

「俺にそう言われてもなあ」

詩織の核心を突く指摘に、石掘は頭を抱えるしかない。しかし、相手の姿も特徴も場所も特定できずに出現を待つと言うのは、複数のビーストを相手にするのと変わらない状況だ。容易ならざる事態に、和倉も小林も部下の命を預かる身としては、あまり歓迎すべき

事態ではない。

「イラストレーター、この点については何か対策はありますか」

「ないことはありません。どんなに姿が変わっても憑依する者が一緒である限り、ビースト振動波は特定の振動幅を示します。前回の戦闘で得たデータでビースト振動波は特定しています。ビースト化すれば通常の振動幅になりますが、前回のパターンを調べれば、憑依前の数値も明らかになります。かなり低い数値になるので、この受信にはレッドトルーパーに協力してもらう事になります」

「了解。イラストレーター、今度も奴は人口密集地に現われると思いますか」

「一つのビーストの戦略は急に変わるパターンはありません。人の多い場所に現われる突破口を見つけたなら、それは彼らにとってまたとない好機。間違いなく、人口密集地に侵入するはずです」

「わかりました。レーダーの装備が終わり次第、捜査に向かいます」
小林は、自分達の任務が決定したため、その準備に取り掛かり始めた。ここで会議が終わりかと思っただ、風がイラストレーターに一つの質問をした。

「イラストレーター、一つ質問があるのですが」

「何ですか、西条副隊長」

「何故、ここにきてビーストの人口密集への進行が始まったと思いますか。そして、何故これまで人口密集地に巨大ビーストは現われなかったのですか。これまでできなかったのなら、なぜ今はできるのでしょうか」

「それらに関しては答えられる部分と答えられない部分があります。最初の問いである、今始まっている人口密集地へのビーストの侵入それは、彼らが突破口を見つけたから」

「突破口とは一体どういう意味ですか」

「彼らには、学習し自身を変化させる能力がある。人知を超える程のレベルです。それでも、今まで人口密集地に入ろうとしても入れないわけがあった。しかし、ある小さな穴を見つけて、彼らはそこを突破口にして、穴を広げていった。その結果、彼らは小型ではあるが都会に入り込む事が出来た」

「彼らを阻むものとは何ですか」

「それはまだあなた方には言えません。T.L.Tは秘密で成り立つ組織という一面がありますから、必要ではない事を教えることはできません。時が来ればそれはわかる。もしかしたら、それはそう遠くないのかもしれない。話せるはここまでです。では」

核心をはぐらかしながら、イラストレーターは姿を消した。何故、ビーストは人を捕食するのに、人口密集地に現われないのか。最前線で戦うナイトレイダーにとっては当然の疑問であった。核心はまだ開示されない。だが、進化を続けるビーストはその前提を破壊し始めているのは風も、他の隊員も感じ始めていた。

目覚ましが鳴り、憐は深い眠りから覚めた。ウルトラマンに変身した後はことのほか疲労度が大きい。傷の治りはまだしも、疲労の回復が段々遅くなっているのを憐は感じた。それが、光を手にした

者のリスクなのか、それともとより自覚している別の理由によるものなのか……。

体が重くすぐに起きあがる気になれない憐は、枕元にあつた携帯テレビのスイッチを入れ、寝ながら朝のワイドショーなどを見ていた。疲れている時の二度寝は格別である。

「……、東京都では近年増え始めている外来種の繁殖、またペットの投棄などが深刻化しており、対策が求められています。次のニュースです。昨晚、都内の路上で会社から帰宅する途中の会社員が、通り魔によって刃物で切り付けられ、足に重傷を負いました。被害者は命に別条はありませんが、数針を縫う怪我を負い、警察では目撃情報を得ながら犯人を追跡しています。……、さて、スポーツニュースのコーナーです。大相撲の来場所の番付が発表されました……」

昨夜の騒ぎは通り魔事件か。まず、間違いなく瑞生の仕事に関わる事だよなと憐は思った。あの場にいた者は大勢いる。通りまで片付くはずのない、恐ろしいネズミの凶行を多くの者が目撃しているのだ。だが、その事を憐が考えても仕方ない。今は、自分の思う通り自分らしく生き、必要とあらばデユナミストとしての役目を全うするだけだ。それ以外にはない。

ギリギリまでベッドに潜り込んでいた憐だが、そろそろレストラの準備の時間になるので、ベッドから抜け出すとパンをかじりながら牛乳で飲みこみ、自宅兼スタッフルームの建物を出て出勤した。途中で尾白とも合流し、昨日のネズミ騒動の事を苦笑いしながら話し合っていた。すると、いきなり大きなクマネズミが彼らの足元を横切り、二人は思わず悲鳴を上げてしまった。

「何だよ、尾白。そんな声を出して、みっともねえだろ」

「うるせえよ。いくらなんでもあれはでかすぎるだろ。お前だって悲鳴あげたくせに」

「昨夜は、もつとでかいネズミ相手にしたんだよ……」

「なんか言ったか、憐」

「いや、なんでもない。はあ、ネズミはもういいよ」

憐は肩を落として、レストランへ向かっていった。今日も念入りの消毒から仕事が始まる。

一晚をUFO研究所で明かした根来は、目をこすりながら仕事の原稿を出版社に送ったところだった。これで気兼ねなく、個人的な興味に取り組める。根来は昼近くまでソファでいびきをかきながら寝ている山田を起こし、いい加減に大事な事を聞かせるとせがんだ。

「おい、山田さんよう。いい加減に起きろよ。さんざん飲ませながら話を聞いて、勝手に寝ちまうなんてよ。お宅からの話も聞かせなよ」

「わかりましたよ、根来さん。ま、煙草を一本吸わせて下さい。話は長いですから、のんびりと行きましょう。あの二人は」

「とつくの昔に表の仕事に出勤だよ。あんた、一体どんな生活を送ってた。何だ、煙草は吸ってもいいのか」

「構いませんよ。ここは三人だけの秘密クラブみたいなもんです。全員喫煙者なのに、禁煙にする必要もない。遠慮なくやってください」

い」

喫煙者でありながら、禁煙エリアや諸事情で煙草を普段吸えない根来にとつてはありがたい事だった。ポケットから煙草を取り出し、ライターで火をつけると、深々と煙を吸い込み、ゆっくりと煙を吐いている。山田も、実にうまそうに煙草を吸っている。

「では、話を始めましょうか。根来さんの話によれば、ここを出た後、我々が教えた戦時中の地下通路を使って新宿の地下にもぐり込んだ。そこで、正体不明の生物の触手の様なもので襲われ、そこにあなたのお知り合いである姫矢と言う男が現われた。そして、彼は銀色の巨人に姿を変えて闇に消えていった。その後、彼は帰ることはなく、地下を放浪していたあなたは組織に捕まり記憶を抹消された」

「ああ。その後、公園のベンチで目を覚めました。その前の晩、酒を飲み過ぎたつていう記憶を植え付けられてな」

「あなたは本当に核心に迫ったようですね。これは有益な情報だ。そうになると、契約通り私の事もお話ししよう」

いよいよ根来が一番聞きたい事に触れる時がきた。彼がここに駆け込んだのは、秘密を共有する仲間が欲しかったこともあるが、自分以上に情報を握っていそうな彼らの事を知ること、さらなる真実を知りたいと言う思いからであった。それはネタをつかみたいなどと言う俗なものではなく、純粹に真実に対する探求心から来ていた。「今から二十年前、アメリカのコロラド州に不時着した未確認生命体のもと思われる墜落事故の様なものが起こりました。そして、正体不明の生物による最初の事件が発生。これは以前にお話ししましたね」

「ああ。だが、考えてみたんだが、何であんたがそんな事件を察知

できたんだ。俺と同じ日本人、しかも同じように風体の上がない
なりをしてるあんたがさ」

「ははは。風体の上がないは良かった。なかなかユーモアがあり
ますね、あなたは。実を言うと、日本人じゃないんです」

「何だつて」

「本名はウェイ・チャン。元FBIです」

意外な答えに、根来は口から煙草を落としてしまった。まさか、
この作務衣を着た中年男性が元FBIとは、驚きどころかにわかに
信じられない。

「そうはみえないでしょう。中国系アメリカ人なんですけどね。で
も、それでいいんです。まあ、この風貌ですから、日本で活動する
分には却って都合がいいんですよ。名前も山田、地味でいいでしょ
う」

「それなら、アメリカの片田舎で起こった秘密の事件も嗅ぎつける
だろうな。でも、何でそれを今も追い続けているんだ」

「友人を追っていたんですよ、私は。あの事件が起こって間もなく、
私の同僚が行方不明になったんです。日系アメリカ人のアラン・K・
クドーという人物でしてね。しかし、FBIの捜査官が突如行方不
明ですよ。普通の事じゃありません。彼が友人だった事もあって、
私が担当し徹底的に追ったんですが、間もなく捜査は上からの命令
で打ち切りです」

「それも、何かの圧力があつたためだと」

「子供でもわかりますよ。真実を追うべき立場の者がそれを止められる。普通の事じゃありません。ただ、行方不明になったのが友人であり、私も若かったですからね。独りで地道に捜査は続けた。X - F I L Eの世界を本当にやったわけです。それでわかったことですが、友人は特別なセクションに配属されていたんです」

「特別なセクションってどんな所なんだ」

「信じられないと思いますが、E S P部門、つまり超能力による捜査を行う部門です。これは真面目な話です。アメリカは極秘且つ、調書には載せないことを前提に超能力者を集めて、捜査に参加させているんです。内部にいた私が言ってます、信じていただきませんか」

「超能力……。まあ、怪物やら巨人やら見てしまうと、案外世の中なんて何でもありかもしれねえな。いいよ、信じるから話を続けてくれ」

「ありがとうございます。信じてもらわないとこの先の話ができません。この事実が彼が失踪して数年後に知った事です。そして、友人はどうもこの能力に目をつけられて姿を消したようなんです。命令書を漁っていくと、失踪する数日前にダラス行きを命じられていた事がわかりました。ダラスは色々な噂があつて、U F Oやらエイリアンの研究基地があるとか言われている曰くつきの所です。日本のことわざに「火のない所に煙は立たない」と言うものがあります。が、まさしくその通りです。そこが始まりだったんです。ですが、それつきり足取りもつかめなければ、手がかりもない。そんな状態が続きました。私も疲れ果ててF B Iを辞めました。隠蔽やら陰謀やらにうんざりしましたからね。そんな私を叩き起こしたのが、五年前です。五年前と言えば、日本で大事件がありましたねえ」

「新宿第災害の事か」

「そう。日本の大都市のど真ん中である東京の新宿に隕石が落下し、死傷者を多数出したあの災害です。日本はもちろんでしたが、海を超えたアメリカでも大きく報道されました。ですが、その距離感が絶妙だった。組織の大がかりな情報操作はそこから始まっている。5年前以前にはありません。それは間違いない。隠蔽しようと当たり障りのない理由を取り繕うとすると、必ず無理が生じる。完璧なものなどないのに、完璧に隠そうとするからです。しかも、どうしても隠したい事実あるから、無理に躍起になる結果です」

「何が言いてえのか、意味がわからねえな。新宿第災害の何が不自然なんだよ。あれだけの死傷者が出て、嘘もくそもねえだろ」

「では、その隕石は誰が回収したのか。どこに持ち込まれたのか。いくら災害をもたらしたとはいえ、人類にとっては貴重なサンプルだ。でも、その回収先も分析結果も何も出てこないのはおかしいでしょう。しかも、隕石が落ちたなら、この国の自衛隊の生化学のセクションが動くはずだが、その記事がない。日本のどの新聞を見ても、いや、世界のメディアを見ても、この事件の報道は完璧すぎるんです。隕石が落ちた、その一点で終始している。あの9・11だって、今でも陰謀論などが噂に上がり、本まで出版されているに關わらずにですよ。でも、大災害の犯人は隕石だ、その一点張りです」

「一つの情報で終始する……」

根来には心当たりがあった。バンニップの噂だ。当たり障りのないシンプルな都市伝説が、全く形を変えることなく、世間を漂い続けている。それ自体が生き物のように、まるでバンニップそのものの様に。噂や情報に意思が加えられたら、それは生き物の様な動きをする。メディアに携わる根来にとって、それは突飛な仮説ではな

い。いい加減な情報であつたとしても、人々が情報を求める意思と一体化すると、それは暴力を撒き散らす生物の様に世間を暴れ回り、時には死にまで追いやることもある。まさに、情報が生き物となつて、弱い人間を食い殺した。根来にはそう言う思いが今ならできた。「チャンさんよ。今の話は、メディアに携わる俺だからこそ、同意するよ。意思を受け取つて人の手を離れた情報が、どんな生き物になるか想像もつかない。幸福をもたらすこともあれば、不幸もたらしもする。俺は、そんな商売で飯を食っていることが今ほど怖いと思つたことはない」

「意思を持つ情報は生き物。面白い仮説です。でも、そうだとするなら、あの大災害の後に与えられた情報は、本当にあつた事件の姿を消し去る役目を追つた生物なのでしょう。それを放つたのは組織です。問題は、何故その情報と言う生き物を放つたか、そこが問題です。先ほど言いましたよね、アメリカはほどよい距離にあつたと」

「その意味を教えてもらおうか」

「アメリカにとって新宿大災害は、もちろん同盟国である日本で起こつた大事件ですから、大きく報道されましたよ。でもね、やっぱり対岸の火事なんです。やはり、事件の起こつた国ではないから報道は少し醒めていて、早めに沈静化する。あの阪神大震災ですら、たつた二月後の宗教団体によるテロでかき消されてしまふほどだ。海を超えればもっとあつさり熱は下がっていく。でもね、その分だけ小さな話題として人知れない場所に散逸する。そのせいで大災害の情報隠蔽による大量の嘘情報の中に紛れ込んで、その小さな話題が生き残ってしまった。ネットは大海のようなものです。ネットサーフィンなんて言葉があるくらいですから。その大海に投げ込まれた瓶の中の手紙を拾つたのが今の仲間の二人です。彼らとは、ネットを介した友人でしてね。世間に眠る都市伝説や秘密の話題などを

共有するサロンの様なものを作っていました。そこで彼らに教えてもらったのが、新宿第災害に関する奇妙な伝説です」

「奇妙な伝説って、なんだよ」

「新宿を襲ったのは巨大な生物。それを銀色の巨人が倒したんだと」

「何だって……」

巨大な生物と言うのは、根来が所持していたメモリーに移っていたもの、そして彼自身が遭遇した謎の生物だ。そして、銀色の巨人と言うのは姫矢が変身したあの姿そのものではないか。驚愕の事実を聞くにつれ、根来の心臓は高鳴り、口の中がからからに乾いていた。

「根来さん、あなたの話と完全に繋がりましたね。おさらいしましょう。事件の始まりは20年前のアメリカコロラド州の事件。そして私の友人の失踪がそれに関わっていた。大きく事態が動き出したのが五年前。あなたの証言でこれは事実と言う事になった。そして現在。あなたは巨大生物、秘密組織、そして巨人というすべてのピースを一つにつなげた。たった一人で、しかも自力でね。これを成し遂げたのは、世界であなただけです」

「とんでもない世界に足を踏み入れてしまったんだな。俺がすべてを知ったとなれば、あいつらは何をしてくるかわかったもんじゃない」

「怖いですか」

「そりゃあな。でもな、何かをすべきじゃねえかってう思いが今の俺にはあるんだ。前の俺なら、特ダネをつかみたいなんて言う思い

だけで突っ走っただけだな」

「ほう、どういう心変わりをされたので」

「昨夜話した姫矢って言う奴の事さ。俺は、あいつの仕事に対する姿勢を青臭いとか、イライラするとか、理解しきれない部分があった。あいつの純粹さに嫉妬していたのかもしれない。でもな、記憶を消されてまた真実を追う過程で、真実を求める事の壮絶さを知って、俺はあいつの心がわかった。戦場にまで足を運んで、自分の心を追い詰めてまでシャッターを切り続けたのか。あいつはただ真実を掘り当てたかったんじゃない。その真実に辿り着くまでの人々の思い、そして、真実が何かを生み出す事を目指してそこに殉じたんだなって。まあ、殉じたと言っても、どこかでまだ生きてると俺は信じてるよ」

「会ってみたいですなあ、その人物に。いやいやこれは興味本意ではなく、一人の人間として彼に会ってみたいと言う意味です。で、根来さん、あなたは何をなしますか」

「食うために書くのは変わらないよ。お宅らみたいに、地下に潜るのは性に合わない。」あなたの今回の取材しているバンニップの件、元々情報を流したのは我々です」

だが、俺も姫矢のように、人々に世界の真実を直接伝えるのではなく、一つのきっかけから真実を考えるような記事を書いてみるよ。ペンが俺の武器だ。そうだ、このメモリーはあんた達に渡しておく。情報の扱いはあんた達の方が向いている。次は守りきれるかかわからないからな」

「責任を持つてお預かりします。我々は情報を見つけてそれを発信

する術を持っているが、それに魂を吹き込む術がない。人の意思を呼び覚まし、情報に真の魂を吹き込むのはあなたの仕事です。お互いに、頑張りましょう」

「おう。それじゃあな」

根来は荷物をまとめ、部屋のドアに向かった。その時、チャンが根来を呼びとめた。

「根来さん、最後に一つだけ」

「わかった。気をつけようぜ」

根来は少し冷や汗をかきながら、建物を後にした。自分達とも組織とも違う謎の意思一体誰だ。そんな問答をしていたせいで、思わず横断歩道に足を踏み出してしまっていた。そこに、トラックが左折してきて、また根来は轢かれそうになった。トラックのドライバーから怒鳴られ、根来は頭を下げながら額の汗を拭い、家路について。今日は、駅も変えてタクシーやバスも使い、金がかかっても帰り道を変えた方がよさそうだ。落ち着きを取り戻せない根来は、その心に決めた。

根来の飛び出しに焦ったのは、レッドトルーパーの車両だった。交代で運転を変わり名古屋が担当していたが、いきなり左右を確認もせず不用意に横断歩道に踏み出した中年男性が目に入り、急ブレーキをかける羽目になった。大型車両ゆえに衝撃は大きく、精密機械を積んだトラックは大きく揺れた。

「馬鹿野郎、死にてえのか」

怒りのあまり、クラクションを鳴らし窓まで開けて名古屋は怒鳴り散らした。普段は温厚な彼が怒号をあげる事態に、小林が後ろから顔を出してなだめる。

「名古屋よう。俺達は隠密部隊だ。こそこそやるのが仕事のカラー

なんだから、庶民の方に怒鳴るなんてことをしちゃあいけないなあ」

「しかし、隊長。色々な計器を積んでいるんですよ。しかも、ミッション中なのに」

「わかったわかった。俺が運転代わってやるよ。ほれ、昼飯代わりのファーストフード。ポテトとコーヒー付きだ、すげえだろ。ま、これで機嫌を直せ」

「ガキじゃないんですから。でも運転交代はお願いしますよ」

「それでいい、それでいい。腹が減ったらイライラするだけだ」

歳の功がなせる業か、気の長い小林は名古屋と運転を代わるとトラックの運転を再開した。ミッションは長い。何しろ姿のわからない相手を探して都内の一部とはいえ車を当てても流す必要があるのだ。気長にかからないと、やっていられないのが実情なのだ。運転中は計器を見ることもないので、気分転換に小林は、車に持ち込んでいた携帯音楽プレーヤーを車につないで、BGMを流し始めた。男臭い風貌に全く似合わず、音楽は軽快なユーロビートだった。

夕方になり、遊園地の閉園時間が近づいてくる。客足が途絶え出した頃を見計らい、憐と尾白は政争に入る。今日も念入りな消毒があるため、少しでも時間を稼いで、帰宅したいためだ。憐の様子を見て、京の監視ミッションは終了と判断した瑞生は、席を立ち帰り支度を始めた。その様子を見た憐は、当たり前前の様に声をかけてくる。

「瑞生、もう帰るの」

「帰るって言うか、これも一応仕事だってこと、覚えてるの」

「あ、そうだったね……。もしかして、昨日の仕事の続き」

「そのことはあまり口にしないで。それに、あなたは監視対象なんだから、あんな場所にいと疑われる事になるから気をつけて」

「瑞生達がどこで仕事するかなんて、俺わからないよ。でもわかった、気をつけるし、瑞生の仕事の邪魔はしないから。気をつけて」

「……、ありがとう。それじゃあね」

瑞生としては、監視対象である事を知っていながら、自分に対して自然に接してくれる憐の姿勢が嬉しくもあり、心の重荷にもなっている。もちろん憐の事は嫌いではないし、寧ろ好きと言う気持ちには自覚しかけている。それ故に、仕事上で憐と接しなければいけない事がつらいし、自分の仕事に対して理解されるのも心苦しいのだ。なにもない状態でもう一度出会えればどんなに気楽か。そうすれば、もつと自分の素直に憐と向き合えるのに……。

そんな瑞生の後ろ姿を憐はずっと見送っていた。人の気持ちがわかり過ぎる程わかってしまう憐にとっては、彼女の後姿が語るその心が伝わっていた。

「瑞生、俺だつて同じ気持ちだよ。何も背負っていない俺だったら、もつと瑞生に近づけるのに……」

憐は目を伏せがちに仕事を続けた。平日なので客の帰りは早く、清掃も早めに取り掛かる事が出来たので、定時より少し遅いくらいで仕事を終える事が出来た。

「いやあ、今日は何事もなくてよかった。なあ、憐」

「ああ。でも、もしかして、またネズミがチュウと顔を出すかもよ」

「やめてくれよ。本当にネズミが苦手になりそうなんだぜ。憐、絶対部屋の掃除しとけよ。絶対出るぞ。お前、部屋をすぐ汚くするかな」

「わかったわかった。ちゃんとしとくから。じゃあな、尾白」

「おう、また明日な、憐」

友人と別れた憐は、自分の部屋に向かおうとしたが、引き返して自転車に乗って街に繰り出した。昨夜のビーストが出るような予感があるからだ。

「どうせ、あいつらの目的には、俺の事もあるんだ。出歩いていれば、向こうから来る」

生餌になる覚悟で、憐はビーストを探しに街へ向かっていく。どこまでも前のめりに、ひたすら前へ連は進み続ける。

TLT基地内では、イラストレーターがCIC内で、レッドトルーパーから送られてくる情報から、微弱なビースト振動波を探していた。現場に近い所から送られてくるデータを解析すれば、このCIC内で観測するより、遥かに細かい振動をキャッチできる。そして、その分析結果が映っている画面にわずかな変化を見つけた。

「かった」

レッドトルーパーによってかけられた細かい網の目にビーストがかかったのだ。反応は微弱だが、確実に存在している。

「イラストレーターよりレッドトルーパーへ。そちらの近くにビースト振動波をキャッチ。こちらのデータを転送し、位置の確認をお

願います」

「了解。……、これは公園ですね。かなり大きい自然公園です。現場は近くです。すぐに調査に入ります」

「わかりました。一般人の避難はすぐに行える状況ではありません。光学迷彩による隠密行動をお願いします」

「了解」

小林の返事を聞くと直ちにイラストレーターは、基地内に指令を送り始める。

「レッドトルーパーが敵を捕捉。M・Pは、直ちに現場へ急行。民間人の現場への接近を阻止してください。ナイトレイダーへ。ビーストは前回ウルトラマンと交戦しています。これまでのパターンでいくと、アンノウンハンドが介入してくる可能性は大きいと言えます。チェスター各機で出動。現場の指示があるまで、上空で待機してください。レッドトルーパーとの連携で柔軟な対処をお願いします」

「了解」

コマンドルームでは、ナイトレイダーの出動準備が始まる。プロテクターを装着し各自デイトランチャーを装備する。ものの30秒もかからずに準備は完了し、ナイトレイダー隊員5名はシューターブースに乗り込み、チェスターへと直送される。そして、スクランブルが出て3分もかからない内にクロムチェスター4機は、フオートレスフリーダムを発進した。

レッドトルーパーは、日が暮れて薄暗くなり始めた公園内を、

姿を消した状態で調査していた。まだ一般人が公園に残っている可能性もあるからだが、公園内の清掃という名目で、人はほとんど外に退去させられていた。後は、ビースト振動波を辿って本体を見つければいい。小林は索敵を行っている名古屋にリーダーの反応を確認させる。

「名古屋、ビースト振動波は公園のどのあたりから発生している」

「まだ反応が微弱なため、断定は難しいですが、中山隊員の周囲がわずかに高い数値がでています」

「そのデータを、全員のパルスブレイガーに転送しろ」

「了解」

小林の命令通り、各自にビースト振動波のデータが転送され、それを基に隊員達が振動波の発信源と思われる場所に、包囲網を狭めていく。どうやら、発信源は公園の池の中の様だ。

「中山、何か見えたか」

「隊長、何も見えませんね。反応はここいらあたりのはずなんですけど」

「恐らく奴さんは、水の中と言ったところか。ミーティングでもあったが、どんな姿をしているかわからんな」

「同感です。ん、隊長、池の水面に変化が」

中山の言う通り、池の水面に気泡が発生し、次第に数を増やし大きさも膨れ上がっていく。そして、ビースト振動波を示す値が大きく跳ね上がる。

「イラストレーター、ビースト振動波をキャッチ、並びにビーストの存在を確認しました」

「了解。攻撃に移ってください。上空にはナイトレイダーが待機しています」

「了解。全員、サイレントモードで発砲開始」

レッドトルーパーの4人による攻撃が始まり、水面に水柱が立つ。姿を見せなくとも、振動波や熱源で完全に捕捉しているため、ビーストが逃げ出すのは不可能だ。彼らは、徹底的にビーストにめがけて攻撃を続けていたが、水中のビーストも我慢の限界に達したのか、水面を破ってその姿を現した。

ノスフェルバスタードと呼ばれたビーストは完全に形態を変え、今度はワニガメの形質を獲得して、その姿を現した。恐らく、捨てられた外来種のワニガメがこの公園の池に生息していて、それがビーストの格好の宿主になったのだろう。高い防御性を手にしたビーストは、デイバイトランチャーの火力では全く歯が立たない。

ビーストを探して街を彷徨っていた憐のエボルトラスターが反応を始めた。強い反応に、憐はビーストの出現を確信し、人気のない所に移動して、エボルトラスターを引き抜いた。放出された光は、デユナミストの肉体をその光と同調、合成して変異させ、その精神はそのままに肉体をウルトラマンへと変える。

新たなビーストの形態、テストダイルは四足歩行の状態で岸に上がってきた。3メートルの体格も実際以上に大きく見える。レッドトルーパーの攻撃は止むことなく続いているが、いかんせん甲羅や皮

膚が装甲化しているため、全く効果を為さない。目を狙って発砲しても、瞼まで装甲されているため、打つ手がない状況だった。しかし、それでも何とかするのが実力行使部隊の務めだ。

「全員、奴の足元に一斉発砲」

小林の命令で、テストダイルの足元に4丁のランチャーが火を噴いた。火力の絶大なランチャーの威力で、公園の柔らかい土は大きくえぐられ、ビーストはそこに足を落とす事になった。重い甲羅を背負っている分、この戦術を取られると脆い面がある。小林達は、敵の前進を食い止めると、接近戦で発砲を続ける。エネルギー残量は次第に限界に近付いていくが、ここでやめるわけにいかない。万が一打つ手がなくなっても、ナイトレイダーがバックアップするとう心強さもある。じりじりとテストダイルに接近していくレッドトルーパー。しかし、ビーストはそれを狙っていたかのように、突然を首を伸ばし、巨人な顎を持つ口を開いて噛みつきに来了。瞬間的なその動きに小林達も反応はしたものの、ビーストはデイバイトランチャーに噛みつき、そのまま噛み砕いてしまった。あと一歩遅ければ、あの顎で体ごとミンチになっているところだった。銃を奪われても、まだパルスブレイガーがあると、ひるまず攻撃を続ける。まだ相手が身動きできない状況にはまっているのが幸いだった。そして、彼らの奮戦に応えるが如く、光が降り立った。

ウルトラマンはテストダイルの甲羅の背の上に立つと、相手の首がそこまで届かないのをわかった上で、甲羅の上から敵の頭部を蹴りつける。装甲の重さのため身動きのできないビーストにとっては、まさに手も足も出ない状況だった。今度こそ逃がさないとばかりに、ウルトラマンはクロスレイシュトロームの態勢に入った。

その時、ウルトラマンの上空の空間が歪み始め、そこに空いた渦の中心から禍々しい光が発生し、ビーストに降り注いでいく。そして、その光がビーストの体に変化を与えていく。テストダイルの甲羅はさらに攻撃的に鋭利になり、手足の筋肉が発達し骨格も変化して、

二足歩行を可能にした。それに伴い体も巨大化をはじめ、レッドトルーパーやウルトラマンの体を見下ろす大きさになっていく。

「アンノウンハンドか……」

小林がその名を呟くと同時に、周りの空間に変化が始まる。まるで墨をこぼしたかのようにどす黒いものが辺りを覆い始め、ビーストとウルトラマンの姿を覆い尽くしていく。やがて、そこにはウルトラマンやビーストの姿はなく、レッドトルーパーのみがそこに残されていた。小林は、パルスブレイガーを通信モードに戻し、ナイトレイダーに連絡する。

「和倉、ビーストは亜空間に移動した。後は、ナイトレイダーに任せる」

「了解、お前達は地上で待機していてくれ」

「おつ」

上空で通信を受け取った和倉は、クロムチェスター各機に指示を送る。

「チェスター各機、人口密集地により、高度1万メートルまでいったん上昇。ハイパーストライクフォーメーションに移行した後にはビーストを追うぞ」

「了解」

チェスター各機はオプチカムフラージュを解除しながらぐんぐんを上昇し、雲海を抜けたところではおパーストライクフォーメーションに移行する。そして、急降下しながら亜空間への突入を行っていく。不思議な色彩の幾つもの空間の層を抜け到達した先は、マイナスの位相の中に存在するダークフィールドGだった。暗黒の空に、

血に濡れた様が艶めかしい色が輝くこの空間は、ビーストには力をもたらし、ウルトラマンには力の制限ともたらず。巨大化と変異を遂げたテストダイルに対し、ウルトラマンもジュネッスブルーへとスタイルを変える。

変異したとはいえ、装甲の重さで動きが遅い事は解決できず、機動力ではウルトラマンに分がある。素早い動きで接近し、相手の手足や頭を攻撃する。それ以外は、装甲に覆われているため攻撃の効果が得られないためだ。しかし、皮膚自体も強化されているため、普通の打撃では全く効果がなく、逆にビーストの強靱な顎がウルトラマンの頭部に迫ってくる。それを寸前の所で両腕で受け止めるが、がら空きになった脇をテストダイルが殴りつけ、ウルトラマンは大きく突き飛ばされる。そこに、巨大な熱量をもつ光弾が発射され、ウルトラマンは正面からまともに食らい、数百メートルは吹き飛ばされた。機動力のウルトラマン、防御のテストダイル。全くスタイルの違う両者の戦いは激しさを増していく。

追撃の光弾を放とうと、テストダイルの口の中が発光を始めたところに、チェスターからアビロックとスパイダーミサイルが発射される。テストダイルに命中し、さらにその周囲に着弾することで、大爆発が起こる。濛々と舞いあがる土埃に視界をふさがれたテストダイルに、煙幕をかくぐつてウルトラマンがシュトロームソードで斬りかかってきた。両腕に深い切り傷を素早く与え、さらに胴体にも斬撃を加えるが、さすがに硬い甲羅を切り裂くには至らない。そして、すぐに狙いを変え、体を回転させながら頭部を切りつけた。しかし、その攻撃を読んだテストダイルは強靱な顎でシュトロームソードをくわえると、渾身の力で噛み砕いた。想像以上に獰猛なテストダイルの攻撃に、ウルトラマンもナイトレイダーもあっけに取られてしまう。戦いの様子を見守る孤門は、ウルトラマンが憐だと思っているがそれを言えないがために、忸怩たる思いで戦況を見守るしかない。

「憐、どうする。相手の装甲はお前の技を全部受け切れるようにな

っている……。くそ、どうすれば」

孤門が上空から見つめる中、静かにたたずむウルトラマン。しかし、打つ手がないまま真正面から相手に向かって飛び込んでいく。まるで、自殺願望でもあるかのような、理解しきれない憐の前のめりで、どこか投げやりな危険ないつもの戦い方に見えた。そのウルトラマンに、テストイルは光弾を発射した。その着弾の瞬間、マツハムーブを使い後ろに回り込んだ。そして、固く難攻不落の甲羅に対して、意味がないと思われる打撃を猛然と繰り出して言った。打つ手がない上での破れかぶれの攻撃にしか見えなかった。啞然とするナイトレIDERの中で、凧だけがウルトラマンの狙いを察知した。「隊長、ウルトラマンの攻撃しているポイントに、集中砲火を」

「凧、どういう意味だ」

「ついている隙がない固い装甲でも、一点だけを集中して攻撃すれば突破口ができる。ウルトラマンはそれを狙っている行動です」

「なるほどな。よし、全砲門を開け。ウルトラマンが攻撃しているポイントに集中して火力を加える。ウルトラマンには当てるなよ」

「了解」

ハイパーストライクチェスターからあらゆる火器類が発射され、テストイルの甲羅に降り注がれる。そして、ウルトラマンもののその攻撃に加わって打撃を与え、パーティクルフェザーを連射する。テストイルもダメージはないものの、攻撃の衝撃は伝わるため、それを避けようとするが、動きの鈍さが仇となり、手のうちようがないそして、頃合いを見つけたのか、ウルトラマンは掛け声と共に飛び上がると、体をスクリュー状に回転させながら降下し、回転を加えながら相手の甲羅に蹴りを見舞った。足と甲羅の接地する面から激

しい火花が散る。そして、その摩擦と衝撃に耐えかねた甲羅について亀裂が入る。それを察したウルトラマンは、光のエネルギーを弓矢状を展開し、その弓を引き絞る。そして一杯にまで引き絞った矢からアローレイシユトロームが放たれる。同時にチェスターからも、ウルトラマンと同じ照準でハイパーストライクバニツシャーが発射される。堅牢な鎧にこじ開けたわずかな隙間に集中して技を放たれ、テストダイルは爆発した。その時、ウルトラマンはセービングビュートを放ち、何かを手元に引き寄せたように見えた。

「憐、今何をしたんだ」

孤門はその行動の意味が理解できなかったが、ダークフィールドの崩壊が始まったため、操縦に集中しなければならない。次に会った時に聞いてみなければいけない。世話の焼ける奴だと孤門は思った。憐はまるで、奔放で何をしてくすかわからない弟の様に思えるのだが、弟を持つとこんなに気苦労するものなのだろうか、苦笑いするしかなかった。

チェスターの信号を確認し、ダークフィールドの消滅を確認したレッドトルーパーは、辺りを調査しながら撤収の段階に入っていた。ビーストが倒されれば、自分達の様な兵士は現場に却って邪魔になる。そう思い、小林は全員を集め撤収の命令を下そうとした瞬間、公園の片隅で何か光が舞い降りたように見えた。

「おい、なんだありゃ」

武器のない今、敵が現れると非常に厄介なのだが、彼らの目にはあの光がウルトラマンのものに思えて仕方なかった。警戒しながらその現場に近づくと、驚いた事に本当にウルトラマンがいた。青いウルトラマンは視線をレッドトルーパーに移すと、彼らはその輝きに圧倒されてしまい、パルスブレイガーを降ろすしかなかった。そ

んな彼らをウルトラマンはじつと見つめるとかすかに頷き、そのままだどこかへ消え去って言った。一体彼が何を伝えようとしたのか、彼らはそこで考えていたが、塚本が何かを見つけ子をあげた。

「た、隊長、亀がいます」

「何、亀だと」

小林が塚本が射す指の先を見てみると、確かに亀がいた。それも日本にいる亀ではなく、獰猛な外国の種であるワニガメだった。そう、あのビーストに変えられたワニガメだ。背中の甲羅には、少し痛々しいひびが入っているのがその証だ。それを見て、小林はなるほどと言いながら、笑みをこぼした。

「隊長、何がおかしいんですか」

「塚本、別におかしいわけじゃない。気持ちが良くて笑っているんだ。青いウルトラマンは、ビーストに変えられたこの亀を助けたんだよ。前のネズミを殺してしまった事を気にしてたんじゃねえか。それとも単に亀が好きとか」

「まさか……」

「そう思った方が気持ちがいいだろ。全く粹な奴だぜ。こっちが嫉妬するほどいい男っぷりだ。よう、亀。検査が済んで何ともなければ、お前さんを水族館に送ってやるよ。ウルトラマンと約束した以上、悪い様にしねえ」

「まあ、大丈夫でしょう。あのネズミも完全に元に戻っていたなら、こいつを検査する必要もそれほどないでしょうね」

「これで、われらが友人との約束を守れるな。ホワイトスーパー

に連絡しろ。この亀を丁重にお迎えしろと。何かあれば、レッドトルーパーが反乱を起こしてやると付け加える」

「それは洒落にならないですよ……」

家路について根来はパソコンを立ち上げ、何を書くべきか悩んでいた。情報の扱いは今の自分には未熟すぎる。自分はどこか呼応妙信を捨てきれない所がある。そんな人間が情報を扱えば、どんな美麗軸を並べても、情報は歪んだ生命を持つ。俺がしたいのはそんな事じゃない。真実を見つめる目、受け止める心を喚起する記事が書きたい。それが根来の頭の中で渦を巻いていた。どうすれば姫矢のように、人の心を動かし、心の目を開かせる事が出来るのだろうか……。

「そうか、姫矢の事を書くことから始めればいいのか」

姫矢の写真が有名になり、その事を取り上げた本は多い。だが、それは彼らが受け取った姫矢像であり、メッセージだ。しかし、自分は姫矢と長い付き合いであり、同じフィールドに立っていた。そして、あいつが背負った過酷な宿命の結末を目の当たりにした。姫矢を出汁にする事に繋がりはいらないか。そんな懸念が頭をよぎった。だが、その欲に勝たねば人や世界の真の姿は伝えられない。姫矢もそうして己と、そして世界と戦い続けた。そんな男の本当の精神を伝えよう。そして、自分も姫矢になろう。来るべき真実が明かされるその日まで戦ってやる。

根来は、キーボードを打ち始めた。食うために明け暮れる仕事も大事だ。しかし、それ以上にあるがままの本当の自分を探す戦いに飛び込めた事が彼にとって幸せだった。行く所まで行けと言うのが信条だったが、今は行きたい所まで行くために死んでたまるかという心が芽生えている。彼もまた、己と人間と世界との戦いに身を投

じたのだ。

「姫矢、俺は負けねえぞ。俺も、人の心を動かす者を作り上げる。眞実を受け止める心をはぐくむものをな。それができた時は、一緒にうまい酒でも飲もうや。だから、必ず帰って来い」

ビーストは再生する。それは恐ろしい事だ。でも、人もまた人生を生きる上で何度も再生を果たす。そして強くなっていく。進化していくのは僕らも一緒だ。その再生と進化が、この先の未来を生きる上で必ず必要になっていく事を、僕たちは心の中のどこかで信じていた。そして、彼らが過酷な未来を超えていく可能性になることも。

運命とは何だろう。決められた未来の事なのか。人が見つける、自分の生きるべき道の事なのか。それとも天が与える偶然の奇跡……。それは、どれもがあり得るのだろう。でも、運命の中に放り込まれる人間の存在はあまりにもちっぽけで無力だ。それでも、人間はその中であがきながら、自分の運命と向き合っていかなければならない。

瑞生の任務は、夜はM・P。そして、昼は憐の監視だ。しかし、監視という行為を行っている事自体、次第につらくなってきている。出来れば、憐とは任務以外の立場で会いたいと言う思いが強くなっているのに、監視という仕事がその心を押しつぶす。その繰り返しだ。だが、TLTという組織で働く事への誇りと使命感が彼女の心を支え、皮肉にもそれが憐との関係を繋ぎとめているのも事実であった。

今日も監視もミッションが続いている。この任務が始まってから彼女はほぼ無休なのだが、憐の顔を見ることで少しでも力が湧く事をほんの少しだけ自覚していた。監視と言っても、決められた間隔の時間ごとに写真を撮影し、普段の生活や仕事と変わった事があれば適時記録し、それを定時報告するぐらいだ。憐の休日以外は尾行することもないし、最近では向こうから接触してくるため、仕事の体をなしていないのが本当の所であるが……。

今日の監視では、少しだけ変わった事があった。とは言っても、憐のルーティンワークの中で発生した些細なことだ。憐が働いているレストランの近くで、泣きながら歩いている女の子の姿を見つけ、憐がその子を迷子センターに連れていった程度の事である。しかし、瑞生に下った命令では、少しでも変わった事があったら記録して報告しろという事であったから、二人の後をつけその様子を撮影しな

がら観察していた。迷子センターでも子供は泣きやまず、憐はどうしようと考え込むと、センター内にあった風船を使つて、様々な動物の形を作り始めた。瑞生も憐の風船細工は見た事があり、最初は作りが子供ぽかったのが、試行錯誤を重ねる内に職人肌と見える腕にみるみる内に上がつていった。憐が作るその見事な風船の奇想天外な世界に、子供は次第に泣き止むと目を輝かせながら夢中になり、満面の笑みを浮かべている。憐は、年齢の割に子供っぽい所があるせいか、子供にすぐ懐かれる所はあるが、あれだけ人見知りの激しそうな子がすぐに懐く様子を見ると、これだけ純粹で優しい人を監視する自分が嫌になるの瑞生は感じた。

「嫌な仕事。自分の事も嫌になりそう……」

ぼつりと本音を漏らすと、親子連れが迷子センターに駆け込んできた。どうやら、女の子の家族らしい。父親は落ち着こうと努力はしているが、子供を見失った事態にはさすがに冷静ではいられず、声が大きくなっている。瑞生は、これが私の仕事と言ひ聞かせながらその様子を観察し、画像に記録をとっていく。父親は相変わらずあわてていて、母親に落ち着くように言われているが、その母親も取り乱しているから始末が悪い。そこに憐が顔を出し、とりあえず落ち着いて下さいと話しかけ、相手の名前を確認する。

「美空ちゃんの御家族ですよ」

「すみません、取り乱しまして。そうです、美空の父で真木と申します」

フォートレスフリーダムの会議室では、松永が重要書類に目を通していた。デスクワークが多い仕事であるが、彼が事実上にこの「T-T」の中心人物と言つてよく、かなりの権限が与えられている。

瑞生の憐れに対する監視も、彼から直接下されたものだ。彼女の報告はすべて、彼に送られてくる。そして、その定時報告のレポートと画像がメールとなって彼のパソコンに送られてきた。これまでの所、彼が注目すべきことは何も送っていない。まだ動く時ではないと松永は感じていて、今日も報告してきた情報もその代わり映えのしないも報告の類だろうと安心してきつていた所に、一つの情報が彼の冷静さを破壊し、その結果、彼は驚きの表情を浮かべながら息を詰まらせていた。

「この男はまさか……。何故彼らは接触を。こんな事態は初めてだ」

松永は冷静に対処しようと努め、まず深呼吸をして気持ちを落ち着かせながら、携帯に登録されている首藤のナンバーを探してダイヤルした。

「私です。急を要する要件ですが、今そちらですぐに動かす事ができる人間は何名いますか」

「……、二名でしたら、余裕を持って対処できますが」

「では、彼らを野々宮さんに合流させてください。ただし、監視ターゲットは千樹憐ではありません。今から送る画像の人物をマークしてください」

「わかりました。瑞生には何か指示は」

「バックアップが到着するまでの間は、彼女に新ターゲットの監視をお願いします」

「わかりました。では、そのように手配します」

一連の指示を終えた松永は、まだ興奮冷めやらぬ面持ちで、画面

を見つめている。画像の中にあるある一人の人物に視線を注ぎながら。彼は画像に興味を引きつけられ、いつの間にか彼の後ろにイラストレーターが現われたことに気がつくのが遅れた。不意をつかれた松永は彼の声に驚き、肩をびくつとさせた。冷静な彼には珍しい事である。

「なかなか興味深い現象だね」

「イラストレーター……」

「随分と興奮しているね、僕が現われた事に気がつかないなんて。でも、ファーストとサードが接触した。これは、僕にも予想はしていなかったことだ」

「デユナミストの邂逅。これは偶然なのか、運命なのか。どちらかはわかりませんが、彼らを繋ぐ光の存在があるならば、私には無視できませんね」

「姫矢准が残した言葉の意味、『光は絆』。その意味の一つでもあるのかもしれない。デユナミストは光によって一つの絆を持っている。その真の意味はわからないけれど、絆が彼らの無意識化にあるのなら、この出会いは運命かもしれない。その運命の先は誰にもわからないけれど、それで、ファーストをどうするの」

「サード同様監視します。我々にはまだウルトラマンの力が必要ですが、サンプルが少なすぎる。手元にあるのは力も記憶も失った溝呂木のみ。サードに対して動くのはまだ早い。なら、ファーストの存在は非常に魅力的だ」

サードの対する動きという言葉に、イラストレーターは表情には出さないものの、少しだけ内心は反応した。彼とサード、つまり千

樹憐は、プロメテウスプロジェクトという計画から生まれた同じ出自である。そのため、任務に対して非情であったイラストレーターは、憐がデユナミストに選ばれた事により、心境に変化を起こしていた。

以前の彼にとって、ウルトラマンとは一つに現象であり、存在に過ぎなかった。つまり監視や分析の対象でしかないから、ウルトラマンに攻撃を加えてその能力や立ち振る舞いを見定めようとしたし、松永らがデユナミストである姫矢を捉え、人体実験まがいの様な事をしても静観するだけであつた。その力さえ手に入れば、ウルトラマンの存在は不要な要素になるからだ。

しかし、憐がデユナミストを継いだことで、彼の状況は変わった。同じ出生であり、最も心を許した存在であり、互いの運命を語りあえた者。彼にとって、憐はただの存在ではなく、唯一無二であつた。それ故、冷徹さ以上に情で動いてしまう心境がイラストレーターに生まれていた。そのため、憐がこの先迎える戦いの運命や、彼を一つの検体として扱う動きには敏感になっているのである。松永の言動に、姫矢の時と同じ行動をとりかねない様子を見るにつけ、イラストレーターの心中は穏やかにはなれなかった。

「ファーストへの監視に関しては、僕は知らなかった事にするよ。T.L.Tの意向に沿わない事をするつもりはないからね」

「それは、どうぞご自由に」

「忘れないようにね。ファーストはアンタッチャブルな存在だ。監視という行動がもし表沙汰になれば、北米本部が動くよ。それは、前線で戦う僕らにとってはあまり好ましい結果ではない」

「それはわかっていますよ」

「それならいいけど。それじゃあ」

イラストレーターは姿を消し、松永は一人残った。そして報告の画像を拡大しながら、ファースト、真木の顔をじっと見つ目ながら、ぼつりとつぶやく。

「ファースト、そしてネクストと呼ばれた、それは忘却の海に眠る者。そしてサードとの出会い。そこに、光の意味が必ずある」

本部からの指示を受け、監視ターゲットが変わった瑞生であったが、実際の所はその内容に大きな変更はなかった。迷子センターに真木一家も釘付けだからである。美空がすっかり憐に懷いてしまったため、そこから離れられないのだ。どうやら、美空は憐の風船で作る様々な物にすっかり魅了されて夢中になっている。

「これがキリン、こっちがライオン。ほら、そっちにあるのが像だよ」

「すごいすごい。じゃあ、今度は飛行機作って」

「飛行機かい。いいよ」

「ありがとう。お兄ちゃん、うちのパパね、飛行機に乗っているんだよ」

「飛行機に乗っているって、どういうことなの」

「パパはパイロットなんだ」

誇らしく父親の職業を話したのは、美空の兄の継夢だった。どうやら父さん子らしく、自分の父親の職業を誇りに思い、機会があれば誰にでも知って欲しいようだ。真木も、自分の子供が機会あるこ

とに職業を公開する事に照れ臭さを隠せない様子で、苦笑いしながらたしなめている。

「こら、継夢。あまりお父さんの仕事を人に喋るもんじゃないって言っているだろ」

「だって、嘘ついてないよ。それにね、お兄ちゃん、パパはもつと前はイーグルドライバーだったんだよ」

「継夢、もうやめなさい。すみません、あまりこういうことは人にベラベラ喋っちゃいけないと言っているんですが……」

「お父さんの自慢を出来る息子さんなんていいじゃないですか。でも、自衛隊の戦闘機のパイロットですよ。すごいなあ……。継夢君と美空ちゃんのお父さんで、すごいカッコイイね」

「うんっ」

兄妹は笑顔で元気よく答えた。それ以上に憐は、子供以上に目を輝かせて真木を見つめている。これでは、どちらが子供かわからないほどだ。しかし、余りに憐に懐く子供達に、真木夫妻も驚いている様子で、妻の蓉子が子供たちが仕事の邪魔をしていると思い、憐に頭を下げている。

「本当に申し訳ありません。迷子になっている所を保護していただいた上、仕事のお邪魔までしてしまって」

「あ、全然構わないですよ。俺、子供は大好きですし。でも、最初はずっと泣いていて心配しました。でも、美空ちゃんとは友達になつて、継夢君ともすぐに仲良しになれましたよ」

「ありがとうございます、こんなにしていただいて。でも、不思議

だわ。継夢はそうでもないんですが、美空は人見知りが激しくて、なかなかよその人に懐かないんです。特に主人以外の男の人に懐く事は殆どないのに……」

「そうなんですか。ここに居る時は、全然そんなことはありませんでしたよ」

両親とも、美空の憐に対する懐き具合に不思議な表情を浮かべているが、家族以外の誰かと仲良くなれる事には越したことはない。しかし、いつまでも憐を拘束しているわけにいかず、何とか連れて行こうとするが、美空は憐の陰に隠れてしまい、埒が明かない。そこで憐は、風船で作った動物などをすべて紙袋にいれ、それにたくさん様々な色の風船をつけて、美空に手渡した。

「じゃあね、この風船で作った動物、全部美空ちゃんにあげるよ。風船も一杯入れたからね。もし、風船で何か作りたくてわからなかったら、またここにきてお兄さんと遊ぼうね」

「うーん、わかった。ありがとう、お兄さん」

「どういたしまして」

真木家族は憐に頭を下げて礼を述べると、四人揃って他のアトラクションに向かっていった。瑞生は、まだ交代の要員が到着していないので、真木一家の尾行を開始する。一段落した憐は、瑞生を食事誘おうとその姿を探したが、先程までいたベンチにはその姿がなかった。

「あれ、瑞生、どこにつたかな。昼飯一緒にするはずだったのに」

約束もしていないのに、するはずと言つてのける図々しさが憐らしい。とりあえず、時間は憐お昼休みの時間なので、一人でさっさ

と昼食を済ませようと歩き始めた瞬間、憐の背筋に冷たいものが走った。周りの音はかき消され、人の声も聞こえない沈黙の世界。動いている人達も見えはするが、ただの映像のようにしか見えない。そこまで感覚を奪ってしまうほど、憐の脳に直接働きかける気配は異常で、それは殺気と言えるものであった。エポルトラスターも異様な反応を見せ、小刻みな反応を続けている。そして、憐の体に何者かの視線が突き刺さってきた。

「誰だ。俺を見ているの誰だ」

日ごろから憐は、正体不明の人物に監視されているのを感じ、犯人をあと一步まで追い詰めた事もある。だが、今感じるのはそれはまったく異なる物、人とは思えないほどの殺気である。

「誰だ、姿を現せ」

姿なき存在の殺気に憐は汗が玉のように噴き出し、呼吸も苦しくなり、次第に冷静さを失っていく。辺りを必死に見渡しても敵の存在は見当たらず、焦りは増すばかりである。そして、そんな憐を見下ろすかのような不敵な声が憐の耳に、いや、脳に入り込んできた。「それほどまでに怖いのか。私に恐怖するのか、光の者よ」

とうとう声を発した謎の存在に、憐の緊張の糸はついに切れた。

周りに人がいるにも関わらず、憐は声を張り上げるが、周囲の人々に憐の声は届いていない。まるで、存在が異次元に放り込まれたかのように。

「誰だ、お前は誰なんだ。姿を見せろ」

「お前が光なら私は闇。お前が実存なら私は観念の存在。互いに相容れぬ、拒絶し合う異界に生きる者だ」

「観念の存在……」

「私に肉体はない。だが、それゆえにこの世界の法則から解放される高次の存在だ。名は、ルシフェル。光も闇も制する者の名は私にふさわしい」

「何でもいいから顔を見せてみる。相手になつてやる」

「これが今のデユナミストか。青いな。いいだろう、では私のこの世界での姿を見せてやろう。振り向いてみる」

憐は、額に脂汗を浮かべながら、ゆつくりと後ろを振り向いている。彼の心の中には、説明のしようがない恐怖がわき上がっている。そして、後ろ振り向いた憐の視界に映ったのは、魔人とも、悪魔とも言い難い、この世界のいかなる者とも溶け合うことはない異形の姿があった。

フォートレスフリーダムの最深部では、イラストレーターがCICで、ビーストの出現の予測や監視、今後のTLTのとるべき行動の演算を行っていた。誰もいない小さなこの部屋が、彼の仕事場であり、戦場であり、同時にすべてである。他人から見れば、孤独としか言い様のないものであったが、彼自身にしてみたら、今さら孤独を感じることなど意味はないものだった。世界の中にいる彼は、最初から孤独なのだから……。

そんなたった一人の作業をしている彼の脳裏に何かが入り込んだ。ビジュアル化できない、言葉にも表せない何かが、頭の中を横切った様な感じなのだ。

「何だ、今のは」

イラストレーターはすぐにキーボードを叩き、自分の意識に干渉

したものの正体を探ろうとした。すべての端末がこんな状況になるとは。すると、パソコンからは警告音が鳴り響き、処理しきれない情報が画面にあふれ出してくる。それでも、必要のない情報を強制的に排除し、探し求めるデータを探し当てた彼は、そこに示された結果を見て絶句した。

「この振動波は……。こんな振動の仕方は信じられない」

イラストレーターの許で起こった混乱は、ナイトレーダーの作戦室でも起こっていた。各自に与えられたパソコンが異常を起こし、処理しきれないデータが流入していく。メインモニターにも滅茶苦茶な画像が溢れ、けたたましいノイズが鳴り響く。隊員達は突如起こったサイバーテロに、戸惑いと焦りの表情が顔に現われている。

「何が起こっているんだ。石掘、原因は分らないか」

「駄目です。いつさいのコマンドを受け付けません」

前代未聞のサイバーテロによる基地へのハッキングに、一同は唇を噛みながら事態を見守るしかなかった。

「ねえ、画面に何か映ってきたわ」

詩織の言葉に、ナイトレイダーは画面にくぎ付けとなった。彼女の言う通り、砂嵐の様々な画像が射しこまれてくる。それはどうやら、これまでT-LTが遭遇したビーストの画像だった。何体ものビーストの画像が消えては現われ、それを繰り返していく。すると、ある一つの影がビーストの画像を押しやって前にせり出してきた。その姿に、孤門は見覚えがあった。いや、忘れようがなかった。

「あれは、……、ファウスト」

それは、彼の恋人で会ったりコが、その死の際の恐怖に付け込まれて、その恐怖を基に作り上げられた魔人ファウストの姿だった。

しかし、彼女の本当の死により、ファウストは消え去ったはずだ。それがなぜこのような形で現れたのか、孤門にはまったく理解ができなかった。

やがて、ファウストの映像は消え去り、再びビーストの画像が乱舞する。やがて、ビーストの画像の間から、新たな影が姿を鮮明にしていく。

「メフィスト……」

今度は風が喉の奥から声を絞り出した。かつて、自分に戦士としての基礎を叩き込み、尊敬の対象でありながら、やがて戦うべき憎しみの対象へ変貌した溝呂木真也が闇と一体化して変身した姿、ダークメフィストの姿が、まるで地獄の底からよみがえったかのように、画面に映り込んでいた。

次第にメフィストの姿は消え去り、ビーストや闇の巨人の姿が激しく消えては現われを繰り返していく。そして、次第にそれは文字列に分解され、様々な文字が画面を点滅させる。すると、だんだんある特定の文字だけが拡大しながら点滅し、ある言葉を作り出していく。

— L — U — C — I — F — E — R —
「ルシフェル、か」

文字列を見た和倉が言葉を声にだして読みとり、ルシフェルという言葉を吐いた。ルシフェル。天使でありながら、神に逆らい天から落とされ、悪魔へ変貌した存在と知られる者。その名が何故TLTのコンピューターに侵入してまで流入してきたのか、誰にも理解できない事だった。

ルシフェルの名がメッセージとして流れると、それを最後に混乱はピタリとやみ、機器類は正常な作業を取り戻した。これまでの騒ぎが嘘のような静けさである。隊員達の心は、嵐が過ぎ去った直後だけに、落ち着きを取り戻そうとしても、渦巻く疑念や不安を押さ

えることはできなかった。

そんな彼らの許に、イラストレーターの映像が現れた。冷静な彼の姿は、ナイトレイダーにも僅かばかりの安堵の心を取り戻させた。しかし、凧と孤門だけは因縁の深い二人の闇の巨人の姿を見ただけに、心中穏やかではいられず、二人はイラストレーターに半ば詰め寄る形で質問を浴びせる。

「イラストレーター、今のは一体何だったんですか。なぜ、ファウストやメフィストの画像が現れたんですか」

「これは敵の仕業ですね。何故、敵はファイアウォールを破り、自分の事を探知される危険を冒してまでこんな子供じみた悪ふざけをしたんですか」

二人の剣幕にイラストレーターは全く動じず、まずは落ち着くように冷静に話しかけ、全員を席に座らせてから、事の次第を解説を始めた。

「まず、今度の敵はこれまでとはレベルが違います。溝呂木が以前、通信回線に侵入した事がありました。今回はレベルが違います。ルシフェルと名乗る存在は、短時間でこの基地のすべての回線を制圧し、システムの機能を奪い取るS級ランクのハッカーぶりを見せました。ルシフェルは、闇の巨人ともビーストとも一線を画す異質な存在です」

「異質とは一体……」

「和倉隊長。ファウストもメフィストも、斎田リコや溝呂木真也と言った人間と一つになることで誕生した存在です。それは、ウルトラマンとデュナミストの関係に近いと言えるでしょう。でも、ルシフェルはこれまでの巨人とはいくらか違う点があります」

憐の目の前にいる異形の影は、物陰に潜んではいる者の、白日の許堂々と憐と対峙する、大胆不敵なものだった。漆黒の体に血管が浮き出ている様に真つ赤なラインが細く走り、胸には鼓動する心臓の様な不気味なコアゲージを備え、口は耳元まで裂ける異形のものだった。極端な釣り目には彼に宿る精神の冷酷さ、冷徹さ、冷血ぶりを体現するように青に染まっている。ルシフェルは、地の底から響き渡るような薄気味悪い低音の声で、憐に話しかけてくる。

「デユナミスト、見つけたぞ」

余りにも気味悪い声と喋りたに、向う見ずな憐でさえ戦慄が走った。これまで戦ってきた幾多の強敵のビーストよりも遙かに恐ろしい、次元の違う存在に憐は虚勢を張る事だけが、唯一できる抵抗だった。

「一体何が目的だ」

「それだけか、口にできる言葉は。私の役目はデユナミストの抹殺つまり、お前の命をもらう事が目的だ」

「なら、戦うか」

「脅えて動けなくせに威勢だけはいいな。すぐには戦いはしない。恐怖に脅える心を破壊しながら、お前の光を奪う。それまで、自分が苦しむ以上の状況を味わうがいい。己の運命ゆえに自分を顧みないお前には一番堪えるはずだ」

「待て、ルシフェル」

憐は携帯していたブラストショットを取り出そうとした。あと少しで抜き出そうかというその瞬間、ルシフェルの姿は憐の視界から

消え失せ、そこには携帯でメールをしている女子高生がいるだけである。辺りには、全くルシフェルの姿も気配もない。「確かにいた。幻じゃない。どこに消えたんだ、一体」

憐は服をぐつしよりと汗で濡らし、流した汗の量で自分の感じた恐怖の大きさを実感した。しかし、ルシフェルの言った、自分にとって一番堪える状況とは一体何なのかがわからずにいる。一体、奴は何を企んでいるのか。緊張感を解く事ができず、目も血走っている憐だったが、自分を呼ぶ尾白の声でようやく我に返った。

「おい、憐、こんなところで何やってんだ」

「あ、悪い悪い。もう迷子がいなかったかなあって、見回りしてんだよ」

「いないだろ、もう。お前、今から昼休みだろ。休憩に入っていないぞ。おい大丈夫か、随分汗をかいてるけど。冷えるから着替えてこいよ。風邪引くぜ」

「へえ、随分優しい事を言うんだ」

「馬鹿、お前が欠勤すると、俺の仕事が増えて困るんだよ。部屋行つて着替えてろ。賄い持ってやってやるから」

「サンキュー。じゃあ、甘えさせてもらうよ」

憐はそう言うと、自分の部屋へと走っていった。とにかく、ルシフェルの狙いは自分であるのは間違いないのだが、どんな方法で迫ってくるのかわからないため、一人になった方がいいと思ったからだ。部屋に着くと憐は下着を取り替えた。ぐつしよりと汗で濡れた下着が、憐が無意識に感じた恐怖の重さを物語っている。自分が感じた恐怖の証を見つめながら、下着を洗濯かごに放り込み、新しく

乾いているものに取り換えた。それでも落ち着けず、温かい飲み物で体を温めようとインスタントコーヒーを入れ、口に運んだが、かすかに続くその寒気はしつこくまとわりつく。

ルシフェルの事を忘れようと努力するが、それを許さない原因があった。ルシフェルが現われてから、エポルトラスターが震えながら反応し続けているのだ。継続して反応するなどなかった事だけに、憐は常にルシフェルに監視されている様な気がしてならず、全く安心できなかった。

知らず知らずの内に憐はびくびくしながら、部屋の隅で丸くなっていた。相手がどんな手段でくるかわからない上の不安が、ルシフェルに対する得体の知れない恐怖と共に大きくなり、抑えきれないからだ。そんな憐を呼ぶ声が外から聞こえてきた。どうやら、尾白が昼食を届けに来たらしい。親友の声に少しだけ安心した憐は、部屋のドアを開け階段を下りていくと、尾白に礼を言った。

「サンキュー、尾白。もう腹減っちゃったよ」

「お前、本当に大丈夫か。顔色悪いぞ。具合でも悪いんじゃないか」

「大丈夫大丈夫。飯でも食べれば元気になるから」

そう言った憐が笑みを浮かべた瞬間、彼の顔に拳が打ち込まれ、体が壁に叩きつけられた。何が起こったのかわからない憐が視線をあげるとそこには尾白ではなく、彼を見下ろすルシフェルの姿があった。ルシフェルは憐の胸ぐらをつかんで体を持ち上げると、鉄製の階段に叩きつけた。不意をつかれた上、ルシフェルの容赦のない仕打ちに、憐は全く反撃する事も回避することもままならない。

「どうした、デユナミスト。もうサバイバルは始まっているぞ。お前の心か命が尽きるか、私が消滅させられるかのな」

「クソ、……。尾白は、尾白をどこにやった」

「お前の目の前にいる」

憐は、ルシフェルの言葉の意味を理解できなかった。いや、したくないと思ったと言う方が正しい。先程の女子高生同様、尾白もまたルシフェルの器にされている、そう認めるしかなかった。

相手が親友の体を使っているとあつては、憐に戦意を保てと言う方が無理であった。憐は己の体を顧みない戦いをするのとは逆に、自分の身の回りにいる人間の事をこの他、むしろ異常なほど気にかける。それ故に、ルシフェルの作戦は精神面に計り知れないダメージを与える。抵抗できない憐をルシフェルを執拗に蹴り続け、腹部を踏みつける。

「どうした、デユナミスト。こんな奴が光を継いだと言うのか。見せてみる、その力を。闇の前に幾度も立ちほだから、追いかけて続ける光の継承者がこの様とは」

「尾白を返せ……」

「貴様は自分の身を守らない癖に、人の事はどこまでも守りかばおうとする。面白い奴だ。だが、そういう奴から先に死ぬ。デユナミストとはそういう連中なのだろうな。光の力の使い方もわからず、もがき続ける。憐れとしか言いようがない」

「返せって言ってるだろっ」

憐は思わずブラストショットを取り出したが、次の瞬間ルシフェルが消えうせ、目の前には尾白が立っている。自分に起こった事に全く覚えがないらしく、倒れている憐に驚いている様子だ。

「おい、憐、お前絶対やばいぞ。ぶっ倒れるまで無理すんなって。今日はもう休んでろ。後の事は俺に任せておけ」

「いや、大丈夫だから……」

「いい加減に一人で抱え込んで無理するのはやめろよ。やせ我慢して周りに心配かけて、そんなの友達つて言えねえだろ。周りを信じて、少しは言う事聞けよな。とりあえず明日は休園日だし、その次の日はお前休みだろ。それだけ休めばまた普通に仕事できるんだから」

「ごめん……。後の事、頼む」

「それでいいんだ。ほら、飯ぐらいは食って寝てろよ」

尾白は憐を部屋に押し込み、仕事に戻っていった。憐は彼の言った言葉を反芻し、自分がムキになるほど周りの人間にひたむきになるのは、実際の所は自分の独りよがりなわがままの一つなんだろうと思った。本当の友達に信じあうこと。わかつてはいるけれど、周りにいる大事な人たちが掌からこぼれ落ちる砂のような存在に憐は思えてならないのである。

「俺は、俺は出会った人達だけは大切にしたい。そして、俺の事を覚えていて欲しい。でも、それが友達を遠ざけてしまう。それが怖い、怖いからなおさら俺は意地になる……。どうすればいい、ルシフェルからみんなを守るには、どうすればいい……」

憐がルシフェルの精神攻撃に苛まれている頃、ナイトレイダーのコマンドルームに集められた隊員達に、イラストレーターが様々な資料を集め、スクリーンにそれらを表示しながら、今後のミッシヨンへの対応を話していた。

「まず、これらを見てください。ここに表示されたグラフは、これ

まで観測されたすべてのビーストの振動波です」

画面には、これまでナイトレイダーが、TLETが戦ってきたビーストが発していた振動波が表示されている。それらはどれ一つ同じものではなく、皆違う波形を示していた。

「うわー、これだけあって、一つも同じものがないんだ」

「当たり前だろ。ビースト振動波はそれぞれの個体で発するものだから、いわば人間の指紋に当たるものだ。一つとして同じパターンはない」

詩織の指摘に石掘は、人間の指紋という例えを出した。言い得て妙である。同系統のビーストには類似点はある。しかし、類似するだけで一致することはない。あくまで、ビースト一体一体が持つ個体識別信号、まさに指紋と一緒なのである。

「石掘隊員の指摘通り、これは人間の指紋と言っていいでしょう。どれ一つ、全く同じものはない。でも、ビーストには特定の波形、微妙な類似点が何パターンか存在します。これは、すべてのビーストに僅かでも必ずあります」

「イラストレーター。指紋のようにすべてが違うのに、パターン化された類似点が存在するというのは、矛盾しませんか」

「和倉隊長、なかなか鋭い指摘です。そう、まさに矛盾。矛盾に満ちた存在がビーストです。生物でありながら、自然のサイクルを拒み、共生を否定する生物。だから、違う振動波を持ちながら、そこにパターン化したものが存在する矛盾が成立する」

「どうもよく理解できませんが……」

「ビーストは常識では理解不能の存在です。でも、現れる現象は解析できる。だから数パターンに分類できてしまう。でも、パターンに明確な違いがあるわけではない。これは、ビーストがそれぞれ起源を同じくし、短期間に多系統に枝分かれしたからです。だから、彼らの違いは、ほんの僅かのパターンで整理でき、同時にきわめて似通ったパターンが、彼らが同一の起源を持つことを意味する」

隊員達は、これまでの意識を改めざるを得なかった。彼らはこれまで、正体不明の生物を便宜上ビーストと呼び、それぞれは別種類の個体だと考える節があった。だが、今の話では、ビーストはそれ自体が種であり、進化を驚くべきスピードで行っていく巨大な生物群と言えるのである。T L Tとビーストの戦いは、この地球における種の生き残りをかけた生存闘争という壮大な意味合いを帯びてくるのだ。課せられた任務が想像以上の重さを帯びている事に、全員ごくりと唾を飲み込みながら、イラストレーターの話に耳を傾けている。

「では、次の段階に話を進めます。この度、T L Tの電子頭脳を一時的にしるハッキングして制圧したルシフェルと名乗る者。彼と一応呼びますが、彼が侵入した際に、消そうと思えばできる技量を持ちながら丁寧にもこのビースト振動波の様なものを残しましたしたが、それがこれです」

画面にルシフェルの残した振動波のグラフが出されたが、どのビーストたちとも一致しない、乱れているとしか言えない滅茶苦茶な波形が映し出された。果たして、ここからどんな事がわかるのだろうか、と、隊員達は固唾を呑んで話に聞き入っている。

「このように乱れに乱れた波形ではありません。ですが、ビーストが発する数種類の類似パターンを抜いてみると、かなり鮮明な波形に変わります。これから言える事は、ルシフェルはビースト因子を持つ存在だと言えます」

「つまり、ルシフェルは知的なビーストという事ですか」

「和倉隊長。この話にはもう一つ次の段階があります。この二つの波形を見て下さい。この二つの波形は微妙に違います、やはり類似した部分を持っています。このパターンをルシフェルの波形から、さらに省いてみます」

すると、ルシフェルの波形と残り二つの波形はほんのわずかの誤差はあるものの綺麗に一致した。これは何を意味するのだろうか。
「この程度の誤差であれば同一種の波形と判断して差し支えありません。純粹な微々たる個体差と言えます。実は今省いた波形は二人の闇の巨人、メフィストとファウストが持つ波形です。ルシフェルはこの闇の巨人と同系列、そして二人の能力をも併せ持つ存在と言えます」

一同は驚きを隠す事が出来なかった。かつてウルトラマンの、ナイトレIDERの前に立ちはだかり、強大な双壁となつて立ちはだかつた闇の巨人の三人目が現われたという事実は、彼らにさらなる過酷な戦いを課すことを意味している。そして二人の闇の巨人に浅からぬ因縁を持つ孤門と凧には一層複雑な感情を強いる事になる。話を聞きいつていた孤門だが、モニターに映し出されたグラフを見ている内に、一つの疑問が生じた。ビースト振動波と闇の巨人の波形を省き続けた果てに残つたあの波形を何を意味するのだろうか。すべての要素を省けば、何もなくなつてもいいのではないか。

「イラストレーター、一つ質問が」

「何でしょう、孤門隊員」

「ここに残つた波形の意味はなんですか。ビーストと闇の巨人の要

素を省けば、何も残らない事になりませんか」

「あなたは、どこか人が見過ごしがちな事に目をつける天性の才能がある様ですね。いい質問です。ここにある波形はR7性因子。宇宙から降り注いだ宇宙線の一種で、知的生命体、つまり人間に個体差はあれど発生するものです。実は、TLTではこのR7性因子がデユナミストの条件になるのではないかと言う仮説がありました。ですが、姫矢准の体を検査した際、彼のR7性因子は通常の人間とほとんど変わらない数値であると判明し、R7性因子は人類が誰でも持っているポピュラーなものだと言う事がわかりました。いわば、人類特有の振動波と言えます」

「それって……、ルシフェルはビーストと巨人の特徴を備えた人間という事ですか」

「そういう事です。孤門隊員に酷な事実かもしれませんが、ここに残る三つの波形は、斎田リコ、溝呂木真也、そしてルシフェルの物です」

「これがリコの……」

孤門は悲痛な面持ちで、モニターに映るファウストの波形を見つめていた。愛した女性の思い出ではなく、数値化されたデータをこのような形で見せられると、まるで彼女が人ではなく名もない一体の生物として扱われている様な気がしてならず、心を締め付けられるような痛みが走り、モニターを直視できなかった。凧もまた、溝呂木の残した波形を見つめていたが、彼女は怒りとも憐みともつかない表情で、そのデータを凝視している。和倉は二人に漂う空気を察し、イラストレーターにモニターを消すように目で合図した。それを察した彼はモニターを消し、最低限の情報を彼らに伝えた。

「ビースト、巨人、人間、三つの要素が複雑に絡み合う存在、それがルシフェルです。現在、彼の痕跡を追ってレッドトルーパーが捜査をしています。短時間ではありますが、サンプルとなりえるルシフェルと思われる波形を探知しましたが、あまりに一瞬のことです。場所の特定は現在継続捜査中です。ただ、厄介な問題があります。ルシフェルに含まれるR7性因子がどれも僅かに違い、一致しない事です。仮説として成り立つのは、ルシフェルは器となる人間を転々と変え、ルシフェルという存在を具現化する新しいタイプである、第三の闇の巨人という事です」

沈黙がコマンドルームを支配している。全く想像もつかない新たな敵の前に、これからどんな戦いが待っているのか、不安や恐れが彼らの中に小さな目を芽生えさせていた。彼らを見つめていたイラストレーターだったが、何か連絡が入ったらしく目線を逸らしながらどこかと通信しているようだ。そして、その内容をナイトレイダーにも中継する。

「レッドトルーパーからの連絡です。これはナイトレイダーと情報を共有すべき内容ですので、こちらにも中継します。小林隊長、報告をお願いします」

「わかりました。先程検知したルシフェルの波形ですが、だいぶ発信地が絞れてきました。また少し、人口密集地に食い込んでいますね。特定はできませんが住宅地が点在し、後は人が集まる所として遊園地がありますね。この辺りが臭いますね」

遊園地という言葉に孤門とイラストレーターが少しだけ表情が変わった。彼らは、憐が遊園地で暮らし、働いている事を知っているからだ。つまり、ルシフェルの狙いは憐と言う可能性が高いと言う事だが、デュナミストの件はまだ極秘情報ということと、憐の事はまだ伏せておいてやりたい二人の思惑があるため、彼を守ってやり

たいがそれを口に出せないでいる。連絡を聞いたイラストレーターは、職務として冷静に次の指令を伝える。

「小林隊長、同じポイントに集中する傾向がある以上、そのポイントに何か敵の狙いがある可能性があります。その辺りを入念に調査し、データをCICに転送して下さい。後はこちらで解析し、さらにポイントを絞り込みます」

「了解。捜査を続けます」

イラストレーターは孤門に目で合図し、憐の事は互いの秘密として何とかするべきだと言う意思を伝えた。孤門も自分に出来る限りで、デユナミストとして人に話そうとしない運命を抱える憐に対して手を貸そうと決意していた。

「和倉隊長、巨人はダークフィールドを自力で発生する力を持ちます。出現した際は、ウルトラマンとの戦いに移行するのは、まず避けられません。ナイトレイダーにいつスクランブルがかかるかわからないので、出動態勢は整えていてください」

「わかりました」

和倉への命令を伝えると、イラストレーターはホログラムを消し、CICで一人思案を巡らせていた。しかし、彼には憐の事以外にもう一つ気になる事があった。

「奴が出演した遊園地には、今は憐だけでなくファーストも存在している。これは偶然なのか……」

ファーストの事は、松永が上層部には内密で動いている不安定な状況だ。そしてその近くに憐が、ルシフェルがいる。偶然でこれだけの要素が重なる確率はどれだけのものか、イラストレーターは考え続けたが結果は何度繰り返し返しても一緒だった。

「やっぱり偶然じゃない。ルシフェルがこのタイミングで出現したのは、必然なんだ」

何かに気がついた彼は一心不乱に何かを考えだし、モニターに向かった。彼の目はいつも以上に真剣味を帯びていた。

緊急の指示を受け、真木の家族の監視を行っていた瑞生は、引き続きあの顔₂区の監視を行ってはいたものの、どこにでもいる仲のいいあの家族を何故監視しなければならぬのか疑念を感じずにはいられなかった。自分の報告した物によりあの家族が監視の対象になったのなら、それはあまり無視できる事ではないし、仕事の命令とは言え気分のいい指令ではない。かといって、自分の様な立場の人間には、知る必要のない情報は下りてくるはずはないし、情報を降ろすことも必要な行為でもない。そうは言っても、どこにでもいる平凡な家族の監視というのは、違和感を感じるし、裏の思惑を感じずにはいられなかった。

複雑な感情を抱きながら命令された任務を続けていた瑞生の許に、やっと交代の要員が到着した。一人は首藤の片腕的存在の三沢と、もう一人は瑞生より少しキャリアが長い秋山である。

「瑞生、待たせたな。ここで監視対象が変わろう。お前は通常任務に戻っていいぞ」

「わかりました。よろしくお願いします」

瑞生は二人に一礼すると、憐の監視業務へと戻っていった。その彼女を三沢は苦笑いしながら見送っていた。

「まったくあいつは。こんなところで男二人に仰々しくお辞儀なんかしたら、周りから目立つだろうに。ああいうのを詰めが甘いって言うんだ」

「まったくですね、三沢さん。瑞生は有能なんですけど、想定外の事が起こると、時々ああいうミスをするんですよ。まあ、大事になる様なミスは今の所ありませんが」

「そう思うか、秋山。あいつの監視任務だって、面が割れた事が幸いして続いているんだぞ。期待の新人もまだまだ指導が必要だって事だ」

二人は笑みを浮かべながら二手に分かれ真木の監視を行っているが、確かに彼らは周囲に溶け込み、ターゲットに気付かれないポジションと素振りをしている。監視という任務に関しては、やはり彼らの方がテクニクが一枚上手なのは間違いない。

真木の監視を引き継いだ瑞生は、憐の監視に戻るためレストランに向かったが、彼の姿はなかった。他の仕事についているのだろうかとあたりを見回していると、針巢が瑞生に話しかけてきた。彼とは、繰り返しここに通っている内に顔見知りになり、よくしてもらっている間柄になっていた。

「おお、瑞生ちゃん。どうした、憐の事を探しに来たのかい」

「あ、いや、まあ。そういう事になるんですけど」

「とぼけなくていい。けど、悪いなあ、せつかく来てくれたのに。あいつ、体調を崩して今日は早退なんだ。何なら、見舞いにでもいつてくるかい。何、スタッフルームとは言っても、今は完全にあいつの家だ。開園中に行っても構わんよ」

「そうですか……。じゃあ、少し様子を見に行ってきます」

瑞生は針巢に断りを入れた上で、憐の部屋に向かう事にした。傍

から見ても、瑞生自身にとっても公私混同なのはわかってはいるのだが、そこは何とか整合性をうまくつけているのを装いながら、彼の部屋の前に辿り着き、ドアをノックした。

「憐、針巢さんからあなたが体調を崩したって聞いたけど、大丈夫なの」

瑞生は憐の返事を待ったが、返事はない。眠っているのだろうか。「憐、寝ているの。開けるわよ……」

瑞生はそつとドアを開け部屋の中に入った。墓はしんと静まり返り、人の気配がない。憐の姿はベッドにもなく、部屋は無人だった。「憐、どこに行ったの……」

彼女の言葉は、監視対象ではなく、あくまで憐の事を本気で心配しての言葉だった。一体、どこに姿を消したのか。

実は、憐は彼女が部屋に辿り着く前窓からに姿を見つけていた。いつもなら、彼女の会う事が憐の一番楽しみにしている事なのだが、今は一番恐ろしい事であった。何故なら、ルシフェルは自分の近くにいる人間に憑依する、そんな行動をとるからだ。最初の女子高生、次の尾白、どちらも自分のそばにいた。そして、一人で部屋に居る間は襲ってこない。自分のそばに人がいるときだけ、その人物に乗り移る、憐はその事に気がついた。だから、今瑞生と接触すれば、彼女にも容赦なくルシフェルは憑依するだろうし、寧ろそれを狙っているとも言えなくもない。それだけは、何としても避けたい。瑞生がああなるルシフェルになるなど、一番考えたくないし、あつてはならない事だった。憐は、気がつかれない様にドアと反対側の窓から抜けだし、必死で走りながら瑞生から離れようとした。いや、誰にも会うわけにはいかないのだ。

柵を乗り越え、遊園地の外に出た憐は、辺りを警戒しながら歩いていたが、運悪く角から飛び出してきた自転車に乗った女性と接触

しそうになった。瞬間的に女性と目が合った憐だったが、次の瞬間にはその姿がルシフェルに変わり、憐の前に立ちはだかった。後ずさりする憐を嘲笑うように、ルシフェルは距離を詰めながら歩いてくる。

「どうした、デユナミスト。逃げるのか。それは無理だ。人がいる限り、私はお前の前に現われる。お前に逃げ場はない。そして、お前が守りたい人間にも私は入り込む。その時は、どうするのかな」

もはや、変身する気力もブラストショットを向ける意思もなくした憐は、ただルシフェルに背を向け逃げるしかなかった。誰に会うわけにはいかない、そう願っているにも拘らず、何人かの人とすれ違い、その度にルシフェルは憐に自分の姿を見せつけてくる。憐は自分にはもう逃げ場がない事を悟るしかなかった。逃げれば逃げる程、ルシフェルに憑依される人々が多くなっていく。そう、自分が存在する限り、被害者は増えるのだ。

憐が逃げ回っている頃、イラストレーターはレッドトルーパーから送られてくるデータを休むことなく分析していた。食事さえとる暇も惜しんで、あくまで友人として憐を助けたい、その一心だった。憐の周りにルシフェルが現われた瞬間の振動波も捕らえられるほど、レッドトルーパーの網は狭められたいた。もうそれだけで十分すぎるデータが揃っている。そして、イラストレーターはある事実に気がついた。

「これだけ人がいるにも関わらず、どうやらルシフェルは憐に接近した人間にしか憑依していない。何だ、ルシフェルに憑依する人間の共通点は……」

イラストレーターは頭を抱えながら、必死に考えた。もはや任務を超えた私情で事に当たっている。以前の彼なら、どんな非常な任

務にも対処できたし、命令も下せた。だが、憐との再会により、かつてまだ夢を持ち、友人たちと暮らしていた頃を思い起こし、彼にも人間性が芽生えていた。そして今は、友情という個人的な感情で事に当たっていた。憐を助けるためには、今は自分の力が必要だという使命感も加わり、彼の頭脳はいつも以上に激しく思考パターンを組み立て、答えを探し出す。そして、一つの仮説が生まれた。

「そうか。憐の近くにいる人間に憑依すると言う考えがそもそも違う。逆なんだ、ルシフェルは憐の、デユナミストのそばにいる人間にしか憑依できないのでは……」

イラストレーターはさらに細部まで分析し、ルシフェルのパターンにある奇妙な点を見つける事が出来た。それは、ルシフェルにあるR7性因子の波形が、憐の物とほぼ一致しているのだ。憐はデユナミストであるために、その波形は独特の物に変化している。だから、通常の人間とはパターンが違う。したがって、仮に一致するか類似する者がいるとしたら、同じような波形を持つ者、つまりデユナミストを経験し、R7因子の波形に変化を加えられた者しかないはず。つまり、ルシフェルは憐の近くにいることで、憐の持つ光に感応し、R7性因子のパターンが変化した人間に憑依する条件を合わせているのだ。

「そういうことか。でも、これでは憐の傍に近寄る者は皆ルシフェルになる。駄目だ、これじゃ有効な手を打つにはまだ至らない。まだ、策を練る必要があるけどマークはできる」

有効策は得られないが、出現パターンを見つけたイラストレーターは、調査に当たっているレッドトルーパーに、憐の生活圏に集中して調査をするように命令した。彼は、友を助けるためにさらなる答えを求めて思考を続ける。

方々を逃げ回った憐だが、夕暮れを迎え人通りが少なくなった頃を見計らい、自分の部屋へと帰路についた。人通りが少ないこともあって、ささくれだっていた憐の神経も落ち着き、せわしく動き血走っていた目も穏やかな様子に戻っていた。敵がどこから現われるかわからないが、一度一人で落ち着かなければいけないと憐は考え、辺りを警戒しながらようやく部屋に辿り着いた。

とにかく疲れていた。このままベッドに身を投げ出して眠りにつきたい。心底そう思いながら信に手をかけた瞬間、憐がぎくりとした。ドアが開いているのだ。まさか人がいるのかと思い、憐は恐怖しドアから後ずさりした。そして、目の前のドアが開き始めた時、憐の表情は完全にひきつっていた。

「おう、憐。具合が悪いならちゃんと寝てなきや駄目だろ」

中にいたのは針巢だった。何か用がありここに来たのかもしれないが、今の憐にとっては、人の訪問は恐怖以外の何ものでもない。しかし、事情を知らない針巢は怪訝な顔で憐を見つめている。

「どうしたんだ、お前。幽霊でも見た様な顔して」

「は、ハリスだよね……」

「お前、本当に大丈夫か。ちゃんと寝てろよ。薬がいるなら買ってきてやるから。そうそう、中のテーブルにお前の今月分の給料置いておいたからな。給料日、お前は休みだろ。だから、今日の内に渡そうと思ってな」

「ありがとう、ハリス……。もう大人しく寝ているから」

「そうか。じゃあ、早く風邪を治せよ」

ハリスはそう言いながら部屋を出て行き、入れ替わる様に憐は部

屋に滑り込み、ドアを閉めて張りつめた空気を破る様にホツと一息をついた。何事もなくてよかった。憐をその場に座り込んでしまった。極度の緊張の糸が切れたためだ。思わずそこで眠りそうになったその時、鍵を破壊しながらドアがこじ開けられ、憐は襟をつかまれそのまま二階の高さから外に放り出された。体が地面にたたきつけられ、息がつまり全身に激痛が走る。突然の出来事に運動神経の言い憐でも受け身をとることができず、地面にうずくまっている彼を見下ろす様な、あの忌まわしい声が聞こえていく。

「油断してもらっては困るねえ。お前のゆく場所にいる人間はすべて私の体だ。だが、今はもうこの男しかない時間の様だ。少し、お前と遊びたくなってきたよ。さあ、私と戦ってもらおうか」

まるで戦う事、憐を追い詰める事が楽しみで仕方がない様子で、ルシフェルは憐の傍に降り立った。しかし敵がそばまできても、憐は立ちあがることはできない。ルシフェルの体には針巢の体が使われているため、憐には戦う事が出来ないのだ。動かない憐に業を煮やしたルシフェルは、腹部をけり上げ、引きずり起こすと壁に何度も叩きつける。

「さあ、その光を解放しろ。お前の光がどれほどのものか見せてみる」

「ハリスを返せ……」

「この男のことが。いいだろう、返してやるとも。俺と戦えばな。安心しろ、戦っている内はこの体を捨てていく様なことはしない。お前から逃げはしないからな」

「……、いいぜ、やってやる」

憐は体を引きずり起こしエボルトラスターを取り出すと、覚悟を

決めた侍が抜刀するように、エボルトラスターを鞘から引き抜いた。憐の変身を察知したイラストレーターは、同時にルシフェルの出現も感知した。まだ対応策が見つからない状態での戦いの発生はあまり好ましい事ではないが、憐の立場で考えればなりふり構ってられないのは理解できる。

「ルシフェルとウルトラマンが出現。レッドトルーパーは現場へ。ただし軽率な接近は慎んでください。ナイトライダーはチェスターで現場上空へ向かってください」

各部隊に指令を出し、彼は最も好ましい結果に向かうべく、最善の方法を探り続ける。だが、今は援護しかしてやれないのが精いっぱいだった。

「憐……」

憐はウルトラマンへと変身し、ルシフェルとの戦闘を始める。しかし、いつもの覇気はなく防戦一方になる。ルシフェルはそれに構わず圧倒的な強さを見せつけてくる。

「光よ、この程度の力ではないだろう。ファウストやメファイフィストを打ち破ってきた力を受け継いだ者がこの程度とは思えん。本当の力を出してみろ」

「うるさいっ」

「いいのか、打たれるばかりでは私には勝てないし、この男は救えないぞ。お前が敗れば、この体は永久に私の物になるかも知れないが、いいのか」

その言葉に敏感に反応したのか、ウルトラマンは猛烈な勢いで拳を続けけざまに打ちこんできた。ルシフェルはそれをすべて受け流

したが、油断した所に回し蹴りが即頭部を直撃した。大切な人を救うために自分が死ぬわけにはいけないという憐の、ウルトラマンの覚悟の一撃だった。ルシフェルはその一撃を痛みなど感じていないかのように首を回しながら、深く裂けた口から笑い声を上げた。

「それでいい。この男の体を奪い返すには、お前は苦しみながら私と戦うしかないのだ。さあ、お前の力を見せてみる」

ウルトラマンは悲痛な覚悟を背負いながらルシフェルに立ち向かった。パンチを何発も打ち込み、キックをロー、ミドル、ハイと使い分けながらものすごい速さで打ち込んでいく。そしてルシフェルもまた同様に肉体を存分に使った技を繰り出し、一步も引くことはない。そして、ルシフェルの蹴りがウルトラマンを襲った瞬間、それを回避したウルトラマンがルシフェルの頭上を飛び越える際に、かかとを後頭部に打ち込みながら背後に降り立った。ルシフェルは頭部への攻撃に、前方にふらふらと倒れ込みそうになった。ウルトラマンはようやく優勢に立ったが、それは絶対的なものではない。

「それでいい。本気で来なければ、お前は私に殺される」

「……」

人質を取られている限り、決してルシフェルの精神的な優位性は揺らぐことはない。憐の精神的な怖れや動揺は、そのままウルトラマンの能力に影響する。そんな苦しい戦いを繰り広げている所に、レッドトルーパーが到着した。彼らは、ルシフェルの姿を確認するとそれがターゲットだと理解した。

「ウルトラマンを援護。ルシフェルに向け攻撃開始」

彼らはディバイトガンナーを構えて発砲した。その弾丸がルシフェルに当たる直前、それを遮る者が間に割って入った。それはウルトラマンだった。彼は盾となって銃弾を全身に受け、そのダメージ

で後ろに倒れかかる所をルシフェルが首に手をまわし、再び自分の盾に使う様な態勢を取った。こうなると、レッドトルーパーも攻撃ができない。

「クソ、ウルトラマンを盾にしゃがった」

「何でルシフェルをかばうんだ」

軽率な接近を慎めと言われたレッドトルーパーだったが、敵が極めて近い所に出現した上、ウルトラマンが出現したとなれば、これまでの作戦のパターンでは、ウルトラマンへの援護は当然の形だからだ。そこで見たのがウルトラマンの不可解な行動と、ルシフェルがウルトラマンを盾に使う行為という事態に彼らは理解に苦しむしかなかった

「お前の友人どもは優しいな。俺の器になるかもしれないのに。だが、邪魔な事に違いない。二人きりで殺し合いを楽しもう」

ルシフェルは、不敵な笑みを浮かべると、体を勢いよく上昇させていきながら拳から暗黒の弾丸を空に放った。空に暗黒の雲が広がりダークフィールドGが発生していく。ルシフェルは己のテリトリーへとウルトラマンを引きずり込んでいった。

現場上空に到達したナイトレイダーは、ダークフィールド発生との連絡を受け、ハイパーストライクフォーメーションに移行し、亜空間に突入していく。

「位相同期解析を開始。いや、何だこれは」

「どうした、孤門」

「隊長、δ機の計器に表示された位相パターンが今までと違って固定できず、ダークフィールドをロックできません」

「クソ、これも奴の能力か。石掘、何とかなるか」

「これは難敵だな。ですが、こちらでマニュアル操作して微調整します。……、よし、これをδ機に転送すればいい。孤門隊員、これで行けるはずだ」

「了解。位相同期を確認。ダークフィールドに突入します」

クロムチェスター・ハイパーストライクフォーメーションはダークフィールドGに突入した。すると、突然目の前に岩塊が出現し、操縦桿を握る凧は緊急回避を行う。全員に強力なGが加わるが衝突は回避できた。しかし、岩塊は一つだけではなく、あちこちに無数に浮遊している。異変はそれだけではない。チェスターの機器もこの空間の異常性を示している。高度計は滅茶苦茶な数字を次々と示し、水平を示す機器も方位を示す機器も、時間表示もすべてが狂っていた。

「ここは何なの。これじゃ、全く計器は使えない、すべてマニュアル操作で操縦も状況判断もしなければいけない」

凧は、計器を使えないため、すべて五感に頼って音速で飛ぶチェスターを操縦しなければならなかった。また、状況を分析している石掘と平木も戸惑いを隠せなかった。

「これじゃ、敵がいてもロックオンもできないわよ。ちょっとヤバすぎるって、この空間」

「ここは普通のダークフィールドじゃない。物理法則を無視している、矛盾の空間なんだ」

異常な事態を無線で聞いていた孤門は、ここどこかで戦っている憐の身を案じ、その姿を探した。レーダーまでいかれてしまって

いるこの状態では、目で探すしかない。孤門は必死にウルトラマンの影を探し続け、やっと下方にジュネッスブルーの姿を見つけた。
「隊長、ウルトラマンを発見しました」

「わかった。計器も使えない以上方角もわからない。風、孤門に操縦桿を渡せ。お前はガンナーを務めろ」

「了解」

操縦の機能がる機の操縦桿に移行し、孤門はウルトラマンの許に向かった。次第にその姿が接近して鮮明になってくる。ウルトラマンは膝をつき、ダメージのためかなり消耗しているように見える。最悪の事態だけは避けられ、孤門はホッとしてウルトラマンのそばを旋回した。しかし、その姿を見た憐はチェスターに対し、こっちに来るなという素振りを見せる。そのジェスチャーには強い拒絶の念がこもっていて、これ以上近寄ると攻撃してくるのではないかと思うほど、鬼気迫っている。

「憐、どうした。何を焦っている」

普段の憐を知っている孤門にしてみると、ウルトラマンの素振りとそこに漂う感情は、見た事のない生々しいと言っていていいものだった。まるで何かを恐れるかのような……。不審な思いを抱いている孤門の耳に、無線から和倉の叫び声が鳴り響いた。

「孤門、後ろから何かが迫っている。二時の方向に回避するんだ」

孤門は返事をする前に反射的に操縦桿を動かし回避行動とった。右側に飛行軌道を逸らしたチェスターの横を巨大な黒い影が横切ったのを、ナイトレイダーの全員は目撃した。まるで小惑星帯のように無数の岩塊が漂う空間を、岩塊を蹴りながら縦横無尽に高速で移動していく暗黒の巨人・ルシフェルが、チェスターに乗るナイトレ

イダーに不気味な微笑みを向けながら、自身とは対照的な鮮やかな色の体を持つジュネッスブルーに襲いかかっていく姿だった。

チェスターに対し、嘲笑うような表情を向けながら、ルシフェルは小惑星帯の様に浮かぶ岩塊を蹴りながら、トリッキーな素早い動きでウルトラマンに接近していく。それに対して、ウルトラマンはダメージが大きいのか、立ち上がれずにいて、敵の接近に気がつけずにいる。背後にまわったルシフェルは、獲物を狙う肉食獣の様に低い体勢を取りながら音もなく襲いかかろうとした。

「ウルトラマン、後ろだっ」

孤門は危うく憐の名を叫びそうになるのをこらえながら、絶叫した。聞こえるはずのない距離だったが、孤門の声ではなく心が届いたのか、ウルトラマンはとっさに横に飛び、ルシフェルの攻撃を寸前で回避し、両腕の爪を突き立てたその不意打ちは岩盤に突き刺さった。ルシフェルは余裕の態度は崩さないが、邪魔をした孤門の乗るチェスターを忌々しげに見つめている。

「お前は邪魔だ……」

ルシフェルは、邪魔者を追い払うべく、右腕を振るってダークフエザーをチェスターに向けて放ってきた。

「孤門、回避しろ！」

和倉の声が届く寸前に、孤門は反射的に操縦桿を引き、攻撃を回避した。全機能が正常に働かない異常空間のため、すべての操縦系統を孤門のδ機に回さざるを得ない状況は、隊員すべての命が孤門の腕にかかる事を意味し、この危機的状況に肝を冷やした。だが、ルシフェルは彼らに休む間を与えず、ダークフエザーを放ちながら、左腕で黒い弾丸を作り出し、それを上空に向けて打ち上げた。弾丸は勢いよく上がると、花火の様に爆裂し、無数の散弾がチェスター

めがけて降り注いできた。これは、ダークファウストの技、ダーククラスターだ。降り注ぐ弾丸にチェスターを正対させ、孤門は回避行動をとり続ける。もはや、思考する暇などない。襲い来る弾丸とその軌道、その情報が脳に達する前にすぐさま神経に逆流し、まさに反射的に彼の腕を動かし、操縦桿を操らせる。土壇場に追い込まれた人間の本能がなせる技と言うしかない、熟練パイロットでもここまでの操縦はできないと思われる神技のような操縦だった。

すべての弾丸を回避しきった孤門は、チェスターを旋回させながら再びルシフェルに向かっていこうとする。

「隊長、ウルトラマンの援護の許可を」

普段の孤門からは想像もつかない鬼気迫る声に、和倉は一瞬だが戦慄した。だが、その声は興奮に我を忘れた人間のものではなく、高揚感を感じながらもそれを冷静にコントロールしている、理性的なトランス状態とも言えるものと、ナイトレIDER以前も現場の最前線に立ち続けた和倉は見抜いた。

「孤門、ウルトラマンの援護を許可する。操縦はお前が続ける。風、お前はスパイダーの発射を。お前の判断で撃って構わん。石堀、ロツクオンシステムは回復しそうか」

「短距離なら行けますが、それ以上はやはり無理かと……」

「できるならそれでいい、可能な限り復旧に専念しろ。平木、お前はアビロックを撃て。お前も自分の判断で撃て。マニュアルなら、お前が一番頼りになる」

「了解」

「よし、行け孤門っ」

和倉の指示と同時に、孤門はブースターを全開にし、音速でルシフェルに向かっていく。ルシフェルも応戦してくるが、それを最低限の回避行動でかわしていく。埒が明かないと判断したルシフェルは、飛翔し、岩塊を飛び移りながらチェスターに接近してくる。

まず、風が先制する。ロックオンできない以上、追尾はできないが辺りに漂う岩塊には命中させることは容易だ。ルシフェルの足場を奪い、砕け散った岩が石つぶての様にルシフェルを襲い機動力を奪う。一瞬動きを止めたルシフェルに、今度は詩織がアビロックを絶妙のタイミングで発射する。熱源ではなくビースト振動波を検知するこのミサイルであれば、すべてのビーストの振動パターンを持つルシフェルを絶対に逃すことはない。ミサイルの接近に気がついた時には、すべてのミサイルがルシフェルを直撃した。

続け様の攻撃にきりもみ状に吹き飛ばされるルシフェルに向かい、砕けた岩盤をも完璧に回避しながら孤門はチェスターをルシフェルに接近させる。そして、石掘が回復させたロックオンシステムがルシフェルを捕らえ、和倉は至近距離からハイパーストライクバニッシャーを発射した。当然、ルシフェルに回避する暇はなく、直撃を食らったその体は岩塊に叩きつけられ、仰向けに倒れている。

誰もが仕留めたと思ったその時、ルシフェルは突然跳ね起き、ダメージなどないと言うような笑い声をあげた。その声に呼応するように、ダークフィールドGがルシフェルにエネルギーを与え、現実

にそのダメージを回復させてしまった。
「クソッ。この空間じゃ、あいつにダメージを与えるなんて不可能なんだ。一撃で倒せない限り……」

孤門の口惜しさを嘲る様に、ルシフェルは今度こそとどめを刺さんと、メフィストの技であるダークレイシュトロームの態勢に入る。放射状に熱線を撃たれたら、避け切れる保証はない。誰もが息の呑んだその時、ウルトラマンが割って入り、ルシフェルの腕を蹴りつけ、発射態勢を妨害した。今度はウルトラマンとの戦いが再開され

る。

ウルトラマンの素早い攻撃に、ルシフェルは動じることなく対応し、決定打を許さない。対するウルトラマンの方は、いつもの様に攻撃を受けるのも構わず、ひたすら相手の懐に飛び込んでいく。しかし、虎穴に入らずんば虎児を得ず、敵の間合いに入り込んだことでようやく手に入れた相手の隙に、ウルトラマンは拳を顔面に打ち込もうとした。しかし、その拳は寸前で止まってしまった。相反する感情に苦しむかのように、その拳は小刻みに震えている。

「憐、何故止めるんだ」

「どうして好機を自ら捨てるの」

孤門と風の疑問は、隊員すべての気持ちを代弁していた。しかし、その理由、憐の苦しみは誰一人する由はないのだ。自らの目の間で止まった拳をルシフェルはゆっくりと降ろし、ウルトラマンに粘着質な喋り方で話しかける。

「どうした、戦う決意をしたのではないのか。それでは、この器は取り戻せないぞ」

そして、目にも止まらぬ速度のパンチをエナジーコアに直撃させた。その威力は絶大で、ウルトラマンの体をものすごい勢いで飛ばされ、数個の岩塊に激突し、それを粉碎しながら飛ばされていた。そして、ようやくその勢いが収まり、一つの岩場にあおむけで横たわっている。ダメージのために全く動けないでいる所に、ルシフェルの足が胸に叩きつけられ、身動きが取れなくなる。

「青いな、貴様は。自らを顧みず誰かを守るくせに、誰も守れずに死んでく。傑作だな。癒しの天使に見放された憐れな奴。その下らない命、俺がもらってやる」

ルシフェルはじわりと足に力を加え始め、エナジーコアを踏み

じっていく。その圧力にウルトラマンの体は岩にめり込んでいく。まさに絶体絶命の危機に、ナイトレイダーは最後の残弾を使ってミサイルを撃ち込んだ。しかし、それを察したルシフェルはすべてミサイル打ち落とそうと照準を図った。しかし、それが隙を生んだ。ウルトラマンはルシフェルの足をがっしりと掴み、自由を奪い動けなくした。ルシフェルが何度も蹴りつけても、その手を放そうとはせず、さらにエナジーコアを赤熱させていく。

「貴様、何のつもりだ」

「早く、早く、ハリスを返せよ！」

ウルトラマンはゼロ距離でコアインパルスを放った。絶対に避けられない攻撃にルシフェルは呑みこまれていった。同時に、ダークフィールドが崩壊を始め、ナイトレイダー達は通常空間に弾きだされた。すべての計器が正常に戻り、チェスターは安定した飛行を取り戻した。しかし、残弾はゼロ、ハイパーストライクバニッシャーの使用で消耗が激しく、これ以上の行動は不可能と判断し、和倉は孤門に帰等を命じた。

「孤門、一体基地に戻るぞ。……、おい孤門、どうした」

「……すみません、隊長、帰等ですね」

どうやら孤門は相当神経をすり減らしたようだ。無理もない。いかに成長著しいとはいえ、最近までパイロット経験のなかった者があれだけの神がかり的な操縦をこなしたのだ。通常空間に戻ったことで、緊張の糸が切れたのだろう。

「孤門、操縦はもういい。風、操縦を変わってやれ」

ルーキーが成長するのは嬉しいが、ルーキーに命を預ける事になる事態が続くのも考えものだなと、和倉は深いため息をついた。何

しろ、あの孤門の操縦がまぐれだった可能性も否定できないし、それに賭けた自分の指揮官としての判断がうすら寒いものも感じたからだ。

ダークフィールドから弾き出された憐は、遊園地のそばの雑木林に倒れていた。何とか生きている。でも、彼は、自分の事より針巢の事が心配でならなかった。周囲を必死に見回し、針巢の姿を探した。ルシフェルを撃った技は、反射的に脳裏をよぎった技で、見た目は派手だが威力は弱めに撃てる技だった。ルシフェルの意識を追いだせるはずだと思ったのだが。そしてようやく針巢の姿を見つけた。仰向けに大の字に倒れている倒れている彼の姿を見つけ、憐は安堵と不安半々の気持ちで駆け寄っていった。

「ハリス、ハリス。頼むよ、起きてよ……」

憐は悲痛な声で、目から涙をこぼしながら針巢に呼び掛けた。すると、ハリスはまるで寝起きを起こされたかのような表情で目を覚ました。

「おう、憐、お前どうしたんだ。ん、何で俺はこんなところで寝ているんだ」

針巢が目を覚ましたことで、憐はようやく安心でき、安堵の思いでわんわん泣き始めた。17歳とは思えないほど、子供の様に人目もはばからずに大声で泣き、針巢の胸に顔を埋めている。

「よかった、よかった、本当に良かった……。ごめん、ハリス、俺のせいで……」

「憐、お前どうかしてるぞ。とにかく落ち着け。ん、イテテ、何だか腰が痛いな。足でも滑らせて転んだかな。ハハハ、頭を打って忘れちゃったようだ」

針巢は憐を安心させようと軽妙な口調で軽口を叩いたが、憐は泣き止むどころか一層激しく泣く。そんな様子に針巢は何かを感じ取った。この子は身近な人が怪我をしたり、哀しんだりすることにとても敏感だ。まるで、自分な大切何か、それどころか自分の手足をもがれる様な苦痛でも感じるかのように。

憐を拾ったのは、彼が橋の下に寝泊りをしているのを見かけた時だった。ただの家出少年にしては闊達で、人と関わる事に積極的。それでいて、こちらから深い関係を築こうとすると、どこか距離を持つ。妙な矛盾を抱えていた。針巢は、長い人生経験で、憐が人と深い絆を求めながら、それをどこかで恐れる。さらに突っ込めばその絆が壊れるのを極度に恐れているのではないかと思った。針巢は、何となく憐の過去がわかった様な気がしていた。

——この子には両親はいない。いや、家族と言うものすら知らないのだ。

家族と言うこの世で最も強い絆を知らないからこそ、それを求め、過敏に反応する。しかし、他人から近づき絆を深めようとされると、失う怖さが生まれ、必要以上に他人と近づけなくなる。針巢は、憐の事をそんな風に思っていた。ただ、何故彼がそこまで人から自分を求められる事に慎重になるのか、その根源はわからなかった。だが、憐が自分にとってどんな存在を無意識に求めているのか、今の憐の様子見てわかった。

——こいつ、俺に父親の存在を求めているんだな。さしずめ、尾白は腐れ縁の昔からの親友、孤門君は兄貴、そして瑞生ちゃんも恋人であり、妻であり、そして母親……、なのかな。

そう思うと、憐の今の自分に対する大げさな程の心配ぶりは痛いほど理解できた。むしろ、自分を父親の様に考えていてくれたこの少年が、まるで自分の息子の様に思えていた。彼は片手で憐の頭を

そつと抱き寄せながら、小さな子供を安心させるように語りかけた。
「憐、俺は大丈夫だ。安心しろ。心配かけて悪かったな。さあ、家に帰るか」

「うん……」

憐はまだ泣き止むことができなかったが、針巢は一向に構わず、憐と一緒に時を過ごし続けた。

基地に戻ったナイトレイダーは、戦いで得たダークフィールドとルシフェルのデータの解析は上の方に任せ、和倉の命令で休養を命じられていた。機体はもちろん、隊員の精神面でも過酷すぎる環境での戦いだっただからだ。和倉は独り、コマンドルームで椅子の背もたれに体を預けていた所に、風がコマンドルームに戻ってきた。完全にそ湯申し切った孤門を部屋に送り届けてくるように命令していたのだ。

「孤門の様子はどうだ」

「あれだけの操縦を経験の浅い中でこなしたわけですから、相当消耗していた上、緊張状態が解けなかったので、医療班との相談の上で鎮静剤を与えて、それに伴い24時間の休養を命じました」

「仕方ないな。操縦は俺が命令したんだ。お前も、休んでおけ。ヒューマンエラーの要素は無くしておく必要がある。ナイトレイダーは12時間の活動停止だ。孤門の復帰は24時間後だ」

「わかりました。では失礼します」

風は一礼して、コマンドルームを後にしようとしたその時、和倉は彼女を呼び止めた。

「風、お前は孤門をどう思う」

「どう思うと言いますと」

「俺はあいつを最初は青臭いと思った。だが、ビースト殺しではない、人命救助と言う俺達の任務の根底にある事を思い出させた。それだけじゃない、あいつは姫矢と関わり、ウルトラマンと俺達の橋渡しをした。ファウストやメフィストと対峙してもあいつはあっち側にはいなかった。そして、今日は俺たち全員の命を救った。お前はあいつをただの新人隊員とまだ思えるか」

「……。私も、もう彼を新人とは思っていません。もはや、必要不可欠の存在だと思っています。そして彼がもたらした物、それらに運命すら感じています。決して口には出しませんが」

入隊し、風の許で基本を叩き込まれた孤門であったが、最初はナイトレイダーの任務にも馴染めず、考えなくていい疑問にのめり込み悩んでしまい、風にしたら甘い、和倉にしたら青い、そんな存在だった。だが、今はその存在はキャリアを超えて大きくなり、ビーストや闇の巨人との戦いにおいて、いなくてはならないと言う所に来ていた。彼がナイトレイダーに組み込まれたのは、何か大きな力によるのではないか、そんな思いが少しずつ心の中で顔をのぞかせていたのだ。

「運命か。運命なんてあつてたまるかと思ってこの歳まで来たが、今はその運命を信じてみる気になってきた。決められた一本道を行くんじゃない。選択する運命があるんじゃないかってな。今じゃ、孤門をクビにせずここに置き続けたのは、俺が運命を選択した結果なのかもな」

「そう言うことになる、私が孤門隊員の教官を務めたのも運命の一部、ですか」

「わからんな。運命なんて未来にならなきゃ確認できない代物だ。悪いな、余計な事を言つて。ゆつくり休めよ。あのルシフェルって奴は強敵だ。万全の態勢で挑まないと、命の保証がない」

「わかりました。それでは」

凧がコマンドルームを出ていくと、和倉はコマンドルームの明かりを消し、ブレイクスペースの椅子に腰かけてリクライニングを倒し、体をゆったりとさせると、数分後にはいびきを掻きながら眠り始めた。

凧も自室に向かつて廊下を歩きながら、和倉が言った言葉を思い出して反芻していた。

——選択する未来。溝呂木との出会い、孤門隊員との出会い、それも選択した運命の一部。確かに、彼らの出会いが私の人生に小さいながらも変化をもたらして、今がある。なら、これから私が選択していく未来には何があるというの。誰との出会いが私を変えていくの。

CICでは、イラストレーターがこれまでもたらされ情報を基に、ルシフェルの特性、行動パターン、戦闘データを解析を続けていた。彼の頭の中では、ルシフェルと言う存在をある程度まで把握することに成功していた。問題は、実体を持たない神出鬼没の相手をどうやって迎え討ち、仕留めるのが問題になる。姿を見せず、息を潜めてデユナミストを狙う存在に、どんなトラップを仕掛けられると言うのだらう。思案を巡らし名がひたすら考え続けている。

「憐を、デユナミストを狙う、か」

ふと彼の目に光が宿り、ある一つの考えが浮かんだ。確かに有効な手であるには違いないが、その結果に至るまでの確証が持てない。それには、ルシフェルの行動をその作戦に誘導しなければいけない。魅力的な作戦ではあるが、現実性を担保できない事で、イラストレーターはその気質のため決断できないでいる。彼は可能性を探すのではなく、ある一つの結論に向かって辿り着くにはどうするべきかと思考する。それ故に、一つの道筋に定められないものしか採用できない。選択肢と言うあやふやなものは排除しようと思考するのだ。何かいい手立てはないかと考え続ける彼の後ろに人の気配が生まれ、話しかけてくる声がある。

「優、頼みがある」

イラストレーターをファーストネームで呼ぶ数少ない存在、そして最も心を許している憐の声だった。ゆっくり振り向くと、そこには憐の意識体が立っていた。憐の持つ不思議な力にはサイコメトリの他、こうして自分の意識体を遠くに送る事が出来るが、それを感知できるのは、現状ではイラストレーター・吉良沢優のみである。「憐、だいぶ焦燥しているみたいだね。来るのはわかっていたよ」

「さすがだな。もう知ってるだろ、優なら。ルシフェルの事だ」

「奴は君の周辺にいる人に憑依する。光を手にした憐に感応する人にね。それから逃げたい、そうだね」

「何でもわかってるんだな。叶わないな。もう優しく助けを求められる人がいないんだ。瑞生は絶対巻き込みたくないし、孤門にも助けを求められない」

「……。策はある。君が納得してくれればの話だけど」

二人はそれからずっと話し合いを続けた。相談であり、討論であり、やがて納得に至る。憐は為すべき事のために帰って行き、イラストレーターはここから先は、作戦参謀として非情に徹するいつもの姿に戻る決意を胸に秘め別れていった。それぞれが選んだ道に向かうために。

鎮静剤が効き、半日近く眠った孤門は、まだ覚醒しない体を起こし、時計を見つめながら自分がどれだけ眠ったのかを実感した。そして、着替えを始めながら、昨日の事を思い出していた。偶発的とはいえ、S級と言っていい難易度のフライトを行った際の高揚感、恐怖、興奮を思い消すと、今でも胸の鼓動が速くなりそうだった。そして気になるのは、ウルトラマンの行動だった。

異常なまでに接近を拒む行動。ルシフェルに対する攻撃への躊躇。いつもなら、相手に向かって前のめりになっていく憐の姿ではなかった。何かあったのではないかと気がかりで仕方がない孤門は、与えられた休養時間を使って、直接会いに行こうと決めた。

着替えを済ませ廊下に出ると、ダムの管理所に偽装された出入り口の一つに向かって歩いていった。すると、目の前にイラストレーターが現われ、孤門の行く手を妨げる形になった。

「孤門隊員、憐の所に行くつもりですか」

「……。はい。気になる事があるので」

「戦闘中のウルトラマンの様子から感じ取ったわけですね。その鋭さ、さすがです。でも、今は憐の所に行つてはいけません。あなたのためにも、憐のためにも」

孤門にとっては、まるで理解できない事であった。二人は憐の事ももちろんだし、お互いの事も秘密を共有すると言う、この基地内

でも特異な関係だった。孤門が憐と交流を持つ事に関しても、深入りするなどは言いながら半ば容認する態度をみせていた。それがここにきて接触をやめる様に言う真意は何のか、孤門は測りかねていた。

「それは、どういう意味ですか」

「あなたは憐にとってただの友ではない。彼は、あなたに対して兄の様な思いすら抱いている、だからです。そして、今はその事が憐を苦しめる事になる」

「言っている事がよくわかりませんが……」

「あのルシフェルはデュナミストの近くにいる人間、つまり憐に接近する人間に憑依する存在です。だから、憐は自分にとって大切な存在にルシフェルが憑依するのを恐れています」

「そんな。それじゃあ、あの時も……。でも、それなら、なおさら彼を一人で苦しませるわけにはいきません」

「あなたはやはり優しすぎる。でも、だからこそ、憐はあなたに兄としての存在を求めたのかもしれない……。憐の事は心配しなくても大丈夫です。もう手は打ってあります」

「それ一体何です」

「それは君が知る必要のないことだし、するべきことでもない。あなたにとって必要なことは、戦場でウルトラマンを援護すること。違いますか」

「……。わかりました。憐の事、よろしくお願いします」

「しっかり休養をとり、ミスの発生確率を減らしてください」

「はい。では、失礼します」

孤門は一礼し、その場を去った。その姿を見つめながらイラストレーターは、

「これでいいね、憐。君にしてやれるのはここまでだ」

と呟くと、その姿を消した。

憐の休日であっても、瑞生の任務は続く。休日の様子を監視することも任務内容だからだ。だが、仕事のある日と違い、憐の行動がわからない事が多く、そのため直接彼の部屋に行かなければならない事が多い。それに、昨日も憐は誰にも行き先を告げずに姿を消した。つまり、任務上ターゲットをロストした事になるため、すぐに捕捉しなければいけない事情もあった。ただ問題は瑞生の方から訪ねていくと、憐は必要以上に舞い上がり、二人で出掛けようと話を持ち出し、任務どころではなく、提案を受け入れていいのか、断った方がいいのか、いつも頭を悩ませる事であった。

それでも、憐の様子を確認しないことには何も始まらないので、憐の部屋に行きドアをノックした。やはり、返事はない。もう一度ノックしても何も反応はないので、瑞生はドアノブを回してみた。ドアはあっさり開き、瑞生は憐の不用心さに内心あきれた。だが、部屋を見渡しても彼の姿はなく、今日も行方はつかめなかった。任務の失敗よりも、憐の行方と安否を気遣う私情の方が今の瑞生の心の中で大勢を占めていた。

無人の部屋にいてもどうしようもない。M・Pの通常任務に戻る事にして部屋を後にしようとしたが、何か伝言でも残していこうと

思った。任務と一切関係ない行為であるが、誰もいないと言うことで、私情と云うか彼女の自然な気持ちがそうさせるのだ。メモを取り出し伝言を書こうとしたが、肝心の内容が全く決まらない。体の具合を聞いたり、どこに行ったのか、何故突然姿を消したりしたなど、色々考えたのだが、色々考えている内にまるで恋人に対してあれこれ口やかましく尋ねるような内容になつていく事に、瑞生は顔を思わず赤らめ焦つてその考えを打ち消し、努めてそつけない文章を書いて、メモをテーブルの上に置いて、部屋を後にした。メモには、

「部屋の鍵はちゃんとかけておくように。不用心よ。 瑞生」

と、簡潔に書いてあつた。

その様子を不思議な視点から、強いて言えば神の視点から見つめる者がいた。ルシフェルである。戦いの際に至近距離から光線を放たれた際に、ダメージを少なからず受け、行動できずにいたのだが、今はまた憐の周囲に張りつこうとここで待っていたのだ。しかし、肝心の憐の姿も気配も全く感じない事にルシフェルは疑念を抱いていた。

「何故だ、何故何も感じない。あの女に乗り移れば、あいつの精神は完全に破壊できる。なのに、何故見つからないのだ。わからぬ……。まあ、いい。標的は奴ばかりではない。幸いにもあいつを見つける事が出来た。今後に禍根を残さぬように始末をつけるのも一考だな」

不気味な声を残し、ルシフェルの視線はどこかに向けられたが、そこにあるものが何なのかはまだわからない。

その頃レッドトルーパーは、イラストレーターからの「直々の」命令で、横浜まで来ていた。どうもこの任務は極秘らしく、上とは

無関係と言つことらしい。小林は何とも面倒な事態になったと思いつながら、もその指令をどこか面白くも感じていた。何故ながら任務の内容が、「M・P」の監視だと言つただから。

小林は、竹を割つた様な性格だから、いいものはいいと思うし、悪いものは駄目だと心の中では、はつきりと整理する。もちろん、組織の中にいる以上は、自分自身を押さえる大人の部分も持ち合わせている。そんな彼にとって気に入らない仕事と言つのが、M・Pの仕事である。

決して個人に対する印象でもなく、彼らの仕事に対する任務でもない。組織の方針に対してのM・Pのあり方である。

パニックを防ぐと言つ理由はよくわかる。しかし、個人の記憶まで奪い、情報を改竄までして守るものはなんなのかと言つ疑問は払拭できないでいる。自分達、前線にいる者が命を張るのは理解できるし文句はない。しかし、記憶や情報を操作してまで何をしているのか、上は現場にも打ち明けようとしてない。それ故に、組織の隠蔽体質の象徴としてM・Pが存在するため、それが気に入らないのである。隠蔽の内容が一般人、つまり国民に対しての物であるばかりか、命を張るべき自分達も情報を遮蔽するだけでなく、騙しているのではないかと言つ疑問が最近湧き始めていた。真面目な和倉は、疑念などあるはずがないと思おうとしているが、ざつくばらんな小林はそう言つ事を平気で考えてしまう。もっとも、そう言う思いも任務時には抑え込めるだけの器を彼は持っている。

「おい、どうだ名古屋。ターゲットは補足しているか」

「ばつちりですよ。何だか、普段の任務と違ってワクワクしますね」

「馬鹿野郎。これだって任務だ、給料も発生する。真剣に取り組みよ」

「了解。レーダーでM・Pの車は補足していますから、接近し過ぎ

ておじちゃんになる心配はありません」

「わかった。コーヒーでも飲んで、引き続き仕事に励め」

小林は名古屋に缶コーヒーを私、自分の箱買いしたブラックコーヒーのプルタブをあげた。秘密組織のため、領収書をきれないのが痛いところだが、高給をもらっている以上みっちり事は言えない。大型トラックの荷台の中に作られた移動基地の中で、彼は部下達と会話をしていた。いつもの任務より、精神的余裕があるのには変わりはない。

「隊長、何で突撃部隊の俺達が、こんな刑事みたいな真似をするんですか」

「嵯川、俺もそこが疑問なんだ。こういう仕事はM・Pが一貫して行うもんなんだが、イラストレーターからの直々の命令なんだよ。しかも、これは全部彼に報告をしろっていう事だ。つまり、上層部は俺達の行動を知らないはずだ」

「うわあ、ヤバイですね。ばれたら謹慎で済むかな」

「レッドトルーパー解散の可能性も……」

「さすがにそれはないだろ、塚本。俺は、イラストレーターから直接指示をもらったんだ。火の粉は彼が被るさ。しかし妙な任務だよな。M・Pの車両をマークして、追跡しろって言うのは。逆の立場ならわかるんだが」

「でも、追跡のプロを追跡して、しかもばれていない。痛快ではありませんね」

中山の指摘に一同は、思わず笑い声をあげた。するとモニターリングしていた名古屋が、モニター画面の変化を見つけ、小林に報告する。

「隊長、標的が動きます。距離を詰めますか」

「そうだな。これ以上距離を空けられると、現場で尾行する意味合いが薄れる。中山、車を出せ。それと名古屋、イラストレーターから転送されたルシフェルの振動波、あれもレーダーに組み込んで感度をあげておけよ。全く、M・Pを追いつながら、どうしてルシフェルの探知レーダーも稼働させておかなきゃいけないのか。天才の考えることは、凡人には理解できねえ」

夕方になり、孤門がコマンドルームに戻り、ナイトレイダーは完全に活動を再開した。孤門は、和倉と凧に向かって、
「24時間の休養、ありがとうございました。ただいまより、任務に復帰いたします」

と、言い、二人に一礼した。和倉は孤門に目をやり、
「顔色もいいな。万全じゃない奴は、容赦なく任務から外すぞ」

と、休養明けの孤門の気を引き締めるべく、あえて厳しい口調で話した。孤門もそれはわかっており、はい、と一言だけ答えた。そして自分に席に向かう孤門に、凧もいつも通りの落ち着いた口調で視線を合わせず事務的に声をかける。

「孤門隊員が復帰次第、イラストレーターから、今後の作戦の説明があるわ。すぐに作戦行動に入る可能性もあるから、そのつもりでいて」

必要事項だけを簡潔に言ったただけだが、厳しく指導を受けた孤門

にとっては、風に直接声をかけられると、未だに緊張する部分があるので、もう緩んだ気持など吹き飛んでしまった。そして、ナイトライダー全員が揃ったところで、測ったようにイラストレーターが現われた。本当に、基地全体に彼の目や耳があると言うのも、決して大げさな表現ではない。

「全員、揃いましたね。それでは、今後の作戦の詳細を伝えます。まず、先の戦闘で得られたデータです。ルシフェルが展開したダークフィールドG、これは物理的法則を無視した空間です。解析するのは非常に困難ですが、攻撃に必要なロックオンシステムは補正を済ませてあります。これで、攻撃面ではいくらか不利な要素は取り除けますが、リーダーによる探知はやはり厳しいものがあります。ここは、みなさんの技術による部分が大きなウエイトを占めます」

ダークフィールドGを張られると、やはり圧倒的な不利な状況になると言うのは変わらない。想像を絶するあの極限の環境での戦いを想像すると、どうしても暗い表情を浮かべずにはいられないと言うのが、全員の本音である。

「戦闘する空間が、通常空間なのか、メタフィールドなのか、ダークフィールドGなのか、これはほぼ同率の確率です。予測は敢えてするべきではありません。ですが、ルシフェルに関してはある特徴が浮かび上がってきました」

「特徴と言いますと」

「ルシフェルは、これまでの巨人と違い、あらゆる人間に憑依すると思われましたが、あるパターンを見つけました。パターンを見つければ網を狭めることもできます。ここまではいいですね、和倉隊長」

「はあ。大丈夫です、理解しています」

「つまり、狙われるターゲットを補足さえすれば、ルシフェルは追跡可能です。これは今レッドトルーパーが行っています」

ターゲットと聞き、孤門は一瞬耳を疑った。ルシフェルは憐を狙っている。イラストレーターはもしかして憐を餌にするつもりなのか。ハツとした孤門は、イラストレーターに抗議する様な目を向けたが、反対に黙っている、信用しろと言う無言のプレッシャーを与えられ、出かかった疑問の声を一旦腹の中にしまい込んだ。しかし、似たような疑問は和倉も感じたらしく、誰が今のデユナミストなのかを知らない彼は、疑問を素直に声に出す事が出来る。

「イラストレーター、それはもしかして一般人を囿にするという事ですか。それに、ルシフェルは明らかにウルトラマンに対して敵意いえ、殺意すら抱いているかのような戦い方をしています。そのターゲットと言うのは、もしかやデユナミストでは……」

「和倉隊長、ターゲットがデユナミストかどうか、それはあなたにとって必要な情報ですか」

いつになく強い口調のイラストレーターに、和倉ですら気押されてしまった。そして、意思のこもった目は、ナイトレイダー全員を圧倒する。事情を知る孤門ですら驚く物であった。

「確かに、餌と言えます。あなた達は納得しないでしょう。ですが、ルシフェルと言う存在は、ウルトラマンだけを狙うのでしょうか。到底思えません。ピースも闇の巨人も、明らかに人類を狙う天敵と言える存在です。それを倒すためには、非情にならざるを得ないそれが私とみなさんが置かれている立場です。ならば、自分達が為すべき行動がわかるはずですよ」

「……。大をとるために小を捨てる。そういうことですか」

皆が感じた事を、風が簡潔に言葉にした。誰かは知らない人間が、今ルシフェルに狙われている。それに付け込み、ルシフェルを補足し、殲滅しようと言うのだ。そして、匣がデナミストだった場合、ウルトラマンは抹殺されることになる。しかし、人を守るために戦うと言う思いがある孤門にとっては、それは一番受け入れざる考えであつた。

「副隊長。それは、作戦のために一般人を犠牲にしてもいいという考えですか。僕達の作戦のために、勝利のために関係ない人を巻き込む様な事は認められません」

「認める認めないは、あなたが決める事じゃない。あなたはまだ甘い所があるわね」

「副隊長つ。僕は副隊長の事を少しは理解できるようになったつもりでしたし、副隊長も僕の事をわずかに理解してくれていると思っていました。でも、それは間違いだったんですか」

孤門の剣幕はとても上官に対する態度ではなかったが、風はちらっと孤門に視線をやると、溜息をつきながら口を開いた。

「あなたにはまだ指導が足りないわね。こんな簡単な命題がわからないんで。小と言うのは情に動かされて生じる隙の事。あなたで言えれば甘さね。それじゃあ何が大になるか。それは冷静な判断、覚悟、使命感よ。あなたは以前レスキュー隊にいたんでしょ。情に任せて危険に飛び込んでいくような真似をしたの」

「いえ……。それは決してしてはならないことだと。情に動かされれば冷静な判断を失い、自分の命を失うと。自分が死ねば、救える命は救えなくなる。そう教えられました」

「私達も一緒よ。任務を成功させるには、個人的な感情を殺す必要がある。でなければ、仲間を巻き込み、守るべき者を守れず、倒すべき敵も倒せず、そして自分も死んでいく。それで、あなたは何かできるの。囷となる人間を救いたい、本気でそう思うなら甘い考えと情で動く軽はずみな行動はやめなさい。あなたの願望を実現させるには、この作戦を絶対に成功させなければならぬ。それが、大をとって小を捨てる、その言葉の本当の意味よ。個人的な感情は捨てなさい、本当に成し遂げたい事があるのなら」

核心を突く凧の言葉に、孤門はもはや言葉を失うしかなかった。まだまだ自分は甘いのだと痛感した。人間的な感情はどうしても捨てられない。だが、個人的な感情で動いても、救えるはずの者は救えない、周りの人間も危険にさらす。叩き込まれていたはずの基本的な事を忘れていた。誰かを救いたいなら、まず自分が生き残らなければならぬ。そして、守った自分の命で、本当に守りたいものを救う覚悟で挑まなければならない。そのために必要なのが、覚悟、責任、使命感なのだ。と改めて頭に刻み込んだ。

一方的に凧にやり込められ、徐々に落ち込んでいる孤門に、詩織が助け船を出す。

「孤門隊員、部署は違っけれど、私もあなたと同じ警察出身だから気持ちわかるわよ。人を救いたい、その思いがね。でも、思いだけじゃ誰も救えない。それを叶えるには、自分の命と仲間の助けがいる。そして、救えなかったものがあっても、それでも折れない心の強さがある。今度のミッションでも同じだと思うけど」

「……。わかりました。もう大丈夫です」

詩織のアドバイスに、ようやく孤門は表情を緩ませ、いつもの様子を取り戻した。

「頼むぜ、孤門隊員。俺はまだ死にたくないんだ。やりたいことが

山ほどある。シャキツとしろよ」

「はい、石掘隊員」

石掘のからかいにも似た激励を得て、孤門の気持ち치가立ち直ると同時に、ナイトレイダー全体の雰囲気もいつもの状態に戻った。それを見届けて、イラストレーターが、マイとレイダーに命令を下す。「これより、ナイトレイダーはチェスターで出動。レッドドルーパーの車両からは位置確認の信号が出ています。オプチカムフラージュを展開したまま、信号を目標に上空で待機してください。ルシフェルの出現と共に、こちらから作戦を伝えます。相手はハッキングも可能にする相手です。直前まで作戦を通信で伝えられません。口頭で伝えられるのもここまでです。非常に隠密性の高い任務になります。では、出動をお願いします」

「了解」

ナイトレイダーはいつもの様子で作戦行動に移っていく。それを見届けて、イラストレーターもCICに戻っていった。作戦は動き始めた。

だが、一つだけ孤門は理解できないことがあった。ルシフェルは憐を、デユナミストを狙うのなら、餌はデユナミストと関係あるはず。思い当たる人物は姫矢しかないが、彼の存在も名前も秘密にする情報ではない。もしかしたら、他にも知らないデユナミストがいるのだろうか。だが、姫矢以前にウルトラマンの記録はない……。

日も暮れ、辺りは暗くなっているがレッドトルーパーの追跡は続いている。もう30時間近く任務が続いている。運転手とモニター係以外は、疲れをいやすため床に横になって寝ている。固い床の上

に寝るのは決して快適ではないが、少しでも仮眠をとって疲れを癒さないとやってられないのである。運転手とモニター係の後退の時間になり、先に目を覚ました中山が小林の体を揺すって起こした。「隊長、起きて下さい、そろそろ交代の時間ですよ」

「もうそんな時間か。床の上で寝ても、あんまり疲れがとれるもんじゃねえな。むしろ、昔レンジャー隊の訓練で野宿した時の方が、よっぽど気持ちいい」

「首や肩、腰が痛くてたまらないですよ。布団で寝たいですね」

「まったくだ。塚本、標的はどうだ」

「追跡継続中。……、おつ、どうした、信号もない所で停車しやがった。ばれたか」

「こっちの姿を見られるのはまずい。嵯川、俺らも停車して、ライトを消せ」

命令に従い、嵯川は路肩にトラックを止め、直ちにライトを消した。状況を確認するため、中山は車を降りて赤外線つきの双眼鏡でM・Pの車両の要素を見守っている。

「隊長、向こうもライトを消して停車していますが、こっちを窺っている様子には見えませんね」

「油断するなよ、中山。向こうはこういうコソコソした事が得意な連中だ。つまり、こっちのコソコソやっている事に一番気がつける奴だからだな」

「はい。ですが、向こうもこっちと同じ行動をとっているんだよな

あ……。誰かを監視しているのか」

そのレッドトルーパーが尾行している車両には、昨日から真木一家を追跡している三沢と秋山が乗っている。真木一家は横浜まで出向き、買い物や方々を巡って観光などを楽しんでいた。その監視を二人は昨日から続け、彼らが宿泊したホテルではわざわざ隣の部屋を手配させてまで監視を続けるのだから、恐ろしい執念である。それでも、緊張感が続く任務は彼らの心身に疲労を与え、集中力が途切れそうになる。「三沢さん、さすがにきついすね」

「仕方ないだろ。交代の知らせもない以上、俺達はこの任務から離れられない」

「まる一日をとくに超えてますよ。なんか飲みますか」

「お茶にしてくれ。もうコーヒーを飲むのは胃がきつい」

秋山は三沢にウーロン茶を差し出し、自分はわずかな空き時間にコンビニで調達したおにぎりを頬張り始めた。食事する時間もないので、やむを得ない事である。食事をとっている秋山の隣で、三沢は運転席で右足をさすっている。先日、ビースト化したネズミに噛みつかれた傷がある足だ。傷口の範囲は小さかったが、わずかに肉をえぐられたため、未だに傷口が完全にふさがらず、うずいている。「三沢さん、運転代わりましょうか。まだ、傷口が痛むんですよ」

「飯を口に入れながら、喋る事かよ。だが、さすがにあの時は焦ったよ。もう一生ネズミは好きになれないな。ハムスターの姿を想像するだけでも鳥肌が立つ」

「まあ、僕たちもビーストを相手にしているんだって痛感しました

よ」

「しかも、直接被害を受けた俺はなおさらだよ。さてと、俺も飯を食うかな」

「その袋に入ってますよ。でも、標的がネズミ捕りにかかってくれてラッキーですよ。その間、僕たちは飯にありつける」

「秋山、ネズミって口にするな」

「……、はい」

秋山の言う通り、彼らの監視対象である真木家の車は、路肩に止められていた。スピード違反の取り締まり中の警察の網に引っかかったのだ。車を停止させられ、運転していた真木は車を降りて、警察の車に乗り込み、キップを切られていた。

「えーと、お名前は真木舜一さんね。せっかくのゴールド免許なのにねえ。どこかお急ぎでしたか」

「いえ、自宅へ家族と一緒に帰る所です」

「なら、安全運転を心掛けなきゃ。大切な顔ぶれを乗せているんですからね。何かあったら、その時じゃ遅いんですよ」

「おっしゃる通りです……」

真木としては不覚としか言いようがない。パイロットという職業柄、人一倍交通ルールには気を使っている真木であったが、家族サービスの疲れ、予定より帰宅が遅くなり明日にひびきそうだった事、そして交通量の少ない割に広い道路だったこともあり、思わずスピ

ードを出し過ぎると言う行為を犯してしまった。もちろんそのスピードで走り続けただけではなく、魔がさして思わず速度をあげたところに警察がいたというタイミングだった。後ろから警告灯をつけられた時には、やってしまったと言う思いだったが、妻にばれるとさすがにまずいと思い、そつと車を降りて、手続きを早く済ませようとしていた。

必要な事項に名前などを書き込み、テキパキと手続きを済ませていく真木を、二人の警官は感心して見たいた。

「みんなお宅の様に、素直に応じてくれると助かるんですよえ。みんな、必ずごねるんですよ。ちゃんと計測されていて、証拠があるにも関わらず。嘘だと言って居直るもいるんですよ」

「いえ、機械は嘘をつきませんから」

「模範的な態度だ、あなたは。ご職業は」

「……、民間の航空会社でパイロットを……」

「一番安全に気をつけなきゃいけない人じゃないですか。疲れた時は休んで運転しましょう。では、こちらの口座へ期日中に罰金を振り込んで下さいね」

「わかりました。それでは失礼します」

車から出された真木はそそくさと自分の車に向かった。決して安くはない罰金だ。妻に何を言われるかわからない。会社の空いた時間に振り込みを済ませよう、そう心に決めた。だが、免許更新や保険の更新の際にははつきりとわかるので、いずれは知られてしまう。時間をおいた方がいいのか、近い内に言った方がいいのか、真木は判断に悩みながら車に乗り込んだ。ありがたい事に、家族はみんな

眠っている。いつも以上に気を配って、彼は車のアクセルを踏み、車を走らせて行った。

その真木の姿を上空から見守る者がいた。ルシフェルである。また器終えていないため、思念体ではあるが、とうとう彼は真木を発見することに成功した。

「見つけたぞ、この星の最初のデユナミスト。光はお前から去ったが、間違いがあつては困る。見つかった事を悔みながら死ぬがいい」

ルシフェルは気味の悪い声をあげながら、その思念を降下させていき、真木を見送った警官の中に入り込んだ。その姿は瞬く間にルシフェルに姿に変わる。その姿を社内で見えた警官は驚愕の表情をすぐに恐怖に変え、車をバックさせて逃げようとする。ルシフェルは笑いながらその車を蹴飛ばした。ボンネットはV字にへこみ、衝撃で車は勢いよく後方にタイヤを軋ませながら走っていく。車両は、離れて止まっていた三沢達の乗る車に向かって行き、彼らがそれに気がついた時には寸前まで所領が迫っていて、激しい音と衝撃と共に激突した。衝撃が社内を貫き、二人の頭はシートに叩きつけられ、その反動で前に跳ね返った所に、作動したエアバックに顔が包み込まれた。痛みのため身動きできない二人の視界に入ったのは、空中に浮かびあがり、とどめの一撃を放とうとするルシフェルの姿だった。

二人は恐怖の絶叫を上げた。その瞬間、ルシフェルに向かってレッドトルーパーが攻撃を加えてきた。レーダーにルシフェルの反応が現われたため、小林の判断で発砲をしてきたのだ。邪魔が入ったものの、本来の狙いは彼らではないため、ルシフェルはその場をすぐに去っていった。

「本部へ。ルシフェルが出現しました。それと、怪我人が数名出ています。こちらの処理をお願いします」

本部に連絡を入れた小林は、頭上を何かが通りすぎるのを感じた。すぐに見上げたが、その姿はない。やがて、風がその後を追っているのを感じた。

「何だ、今のは……」

寄り道に邪魔が入ったが、ルシフェルはすぐに真木の車を捉えた。この位置なら邪魔も入らず、確実に仕留められる。口を歪ませ笑みを浮かべながらダークフェザーの発射態勢に入る。

「すべてのデユナミストは消える」

狙いを定め、真木に向かってダークフェザーは発射された瞬間、その射線上に何かが入り込み、真木への攻撃を防いだ。それは旋回をしながら、ルシフェルに追い付き、並行して飛行している。

その正体は、デユナミストに与えられる飛行物体・ストーンフリユーゲルだった。思いがけない邪魔に驚きの表情を隠せないルシフェルの視界に、機体の中から光と共にウルトラマンが現われる。ルシフェルと並んで飛行する姿を見て、仕掛けられたからくりのすくに気がついた。

「なるほど、そこに隠れて気配を消し、自分から狙いが逸れるのを待っていたか。誰に入れ知恵されたのかは知らないが、よく考えたな」

「ルシフェル、俺と勝負しろ」

「ほう、一日経つとこれほどまでに変わるのが人間と言うものか。面白い、相手をしてやろう。だが、威勢だけよくなっても実力の差は埋められない」

ルシフェルはウルトラマンに向かって体をぶつけてきた。高速で飛行する者同士がぶつかるわけだから、その衝撃は大きい。だが、ウ

ルトラマンは弾かれそうになるのをぐっとこらえると、逆に体を当て返していく。意地の張り合いは激しくなり、飛行しながらの格闘が続いていく。そして、もみ合いながら二人の体は加速して行き、空を駆けあがっていく。その姿を真木は目撃した。

車のフロントガラスの端から端までウルトラマンの銀色の光だけが横切っていくのが見える。一瞬の出来事だったが、真木は運転しながらそれをはっきりと確認した。普通であれば、それをUFOだと思っただろうが、真木が無意識の内に口にしたのは全く違う言葉だった。

「銀色の流星、か……。まさかな、流星は上から下に落ちるもんだ」

昔の仕事柄、飛行中の飛行機か何かだろうと思い、再び運転に神経を集中させる。バックミラーで後ろの座席を見ると、二人の子供が、助手席には妻の蓉子が寝息をたてて眠っている。自分の家族をしっかりと守るためにも、今やるべき事に集中しなくてはと、真木は自分に言い聞かせ運転を続けた。

ウルトラマンとルシフェルの戦いは激しさを増す。拳が顔を捉え、蹴りは腹部をえぐる。一進一退の攻防を続けながら、二人は雲の中に飛び込んでいく。視界は奪われたものの互いの位置は把握している。間合いを保ちながらやがて雲を突き抜けていく。どちらも同時に巨大化し、持てる力を最大限に発揮する状態になる。月の光に照らされ、銀色の体と漆黒の体が交錯する。しかし、やはりどこかに躊躇があるのか、ウルトラマンは次第に押され始める。動きが鈍り、防戦に回り始める。相手の体を弾き飛ばしたルシフェルは、打ち落とそうとするが、その腕に熱線が走る。上空から、孤門の乗るクロムチェスターδ機のクアドロプラスターがかすめたのだ。ギリギリまで姿を消していたため、ルシフェルはδ機に気がつく事が出来なかった。さらに、周りにα、β、γ機がその姿を現し、ルシフェルを牽制する。動きを止めたルシフェルめがけてウルトラマンが突撃していく。邪魔なチェスターを振り切り、ルシフェルはダークレイ

ジャビロームを発射する。しかし、その射線上にミサイルが撃ち込まれ、それが弾幕となってウルトラマンを守り、爆風と炎が上がってルシフェルの目を惑わす。そして、炎の壁を突き破り、ジュネツスブルーに変身したウルトラマンがルシフェルに強烈なパンチを繰り出し、数百メートルにわたって吹き飛ばす。そして流れる様な動きでメタフィールドを発生させ、戦闘フィールドに相手を引きずりこむ。ナイトレIDERもその後を追うべく、合体を行い、メタフィールドに突入していく。

メタフィールド内では早くも二人の戦いが始まっている。先程までの防戦一方とは明らかに違い、ウルトラマンにはいつもの無鉄砲な戦闘スタイルが戻っている。一体何が躊躇を捨てさせたのだろうと、孤門は戦いを見つめながら疑問に表いる所に、イラストレターから通信が入る。

「ナイトレIDERへ。ルシフェルが亜空間に入る、このタイミングしか奴を仕留めるチャンスはありません。前回の戦闘でルシフェルは、ウルトラマンに零距离から光線を発射されると言う危機的状況にも関わらず、器となった人間を切り離さなかった。そして、亜空間の崩壊と共にようやく逃走した。これは、ルシフェルは亜空間では自在性を失うと言う事を示しています。矛盾に満ちている存在だからこそ、通常世界では制約を受けないにも関わらず、亜空間では肉体を切り離せない。それが前回の戦いから得た結論です」

「では器となった人間はどうなりますか」

「矛盾の存在ですから、ルシフェルとは別のものになります。ルシフェルを倒せば、リンクはきれえます。命も助かるでしょうが、ここから先は確率の問題です。ウルトラマンの意識次第です。みなさんは、ウルトラマンの援護を。彼がいなければ、作戦の成功はありません」

「了解」

チエスターは援護をすべく、二人の巨人のまわりを旋回し、いつでも援護射撃ができる状況を作っている。その気配を感じながら、ウルトラマンは戦いの中で、昨夜イラストレーターとな話あった事を思い返していた。

「何だって、優。囧を使うって、一体誰を」

「ルシフェルの事を知らない第三者だよ。憐とも無関係な存在とは言えないけれど」

「ちよつと待つてよ。ルシフェルが狙っているのは俺だ。俺と関係のない人を巻き込みたくないから、優に相談しているんだ」

憐にとつては、自分以上に自分以外の人間が巻き込まれるのが耐えられないのである。それが、自分の知らない第三者であつても、自分のことで危険にさらすと言う事は到底できる相談ではない。激しく拒絶する憐に、イラストレーターは落ち着きを払いながら、諭すように話しかける。

「憐、それじゃあ聞くけど、君に何か策はあるの。手を打てないまま、ルシフェルに脅えながら戦つて勝機はあるの。そんな状態で君が守りたい人達を守るの。その可能性はゼロだ。じゃあ、勝利という前提を現実にする確率をあげるにはどうすればいいか。それには、まずルシフェルの優位な条件を切り崩すしかない」

「あいつの優位な条件ってどういう事」

「彼は神出鬼没であること。そして、憐の身の周りにいる人に憑依

して、戦意を削ぐ事が出来ること。これらを削除するには、方法はただ一つ」

「……。俺が、姿を消せばいい、てこと」

「そう。これを見て欲しい。君の前のデュナミストが使用したものだ。光を手にした君なら知っていると思うけど」

イラストレーターは、パソコンの画面を憐に向け、そこに映っている物を見えるようにした。それはストーンフリーゲルのデータだった。ウルトラマンとの接触が始まった頃、姫矢准をマークした際に彼が使った道具として、数少ない資料として保存されていた。そして、憐は光を与えられた際にエボルトラスターやブラストショットと共に、ストーンフリーゲルの存在と使用方法がいつの間にか記憶されていた。

「これは知ってるよ。どうせ、俺には必要がない代物だから、使ったことはないけど」

「……。だと思っていたよ。でも、これが今は役に立つ。すぐに、これを使って身を隠すんだ。この中なら、ウルトラマンの振動波も遮断される。つまり、この世界から一時的に姿を消すことができる」

「そうか。そうすれば、ルシフェルは俺のそばにいる人間に憑依することはできない。俺の事も見つけれない。でも、ルシフェルは一体誰を狙うんだ。あいつが狙っているのはデュナミストだ」

「餌はある。でも、それを言えば君は私情で動けなくなる。君の敗北が意味するのは、君の助けたい命を見殺しにする事じゃないかな」

「あっさり核心を突くのが優しいな。でも、俺が奴にとどめを差

そうしたら、あいつは逃げたりしないか。それが心配だ」

「前の戦闘で、君は至近距離から光線を放ったけど、あいつは逃げようとしなかった。いや、できなかったんだ。亜空間では、あいつの神出鬼没は失われる。矛盾する存在ゆえに、ビーストや巨人の法則から外れてしまうんだ。奴の心臓の様なコアゲージを狙うんだ。実体化した奴を倒すにはそれしかない。こっちでも、君の援護は全力で行う事になっている」

「わかった。優を信じる。……、ありがとうな」

「礼はいいよ。出来れば、勝利の報せが欲しい」

「わかってるって。じゃあな」

イラストレーターの言葉を信じて、ウルトラマンは全力で戦う。この空間なら奴は逃げられない。そして、奴を倒す事が出来れば、器にされた不幸な人を助ける事ができる。そのためには躊躇する自分の心を自制し、厳しい姿勢で挑まなければいけない。有利に戦いを進めるには、どんな手を使ってでも相手の思い通りにさせてはいけない。それを狙い、ルシフェルをあえて挑発する言葉を投げつける。

「やっぱり思った通りだ」

「何がだ」

「俺のテリトリーなら、ここなら互角に戦える。そう思ったけど、本当だったよ」

「私と互角とは笑わせる奴だ。いいだろう、お前の世界で戦い、打ちのめしてやる。希望も誇りも打ち砕かれて死ぬがいい」

ルシフェルはウルトラマンの余裕を崩そうと、手加減無用で襲いかかる。そのスピードは目でとらえることができず、パワーはウルトラマンの体を破壊するかの如く、怒涛の勢いである。メタフィードと言うウルトラマンの領域であっても、その不利は一切感じさせない。

しかし、ウルトラマンは一人ではない。ナイトレイドもルシフェルを牽制し、ビームを浴びせることで気を逸らして、ウルトラマンを援護する。刻々と変わる状況に応じ和倉が適切な指示を飛ばす。尻の操縦がチェスターを自在に操り敵に的を絞らせない。石堀のシステムサポートによりロックオンシステムの精密度が上昇する。激しく動く機体からであっても詩織の正確な射撃がルシフェルの動きを妨害する。そして、ウルトラマンとともに救うべき命を守る孤門の思いのこもったクアドロブラスターが一閃し、ルシフェルの背中を捉えた。器にされている人間の事も考えて、威力は7割まで抑えられた攻撃であるが、防御させる間も与えない連携プレーに、ルシフェルは完全に押されてしまった。

「うるさい虫けらめ。落ちろっ」

チェスターを撃ち落とすべく狙いを定めるルシフェルであった、今度はウルトラマンが隙をついてきた。ジュネッスブルーの青い輝きの線を引きながら、見事なハイキックがルシフェルの即頭部を捉える。足元をぐらつかせたルシフェルに対し、蹴り足を空中で静止させると、その脚を引き戻して相手の首にフックさせ、相手の体を引き倒した。素早く起きあがったルシフェルだが、冷静さを掻き不用意にキックを出したが、その足をキャッチされると、ウルトラマンに捻りを加えられて、足元から回転が体にかかり、再び地面に倒れ伏した。

ルシフェルを圧倒したここを最大の好機と見たウルトラマンは、アローレイシュトロームの態勢に入る。それを察したルシフェルは起き上がりながら素早くダークフェザーを連射し、発射をさせないやむを得ず、空中に飛び上がり一瞬の隙について狙いを定め、必殺のアローレイシュトロームを発射した。凝縮されエネルギーが高速でルシフェルを襲う。

しかし、ルシフェルは光の弓を両腕で挟み込んで受け止めた。衝撃で後方に押されていくが、ルシフェルのパワーが打ち勝ち、光のエネルギーは消えてしまった。ルシフェルはにやりと笑みを浮かべながら、上空のウルトラマンを見つめている。完全に勝ち誇った表情だ。その表情に呼応するように、コアゲージが激しく点滅を始める。今の一撃でエネルギーをかなり消耗した証だ。

「いかん。ハイパーストライクバニツシャーだ。照準用意」

和倉の判断で、チェスターがルシフェルに向かって降下していく。回避運動を取りながら相手に的を絞らせず、こちらからは必殺の攻撃を与える高度なフォーメーションだが、彼らのチームワークはそれを可能にする。

「発射」

チェスターから、ハイパーストライクバニツシャーが発射された。ルシフェルは全く動かず、その場でバリアーを発生させ、正面から受け切った。熱源がバリアーを突き破ろうとするが、ルシフェルは片手で余裕を持ってバリアーを維持している。やはり、勝ったのはルシフェルのバリアーの方だった。ウルトラマンとナイトレイダーの切り札は完全に封じられた形になった。

「負けた……」

孤門は認めるしかなかった。完璧な作戦を滞りなく進め、そしてあと一歩まで追い詰めながら、ルシフェルはそれをすべて打ち砕い

た。守りたいもののために命懸けで戦った結果がこれでは……。彼の心の中には、いや、ナイトレイダー全員の心の中に絶望と敗北の思いが立ち込めていた。

だが、ウルトラマンはまだ勝負を諦めていなかった。腹の底から気合のこもった声をあげ、腕をX字に組んで防御の体勢を取りながら、ルシフェルに向かって降下していく。またいつもの、自分を守ろうとしない捨て身の攻撃だ。

「死ぬつもりか」

「勝算あつてのことじゃない、ただのやけくそよ」

孤門と風はウルトラマンの性格を誰よりも熟知しているため、回避行動を取らせるべくその後を追う。風はウルトラマンの軌道上を追跡し、孤門はミサイルを発射して警告を与えた。最悪、着弾させてでも止めるつもりだった。

ルシフェルはほくそ笑みながら、ダークレイシュトロームの態勢に入った。ウルトラマンもナイトレイダーもここで仕留めるつもりだ。

「ここまでだ、光」

ルシフェルの腕から、ダークレイシュトロームが発射された。孤門の放った警告のミサイルは、一発だけウルトラマンに当たったが、彼はそれでも前進をやめようとしなかった。

「憐、死んだら誰も救えないんだ。よせ……」

孤門はもう一度ミサイルを撃とうとしたが、無情にもモニターには残弾ゼロの表示が出ている。風もこれ以上の追跡はこちらも巻き込まれると判断し、ギリギリの所で飛行コースを変えた。そして次の瞬間、ルシフェルの熱線がウルトラマンを捉えた。その威力は、ウルトラマンの体を遥か上空まで突き上げていき、誰もがその敗北

を認めざるを得なかった。

しかし、ここからウルトラマンの脅威の力が発揮された。上空で踏ん張り、体勢を立て直すと、川の流れを遡って行くかのように、ルシフェルに向かって逆流していく。腕のX字は崩さず、一直線に空を切り裂いていく。

「一体何をするつもりだ」

「隊長、ウルトラマンの両腕に異常なほどの熱量が発生しています。ルシフェルの熱線によるものじゃありません」

石掘は、和倉にウルトラマンに起こっている異変を伝えた。あの熱線とは別の熱源が発生している……。だが、ウルトラマンにはもうエネルギーはないはず。説明不能の現象だが、凧が和倉に通信を入れてきた。

「隊長、青いウルトラマンは敵のエネルギーを自分の物に変換する技を以前に使っています。あの時の技では」

「だが、今度はエネルギー量が桁違いだ。いくらなんでも無謀だ。体がもつのか……」

もはや残弾のないチェスターであったが、奇跡的にジェネレーターに攻撃に使える残量があった。

「孤門、聞こえるか」

「はい、隊長」

「クアドラプラスターに僅かだがエネルギー残量がある。30%の出力しかない。撃てるのは一撃だけだ。ウルトラマンの覚悟を無駄にしないために、ルシフェルを牽制しろ。いいな、一発だけだ」

「了解」

「風、もう一度、ウルトラマンの軌道上に入ってこちらの姿を隠せ。オプチカムフラージュに回せるエネルギーがない以上、それしかない」

「了解。ウルトラマンが耐えられなかった場合は、こちらに直撃しますが……」

「その場合、強制分離だ。石掘、平木、心の準備をしておけ。それくらいの覚悟じゃなきゃ、あいつは倒せん」

「わかりました。了解」

「了解」

チエスターはウルトラマンと同じ軌道に入り、ほとんど距離を置かずに飛行する。話すかに残り視界からは、うろたえながら熱線を撃つルシフェルの姿が、孤門にははっきり見える。エネルギーを取り込みながら奔流を遡っていくウルトラマンの両腕には、すでに膨大な熱量が蓄積されている。そのエネルギーを背負った上での特攻を恐れ、ルシフェルは攻撃をやめて回避行動を取ろうとした。その行動を見抜いた孤門は、ルシフェルが飛ばうとした方向にブラスタ―を威嚇発砲する。威力は殆どはなかったが、わずかに動きに隙ができた。

「行け、憐……」

孤門の心の声を背に、ウルトラマンはチャンスを逃さず、ルシフェルに突っ込んでいった。

「クソったれが……」

ルシフェルは毒づきながら、真上に飛翔して攻撃を避けようとしたが、ウルトラマンは自ら大きく開脚し、飛び上がったルシフェルの体を足で挟み込んだ。両腕も挟まれ自由を失ったルシフェルは、何とか逃げようと抵抗するが、ジュネツスブルーの青い脚はどこまでも強く締め付ける。

エネルギーを両腕にため込んだエネルギーだが、あまりにもその量が膨大でコントロールしきれていない。あちこちで暴発しているが、貯め込んだエネルギーを逃すまいと渾身の力を振り絞り、闇のエネルギーを自身の光のエネルギーに変換していく。チェスターでも、ウルトラマンの力の変化が計測されている。

「なんて力だ。組成エネルギーがどんどん変換されて、ウルトラマンの物になっていく。だが、コントロールしきれるのか」

「コントロールしきれないと、爆発するんじゃないの」

「そういう事になるな」

石堀と詩織の会話がすべてを物語っている。ウルトラマンは自身の容量を超えるエネルギーを手になしうとしている。もし、それをコントロールしきれなければ、行き場を失ったエネルギーはルシフェルを捉えるどころか、ウルトラマンの肉体を崩壊させかねない。

「憐、勝算はあるのか」

「やはり、彼は無謀すぎる……」

孤門と風の心配飲んで見守る中、遂にすべてのエネルギーが光のものに返還された。だが、膨大なエネルギーをまだ持てあましており、危険な状況だ。ルシフェルは、その状態を見て安心したのか、ウルトラマンの様子を笑い飛ばす。

「フハハハ、起死回生の攻撃かと思ったが、墓穴を掘ったようだ。自分で制御できないエネルギーをどうやってコントロールするつもりだ」

「……。今、思いついた。こうするんだ」

「何っ」

ウルトラマンは両腕にエネルギーを分散し、腕をまわしながらエネルギーの流れを整えていく。そして完全に制圧したエネルギーを帯びた腕を十字に交差させ、莫大なエネルギーを自分の技として発射した。理屈ではない、本能でもない、頭のどこからか呼び覚まされた秘密の技、エボルレイシュトロームだ。

至近距離から体を拘束されて再び直撃を食らったルシフェルは、熱線の中でもがき苦しむが、ウルトラマンはホールドしたまま逃がそうとしない。やがて、ルシフェルの鼓動するコアゲージが破裂し始める。それを認めたウルトラマンは、メタフィールドを解除し始めていく。それと同時に残りのエネルギーをすべて吐き出し、ルシフェルとウルトラマンの姿は消えていった。

その光景を確認した和倉は、計器でルシフェルの反応がないかを確認した。ルシフェルの反応は、ぷつぷつりと途絶えている。

「やったか……。いや、奴は矛盾に満ちた存在だ。奴にとつての死は誕生の始まりでもあるのかもしれない。まだ終わっちゃいないだろうな……。全員、帰等するぞ。現状は、ルシフェルを撃退したものと判断する」

チェスターは姿を隠すため、雲海にまぎれながら基地へと帰還していった。

フォートレスフリーダム地下では、松永管理官とイラストレーターが、T-L-T-Jの最高責任者の一人である東郷に直々の報告を行っていた。二人揃ったの報告は異常である。

「イラストレーター！ルシフェルは死んだと思うかね」

「確認できない以上、確率はゼロにはなりません。警戒しておくことは悪いことではないかと。憑依された警察官は、記憶はまったくなく、憑依の痕跡もない。これ以上検査しても無駄でしょう。一般の病院に移送して構いません」

「うむ。今回の作戦は、相手の特性上極秘で行う必要性があったことは認めよう。だが、松永君。君の場合は別だ」

東郷の厳しい口調と目つきを松永はいつもの様な覚めた表情で見つめているが、口からは今にも反論の言葉ツが飛び出しそうな、不満気な態度がありありとしている。しかし、それをぐっとこらえ、東郷の叱責を甘んじて受けているのは、彼が自分の立場をわきまえているからである。

「君は、M・Pを使い、ファーストの監視を無断で行った。結果的にそれが、ルシフェル掃討の役に立ったわけだが、それは怪我の功名、つまり偶然だ。作戦に偶然を持ち込むことは許されないのは、背広組の君でもわかる事だろう」

「仰る通りですが、我々、いえ、特に制服組の皆さんには、ウルトラマンの力が必要だと思いますが。それは人類にとってもです」

「言わんとすることはわかる。だが、組織にはしてはならぬ事が存在する」

「それこそ、詭弁では」

松永は、穏やかな口調で礼儀をわきまながらも、自分の主張を決して曲げず、上官に対して食い下がっている。彼らしいやり方であり、精一杯の抵抗であった。だが、東郷はそんなことは予想の範疇と言わんばかりの顔つきで、松永を追い詰める。

「君の意見も真意も私はわかっていているつもりだ。だがな、ここは組織だ。勝手なことをするなと言っているのだ。ルールを犯せば、それなりのペナルティが来る」

「私を管理官から罷免するのですか」

「それは、我々にとって損害が大きすぎる。それだけは御勘弁をとお願ひし、翻意してもらった。ファーストの監視を解き給え。北米本部からの直接の通達だ」

「な、何故、北米本部からそのような……」

さすがの松永も、自身の表情を崩すしかなかった。いくら彼が頑張ったところで、本部が直接乗り出してくれば、強気に出ることはできない。あくまでここは支部に過ぎない。本部意見を拒絶すれば、排除されるより他にない。

「私も、おかしいと思うよ。君一人の出しゃばった極秘行動が、なぜ遠いアメリカの本部に察知され、こんなにも早く処置を通達されるのかがね。だが、はっきりしている事は、君の返事次第で、T-L-Jのあり方が変わってくる。だから、今、この場で返事を聞かせてもらいたい」

「……。わかりました。ファーストへの監視はただ今を持って解除します」

「わかった。松永君、君のような優秀な部下を持つことは幸福だと心の底から思っている。だが、その優秀な君であっても、組織にとって毒になるのなら、私は毒に侵された部分を切り捨てる覚悟がある事を忘れないことだ」

「肝に銘じます」

東郷は、厳しい視線を松永に向けながら、部屋を後にしていった。松永は、厳しい叱責を受けた後にも関わらず、ゆつくりと頭をあげながら、その顔は表情一つ変えてない。この自分自身を律し、頭を下げることもできれば、ドライな判断をすることもできるのが、中間管理職の間で有能さを発揮する彼の強みでもある。彼は、振り向きもせずにそこに残っているイラストレーターに話しかけた。

「私の醜態が滑稽ですか」

「僕の見渡す未来にはこの場面は織り込み済み。驚く事じゃないよ」

「人の不幸を予測する。嫌らしいですね」

珍しく皮肉な言葉を投げかける松永をイラストレーターは冷静に見つめている。彼にとっては、こんな松永の嫌味すらも予想済みなのもかもしれない。

「何故、北米本部がファーストを泳がせる理由を教えてあげようか」

「ほう、それは興味深い。お聞かせ願いますか」

「ルシフェルは、デユナミストのそばにいる人間に憑依する。でも、ファーストの家族には憑依しなかった。いや、できなかった。それを考えれば、答えがわかる」

「……。まさか、ポテンシャルバリアーがルシフェルを寄せ付けなかったとでも」

「その通り。人一体を覆うポテンシャルバリアーなら簡単に生成できる。だから、ファーストにもその家族にもルシフェルは手を出せなかった。ポテンシャルバリアーの恩恵を受けられる存在となると誰の庇護を受けたかわかるね。そして、そのバリアーを引き出したと言う事は、そこに来訪者との契約が存在すると言う事。彼らとの契約の上に、T・L・Tは成り立っている。何人たりとも、その契約を犯してはならない。北米本部が強制介入した理由はそこにある」

「北米本部、ですか。しかし、なぜあのファーストにそこまでの特権を与えるのか、理解しかねます。彼を調べれば、人類に必要な光の手がかりがわかるかもしれないと言うのに」

「そんなにわからない動機かな。今の僕なら、少しでもわかる気はするけれど……。あなたにも、わからない論理じゃないと思うよ。それじゃあ」

イラストレーターは意味深な言葉を残して、姿を消した。独りになった松永は、ふっとため息をつき時間を確認すると、携帯を取り出し、どこかに電話をかけようとした。だが、思い留まったのように指を止め、何とも言えないさびしげな表情を浮かべ、感情を押し殺すかのように息を吸い込んで携帯電話をしまい、部屋を後にした。「わからない論理じゃない、ですか。……、今はそれを理解してはいけないですよ、私はね」

次の日は、憐の連休の日だった。この日も瑞生は遊園地を訪れてい

た。今日は営業日のため、憐の部屋に行く前に、針巢に断りを入れていくつもりだった。こうした礼儀を重んじるところは、育ちのいい彼女に骨の髄まで染み着いている習慣と言える。

「針巢さん、おはようございます」

「おはよう、瑞生ちゃん。憐なら部屋にいるはずだ」

「私、まだ何も言っていないんですけど……」

「いいんだ、いいんだ。わかってることだから。それに、是非会いに行つてやつてくれ。具合が悪いせいか、相当参っているみたいだから、見舞いにきてくれたなら、嬉しいくらいだ」

「そんなに具合が悪いんですか」

「いや、何。年頃の少年が住んでいたところを飛び出して、自力で生活しようとしてるんだ。そんな時は、些細なことで落ち込むもんなんだ。あいつも一緒さ。そんな時は、暖かい言葉や気遣いが一番の良薬だ」

「そんなんですか……。わかりました、少し会つて様子を見てきます」

瑞生は針巢に会釈すると、憐の部屋に向かった。その後ろ姿を見送った針巢は、

「まったく。憐の奴は幸せ者だよ。あんないい子に気かけられてよ」

ト、ニヤニヤしながら仕事に取り掛かり始めた。すると、彼の近くにまた人の気配がして、近くまで寄つてきて声をかけ、針巢は驚

いてしまう。

「おはようございます、針巢さん」

「おお、今度は孤門君か。今日は憐の奴、えらい人気ぶりだ」

「……、あ、もしかして先客が……」

「君は大人だね。なかなか鋭い。瑞生ちゃんがさっき来たよ」

「やっぱり。最近憐の顔を見てないので、様子を見に来たんですが、必要ないかな」

「いやいや、会いに行つてやつてくれ。会いつ、最近はさみしさに耐えるのがしんどい時がある様なんだ」

針巢は、孤門に先日の一話を話した。子供のように泣きじゃくる憐を見て、何を思ったのかを。孤門は、ルシフェルが針巢に憑依した事に気がつき、憐がどんな思いで戦ったのかを初めて理解し、その心中を思いやった。だが、針巢の話は思わぬ方向にすすん見、孤門は驚きの表示を浮かべる。

「孤門君。君は、憐とは血のつながりはないんだろ」

「え、どうしてそう思うんですか……」

「伊達に歳はとっていない。憐を見れば、あいつの周囲に人間に対する接し方は、明らかに普通とは違う。関係を築くことに躍起になり、かといって相手から関係を深めようとすると、途端に殻にこもりだす。何で、人を求めるのに一方で拒絶するのか、その深い経緯はわからん。だがな、あいつは人との関係を、今時の若い奴に比べて、ことのほか敏感になる。だから思うんだ。調べたわけじゃな

い、ただの勘だが、憐には家族はいない。天涯孤独の身だ」

「天涯孤独……」

「あいつは文字通り、この世界に一人たりとも家族と言える人がいないのかもしれない。だから、他人に家族を見る。俺の事は親父、尾白は腐れ縁の幼馴染、君は頼れる兄貴、そして瑞生ちゃんには恋人であり、妻であり、母親を見ていると思うんだ。どうだい、孤門君」

孤門は針巢の指摘にを呑んだ。嘘がばれたからではない。プロメテの子と言う特異な出生は知っていたが、針巢の指摘は憐の隠れた過去を言い当てているのではないか、そう思えたからだ。裏付けがあるわけではない。だが、決してこの人物の言う事に誇張などある様には思えないし、真実がある程度含まれているようにしか思えなかった。何も言えない孤門の手をとり、針巢は真っすぐに目を向けて話しかける。

「孤門君。君は憐の實の兄貴でも従兄でなくてもいい。ただ、あいつは君をタメ口をきいたりして生意気な態度をとっているが、実際の所は心の底では頼りにしているんだ。だから頼む。これからもあいつの兄貴でいてやってくれ。これは憐の『親父』としての頼みだ」

「針巢さん、……、わかりました。これからは僕は、憐の兄です」

孤門は、針巢の大きく温かい手を握り返した。二人は互いに手を強く握り、憐に対してこれからも家族であろうと誓い合っている。

「それじゃあ、これから、世話の焼ける弟の顔でも見てきます」

「おう、頼むよ、兄さん」

孤門は、憐の部屋まで歩いて行き、角を曲がったところで、憐の部屋のドアを叩く瑞生の姿を見つけた。その必要はないのだが、孤門は物陰に隠れて、その様子を見守ることにした。

「憐、今日はちゃんというんでしょ。返事しないなら、またこっちから開けるわよ」

瑞生はドアに手をかけた瞬間、はっとした表情を浮かべた。昨日と違って、ドアに鍵がかかっていたからだ。その一瞬を狙っていたかのように、素早くドアの鍵を解き、ドアを開けて憐が元気よく顔をさした。

「おはよう、瑞生。嬉しいなあ、今日は部屋まで迎え来てくれたんだ」

「あなた、昨日どこに行ってたのよ。心配した……」

「え、俺のこと、心配してくれたの。何だか、嬉しいなあ。でも、心配させてごめん。だから、今日は何か奢るよ。さ、出かけよ出かけよ」

「ちょ、ちよつと憐。私は仕事で……」

「俺のそばにいれば、仕事になるだろ。気にしない、気にしない」

憐は、事態を呑みこめない瑞生を引っ張り、街へ出かけていった。その様子を見守っていた孤門は、呆れながらも笑いながら二人を見守っていた。

「ちゃっかり手まで握って。本当に世話の焼ける弟だ。……、よく頑張ったな、憐」

孤門はそう呟くと、憐とは反対方向の道に歩いていった。今日は

憐には会うべきではない。今日みたいな日だつて必要だ。彼は、ウルトラマンとして、誰にも感謝されることのない日々を送っているのだ。だから、つかの間の安息があつていい。そんな事を思いながら独り歩く孤門の背中、哀しみもさみしさも噛みしめながらそれらを乗り越えた、男らしい兄のものに他ならなかった。

運命は一つだけではない。様々な運命が未来に存在する。それを選ぶのは僕たちの意思だ。負けを認める、感情に流される者に、明日の運命は訪れない。希望を捨てなかった者にのみ、明日を生きる未来がやってくる。僕達の選んだ未来はどこに行くのだろう。そして、憐の歩む運命の先に何が待っているのだろうか。

日がどんどん短くなっていく。それが、秋が終わり、冬の到来を告げる。風も冷たくなり、三時を過ぎると立っているだけで底冷えがする。こうなると、遊園地も営業時間が短くなり、片付け作業も早めにくりあがっていく。

憐は、風にさらされて冷たくなる指を温めながらテーブルを拭いたり、床を掃いたりして、閉店に備えて作業をしている。今日はこっとさら風が強く、体感温度が低く、憐や尾白、針巢はネックウオーマーや荷と帽が欠かせない。それでも憐は、気温の寒暖差が激しいダラスの寄宿舎にいた事もあり、暑さや寒さに対しては耐性があり、人に比べると薄着で過ごす事ができる。

「憐、お前、よくそんな薄着で平気だな」

「そうかな。俺はこれでちょうどいいし、まだ10度以上あるんだぜ。尾白が寒がりなんだよ。野良ネコだって、シャンとして歩いているぞ」

「こんな木枯らしが吹く日はきついぜ。手足の指先がかじかんでくる。いやな季節だな」

「尾白は冬は嫌いな」

「寒いのがな。冬は炬燵が俺の親友だ」

「コタツかあ。体験してみたいな」

「日本人が世界に誇る偉大な発明だ。あれに入ると、トイレに行くのも面倒になる」

尾白は、偶然憐が所持していたパスポートを見て、憐がダラスから日本に来た事を知っていたが、のぞき見た事を内緒にしているため、憐が炬燵を知らない様な発言をした事については、あえて触れないでいた。憐が自ら言わない事なら、あえて触れる事もない、尾白はそう考えていた。

二人の会話を聞いていた針巢も、炬燵と言う話題に反応して話に加わってきた。

「炬燵は日本の冬の必需品だな。あれにお茶とみかんがあれば言う事はない」

「そうなのか。部屋に入れたいな」

「あのスタッフルームにか。炬燵布団も入れなきゃならないから、テーブルは片付けて絨毯ぐらいはしかない駄目だぞ」

「やるよ、やるやる。後は買うだけか」

「ホームセンターに行けば売っていると思うが、何なら俺のを譲ってやるよ。今年買い換える予定だからな」

「嘘、マジで。やった。サンキュー、ハリス」

「その代わり、お前の汚い部屋は掃除しておけよ」

炬燵談議と言ったわいもない冬なら出話の会話をしながら、三人は木枯らしの吹く中、作業を続けていた。そこに、誰かがやってきて、憐に声をかけた。

「憐、元気か」

声の主は孤門だった。特殊部隊と言う部署にいるため、まとまった休みが取れないため、半日だけの休暇が多くなり、今日は孤門が午後6時間だけの休養が割り振られていた。ルシフェルの件で顔を壊そうと思ったが元気そうな姿を確認しただけで、直接会うことはなかったため、久々の訪問であった。

「やあ、孤門。だけど、もう店はおしまいだよ」

「随分早い閉店だな」

「先週から、営業時間が不時間になったからさ」

「そうか、タイミングが悪かったなあ」

「じゃあさ、飯奢ってよ。それなら無駄足にならないだろ」

「お前な……。しょうがないな、夕飯は奢ってやるよ」

「やった。言ってみるもんだな。よし、じゃあ瑞生にも伝えてこよう。食事に誘うなんて、何かカッコいいぞ」

「二人分、奢るなんてい言ってないぞ。しかも、人の金で女の子を食事に誘って、カッコいいわけないだろ」

憐はちゃっかりした作戦が成功して喜び、孤門は苦笑いしながら呆れている。店の片付けが始まったため、他の場所のベンチにいないはずなので、憐はそこに向かおうとした時、悲鳴が辺りに響き渡った。

「きゃあああ」

憐はその声を聞いた瞬間、手に竹ぼうきを持ったまま、猛然と走

りだした。声の主が瑞生だと気がついたからだ。孤門もそれに気がつき、憐の後を追い始めた。

声がした方に辿り着いた憐が見た者は驚くべきものだった。通常の3倍はあるのかという大型のカラスが、倒れ込んでいる瑞生に襲いかかり、口ばしを振りおろしたり、手に噛みついたりしていた。あり得ないカラスの大きさに一瞬度肝を抜かれた憐であつたがすぐに我に帰り、瑞生を助けるために手にしていた竹ぼうきを振りかざし、猛然とカラスに飛びかかつていった。

「この野郎っ。何してんだ、あっち行けよ」

憐に邪魔され、カラスはいったん瑞生から離れるが、今度は憐に向かつて襲いかかつてくる。逃げることをせず、寧ろ報復行動をとってくる、ものすごい凶暴性だ。憐は瑞生を守る様に彼女の前に立つてカラスの相手をしているが、カラスの大きさや凶暴な性格から繰り出される攻撃に、タジタジとなっていた。何しろ、放棄に噛みつき、それを手から奪おうとするのだ。何とか振り払おうとするが、うまい具合に放棄をつまみ上げられ、武器を取られてしまった。

憐はブラストショットを抜こうとしたが、寧猛な相手に躊躇が生まれ、一瞬だけ反応が遅れた。目と言う急所を狙って飛びかかってきたカラスに、思わず憐は目をつむった。

痛みを覚悟した憐だったが、襲いかかるカラスをパルズブレイカーで撃ち抜いた。急所は外れたが翼を撃ち抜かれ、飛行が安定しなくなる。形勢が変わり、カラスはその場から逃げだそうとしたが、手負いの翼で逃げるのはやはり無理がある。機動力を失いながら飛ぶカラスを孤門は追いかけていった。次第に高度がなくなり、スピードが落ちるカラスに向かい、孤門は狙いを定め、もう一度パルズブレイガーを発射したが、今度は麻酔弾だった。カラスの大きさや凶暴性に何か妙な気がしたからだ。そのため、生きたままサンプルを取った方がいいと言う彼の判断だった。

麻酔弾が命中し、意識を失ったカラスが雑木林に落ちていった。

閉園間際だった事もあり、一連の騒ぎは気付かれていないのが幸いだ。孤門は落下したカラスを確認したが、やはりその大きさは尋常ではないし、目の周りが真っ赤で、口ばしも輝きや硬度が全く違う様に見える。孤門は上着を脱ぎ、カラスを包み込むと、一旦憐達と合流した。

瑞生はカラスに疲れたり噛みつかれたため、腕から出血をしていた。それを見た憐は、一層取り乱し始めるが、孤門は敢えて厳しい口調で、

「憐、表へいって空気でも吸って来るんだ。あわてていたって、どうにかなる事じゃない。手当は俺に任せておけ」

と、ぴしゃりと言った。不思議と孤門の言う言葉に素直に従った憐は、首をうなだれて外にとぼとぼとした足取りで歩いていった。レスキュー隊出身の孤門にとっては、この手どの傷の手当ては簡単なものであった。慣れた手つきで傷口を洗い、消毒をして軟こうを塗り、手際良く包帯を巻いて手当てを完了した。

「とりあえず、これで応急処置は終わったけど、ＴＬＴで精密検査をして、治療を受けた方がいい」

「もしかして、あのカラスは……」

「わからない。サンプルとして回収はしてある。それと、憐には余計なことは今は言わない方がいい」

「確かに、ビーストの騒ぎにあまり巻き込むのはよくないわ。ただでさえ、憐はニアミスしているから、危なっかしくて……」

孤門と瑞生の意図は、微妙にずれている。孤門は、相手がビーストだと知ると前のめりな戦いで自分自身を危険に晒す上、瑞生を襲ったとなると逆上して冷静さを失いかねないのを危惧している。

瑞生の場合、憐がデュナミスト、つまりウルトラマンであることを知らない。ラファエルと言う謎の言葉や、T.L.Tの監視を受ける何らかの事情があるのは自覚しているが、あくまで「普通の民間人」と言う意識だ。だから、ビーストの事件に深入りさせたくないという判断のため、同じ目的であっても孤門とは根本の所で違う。孤門はそれを認識しているため、浮かない表情はしているが、ここは瑞生に話を合わせる。

「まあ、あの性格だと何をしでかさかわからない。黙っておこう」

「わかった。そうする」

傷の当てが終わると今度は、憐と話すために孤門は外に出ていった。

「憐、彼女の当て、終わったぞ」

「大丈夫なの、孤門。あのクラス、ビーストだろ」

「ああ、多分な。傷は浅いから、改めて治療や抗生剤とか打ったりしたら、それで済むよ」

「よかった……。さっきはごめん、孤門。なんか取り乱しちゃって」

「自分を見失うと、誰も守れないぞ。経験者としての言葉だけだな。それに、お前は命をかけて戦っているんだ。一歩間違えれば死んでしまう。それだけはして欲しくない」

「わかったよ、孤門……」

「じゃあ、俺は帰るよ。奢りは次の機会にしよう」

孤門はそう言い残し、上着をとって憐と別れた。そして、その視界から消えると、通信機を起動し、基地へ連絡を始めた。

「こちら、孤門。応答願います」

「こちら、西條。どうしたの、孤門隊員」

「副隊長、妙な生物を発見し、捕獲したのですが、ビーストの可能性があります」

「それは本当なの」

「はい、十中八九、間違いはないです」

「そう……。少しでも可能性があるなら、芽を摘んでおくことに越したことはないわ。WSをまわすから、合流してサンプルを渡して」

「了解。……、何だ、あれは……」

「どうしたの、孤門隊員」

「街の空いっぱいにかラスが……」

夕方になれば、巢に帰るカラスが大挙して飛ぶのはよくある光景である。だが、孤門が目撃したのは、広大な街一杯の上空を飛びまわり、広がっていく大型のカラスの大群だった。

孤門の持ちこんだカラスは、またとない生きたビーストのサンプルとして、直ちに解析作業に入った。コマンドルームにも、分析の結果が即座に転送されてくるいつもとは変わった状況に、ナイトレイダーも目を皿に様にしてモニターに食い入っている。その専門的

なデータを、石掘が噛み砕くようにして隊員達に解説する。

「こいつはれっきとしたビーストですね。凶暴性と体がでかい以外に、見た目は普通のカラスと変わりはない。ただ、パルスブレイガの麻酔から一時間で覚醒した。そうだよな、孤門隊員」

「はい。WSに引き渡した際に麻酔から覚め、止むを得ず冷却弾で黙らせました」

「いい判断だった。ビーストらしく、こいつも攻撃を受ける度に体質を変化させて、麻酔に対しても耐性を得たようだ。30分も保たなくなったらしい」

「石掘、他に何か判明していることはあるのか」

「隊長、厄介なことがあります。こいつの体は殆どカラスと変わらないと言う事は、今話しました。ただ、一つに器官にビースト因子が集中しています」

「一つの器官にだと。一体何だ」

「生殖器です。サンプルは雄なので、精巣にビースト因子が集中しています」

ナイトレイダー全員、顔色が変わった。これまでのビーストは同種のビーストは何体かいたが、その異様な生体のあまり、性別と言うものを失念していたからだ。もし、ビーストに生殖器があるのなら、爆発的な繁殖の可能性もあり得るのだ。

「ちよつと待て、石掘。それはまさか、ビーストも生殖器を使い、繁殖すると言う事か」

「我々は今まで生きたサンプルを得られませんでした。せいぜい肉片です。殲滅が前提の存在ですから仕方ありませんが、その肉片からは性差は見られなかった。未知の生物という前提がそれで出来てしまったため、ビーストは不思議なステップで数を増やしていると仮説を立てるしかなかったんです。でも、このサンプルによると、奴らには性差があった、いや、生存のために性別を獲得したのかもしれない」

「でも、ビースト同士の交尾による生殖なら、増加や変異は緩慢なものじゃないの」

「副隊長、そこが厄介なことなんです。このビーストはビースト因子を精巢に集中させているんですが、染色体の数がカラスとほぼ一緒のため、普通のカラスとの生殖が可能なんです。つまり、このビーストはカラスと言う地球の生態系にビースト因子を散弾の様にばら撒く存在なんです」

「そのビーストとカラスの間に生まれた個体も、ビーストになると言う事なの」

「因子を持つと言う点ではビーストでしょうね。ただ、生物感の雑種はどういう結果を招くかわかりません。馬とロバの掛け合わせで出来るラバやケツティには生殖能力に問題が生じます。これは、染色体の数の違いによるためです。ライオンとトラの掛け合わせでできるライガーなる個体もありますが、これは生殖能力がある場合があります。結局、かけあわせてみないと、何が発現し欠損するかはわかりませんが、どちらにしろビーストの場合は確実に因子を残してしまいます。これがきっかけで、様々な生物がビースト因子で無差別に汚染される可能性が生まれたと言って過言じゃないでしょう」

全員に悪寒が走った。生態系単位でビーストが爆発的に増加する。これまでは巨大なものにしろ、小型のものにしろ、単体での発生であり、その活動や出現範囲は限られたものだった。しかし、生態系そのものがビーストに汚染されるとなると、地球の生物すべてが短期間でビースト化し、人類との勢力を逆転しかねないのだ。そして、同じ地球の生物である人類にすらビースト因子が侵食してくる可能性すらも。ビーストに変えられるのではなく、ビーストとして生まれる人間が誕生すると言う事が起こりかねない状況となっているのだ。

まさに恐怖の地獄絵図が皆の頭に思い浮かんだ。ビーストに埋め尽くされる地球と言う姿に……。

「そんなことになったら、人間に勝ち目なんてないじゃない……」

詩織の言葉は皆の言葉を代弁していた。地球の生命すべてが敵になるだけでなく、人間と言う種にすら揺さぶりをかけると言うおぞましい未来。ビーストに対して最も戦意を奮い立てる風ですら、今は言うべき言葉が見当たらず、視線を落としていた。

訊かなければよかった、誰しもがそう考え沈黙が支配しているコマンドルームに、松永管理官が入ってきた。彼もまた眉間にしわを寄せ、いつもの無表情とも言える冷静さが欠けていた。さらに、イラストレーターも姿を現した。彼らが姿を現す予定はまだ知らされてはいない。つまり、それは緊急性が高い事態が起こっているという証明である。

「皆さんにも分析結果がまわってきていますね。これまでにない危険な状況に入りかけています。情報を整理した結果、報道されてはいませんがカラスに襲われると言う事件が警察や役所で急激に増えています。人を襲うという本能に加えて、生態系を汚染すると言うハイレベルのバイオハザードが発生したと言えます。特に人口密集地における直接的な被害が増加しています。この事態をここで食い止めなければいけません」

松永の口調は、事務的なものではなく、彼自身がもつ個人的ない資質と信条がいつになく現われていた。彼は、多くの人間に非情と思われている。だが、その非情な言葉に存在する、松永と言う一人の人間としての意思は誰も気がついていない。人としての情を殺してまで、何としても為さねばならぬ事、守らねばならぬ事、それが彼の行動理念を形成し、その職務にまい進し、彼自身の心を支えているのだ。彼にとって、人類こそが大義名分であり、それを守るためならば己の心などいくらでも麻痺させることができる。

「敵は、すでに繁殖を開始しています。今の段階で食い止めなければ、爆発的な増殖を引き起こすでしょう。そのため、ナイトレイダーにも、非常事態体制でこれより行動していただきます。今後の対応については、イラストレーターに引き継ぎます」

松永は、一步後ろに下がり、その場をイラストレーターに譲る。

その意を受けて、イラストレーターが今後の行動を伝え始めた。

「サンプルにより、敵の生態はある程度把握できました。コードネーム・クロウシムは、今の所は通常のクラスと同じ生態です。そのため、暗い場所では視力を奪われる鳥目です。つまり、行動はできないため、夜間の間は集団で固まっているはずです。夜間の間は、ナイトレイダーがチェスター各機で、彼らが巣としている所を調査して下さい。集団でいれば、ビースト振動波があるはずです」

「それは、奴らが営巣していると言う前提ですよね」

「和倉隊長、残念ながら、あなたの言う通り、営巣しているというのは仮説の段階です。ですが、ビーストは分散と集合を繰り返すと言う法則に近い行動があります。現段階が分散なら、集合が必ずやってくるはずです。ですが、それを待って何もしないわけにはいきません。出来る限り、敵の先手を打つ。それも戦略です」

「わかりました。では、日中の対応は」

「みなさんは日中は待機して下さい。いざという時の実戦部隊です、疲弊している時間は短くしてもらいます。昼の間はレッドトルーパーです。その間はクロウシムは街中に出できます。ビースト振動波も微弱ですがパターンがわかりました。増殖が本格化する前に一話でも多く殲滅します。光学迷彩を熱感知不能に改良した熱光学迷彩が完成したため、これを使用して、敵に気付かれずに市街地で活動できます。他に何か質問がありますか」

和倉は、作戦内容に納得したようだったが、孤門が何かに気がついたのか、イラストレーターにぶつけた。

「すみません。今、ビーストは集合と分散を繰り返していると仰いましたよね」

「はい、それが何か」

「以前、ルシフェルがハッキングした際に、ビーストは同一の起源を持つと言う話を聞きました。それは、ビーストは元々一つの存在であるということですか」

「……」

「集まっては離れ、集まっては離れ、彼らは変化を繰り返しながらも一つに戻ろうとしているなら、それは一体どんな存在ですか。ビーストの起源とは一体何でしょうか」

イラストレーターは、目を見張った。それは、孤門の質問が核心をえぐってくるものであると同時に、触れてはならない部分に無意

識に踏み込んできた怒りとも驚きとも着かない感情を物語っていた。松永も、無表情は取り繕ってはいるものの、服の下には脂汗が浮かび、唾をぐくりと飲み込んだ喉がわずかに動くことまでは隠せなかった。ナイトレイダーも、そう言えばと言う顔で興味を持った顔をしている。イラストレーターは、心の動きを悟られぬよう、いつもの調子で声を発したが、気付かれぬほどではあるが、若干声に動揺が含まれていた。

「孤門隊員、その質問には憶測でしか答えられません。憶測で先入観を持つと、目が曇り、見るべきもの、目指すべき目的地を見失います。その質問には確証が得られた時、知るべき時が来たとき、そしてその情報があなたに、あなたたち全員に必要となった時、必ずお話ししましょう。真実を知りたいのであれば、その時が来るまで死ぬことはできませんよ。決してね。今は、目の前の敵を倒し、作戦を成功させることが、あなたの現在、そして未来へ続く唯一の道です」

孤門はその言葉に何も反論はできなかった。確かに、いま必要なのは、生態系規模のバイオハザードを食い止めること。その使命の前には、自分の疑問などちっぽけなものにすぎないし、今で解決しなければいけない問題ではない。納得した彼は、そこで引き下がった。

「では、搜索をお願いします。こちらでも、突破口を探り続けます」

イラストレーターはそこまで言うと言った。松永も、

「人口密集地への本格的な侵入です。命懸けで人命を守ってください」

と言に残し、コマンドルームを後にした。残されたナイトレイダーはこれから作戦が始まると言うのに、気持ちが入っていないようだった。敵は巨大なのだが、こちらは打つ手がなく、素手で象に立ち

向かう様なものだ。戦意を損失しかけても無理はない。

「命懸けで人命を守れたって、あたしたちの命が無事じゃなきゃ、何にも出来ないんだつつうの」

「平木隊員、それは言いっこなし。口にしなくても、当然の前提条件よ」

「でも、副隊長。前から思うんですけど、管理官の言い方って、いちいち癪に障るって言うか、むかつくって言うか。同じ言い方でも、もう少しましな言い方ってもんが……」

「部下に媚を売ったり、好かれようと思う上司なんて、ろくなものじゃないわよ。そうですよね、隊長」

「まあ、そうだな。口で部下を動かしながら、自分もその役職で汗を流し、するべきことをやる。それが上に立つ人間の姿だろうな。好かれる奴より、尊敬される上司って言うのが理想だな。その意味じゃ、管理官は癪に障るが、認められる人だ」

和倉が言い終わると、全員が彼の顔を目を見開いてじっと見ていた。松永の事を『癪に障る』と口にしたらからだ。和倉もそれに気がつき、微妙な空気の中彼らは見つめ合っていた。そして、孤門が、
「僕は何も聞いていません……」

と言うと、和倉以外の三人は無言で頷いた。

松永は廊下を歩いてしたが、ポケットからハンカチを取り出し、額の汗をぬぐっていた。暑いからではなく、早く歩いたためでもない。孤門の質問による焦りからだ。まさか、あそこまで踏み込んでくるとは……。

「孤門隊員、彼はやはりユニークな人物だね」

松永は、びくつとして振り返った。いつもの彼にはない事であったが、声の主がイラストレーターだと気がつき、すぐに冷静さを取り戻した。

「ユニーク、ですか。私にはとてもそんな言葉では片付けられませんか。彼のような若者が何を為すのか見てみたいと思って放任していましたが、少々行き過ぎかもしれませんね。彼は火遊びを始めかねない」

「彼の放つ火は何を照らし、その後に残るのか。僕は観察してみたいね」

「あなたも少し変わりましたね。賭けや未知のものを楽しみだしている」

「僕は観察者。興味のある事はじっくりと見守る。未来の観測に必要な事となる。決して、賭けなんてあやふやな可能性に興じることはしない。未来は観測の末に一つに集約される、それが僕の視点だから」

「よくわからない理屈ですが。しかし、彼の発言は核心に近づいている。……、忘却の海が満潮を迎えようとしているためでしょうか」

「恐らくね。でも、孤門隊員は、何の情報を与えられることなく『ウルトラマン』と言う呼称を口にした。不思議だね。だから、ユニークなんだ。もっとも、あの時からもう限界を超えつつあったのかも……」

「時は近いようですね」

二人は、無言のまま頷き合った。彼らの言う「時」が、ゆっくりと、そして確実に近づいていた……。

夜間一杯、ナイトレイダーの調査は続いた。しかし、ビーストはやはり拡散して潜んでいるのか、ビースト振動波を捉えることはできなかった。結局、夜明け間近になりナイトレイダーは帰還することとなり、変わってレッドトルーパーの出撃となった。彼らはビルが並ぶ大通りに車を止めると、各自大きなクーラーボックスを肩に掛けながらビルに入っていった。その姿は、ビルの清掃業者に見える。

小林は、非常階段に侵入し、最上階に上っていった。そして、屋上に出るドアの前で上着を脱いでレッドトルーパーの制服になる。そして、クーラーボックスに入っていたデイバイトランチャーを取り出し、部品を組み立て直してデイバイトシューターに変え、ドアの鍵を万能鍵で開けた。熱光学迷彩のスイッチを入れ、姿を消すと外に出る。上空には、多数のカラスが飛んでいるが、これだけの数になると見分けをつけるのが大ききだけでは難儀である。

「中山、塚本、嵯川、配置についたか」

小林の確認に善意がほぼ同時に、完了したと応えてきた。これ以後は作戦行動に移る事になる。小林は、車両内のモニターに向かっている名古屋に指示を出す。

「名古屋、全員のヘルメットのバイザーのターゲット捕捉機能に、ビースト振動波をリンクさせ、クロウシムだけをロックオンできる様にしろ」

「了解。データ量が多くなるので少し待ってください」

名古屋が、T-LTよりもたらされたクロウシムのビースト振動波を各自のヘルメットに送り、彼らのヘルメットには、上空を飛ぶたら巢の中でビーストの個体だけにマーキングが施された。これなら通常のカラスの中に紛れ込むクロウシムを確実に仕留めることができる。

「よし、転送されたぞ。これから、殲滅に入る。群れが移動したら、その都度移動をする。では、各々行動を開始しろ。民間人に気取られるなよ」

小林は、部下達に命令を出すと自分も行動を開始した。上空のカラスを見つめ、ヘルメットの自動照準が働き、至る所にターゲットのマークが重なるが、クロウシムだけは違う色で表示される。ビーストだけに狙いを絞り、小林は引き金を引いた。サブマシンガンモードで発射された光弾は、クロウシムに完璧に命中し、その体を完全に粒子化し消滅させた。

「よし、まずは一羽だ。しかし、ビースト退治は大丈夫だが、有害動物の駆除みたいな形になると、今一つ気が進まないな……」

小林は愚痴をこぼしていたが、ビーストだって有害動物じゃないかと気づき、ひたすら撃ちまくった。補充の心配はない。クーラーボックスの中には補充用のパックがたっぷり入っている。熱光學迷彩の電源ももちろん運び込んでいる。日が暮れるまで仕事を続ける態勢になっていた。しかし、一時間後には、変わり映えのしない流れ作業になり、それに耐えることが第一となる精神的な消耗戦に突入し、レッドトルーパーは、神経をすり減らしていった。

「クソ、移動くらいしやがれ。まさか、俺達の状態が崩れていくのを待っているわけじゃないだろうな……」

憐は、一日中落ち着く事が出来なかった。瑞生の事に関しては、

彼女の元氣そうな顔を見たおかげで、幾分安心することができた。だが、カラスを見る度に、びくつと体に緊張感が走り、リラックスできる暇がないのだ。カラスと言う鳥が、都会では多すぎて困るくらいというポピュラーな鳥であるため、あちこちで視界に入ってしまうのだ。家族連れも多く、誰かがまた襲われるのではないかと思いい、気が気じゃない。

瑞生もまた、同じ感覚を持っている。街中にビーストが現われ始めると言うのは知っているが、まさか自分が直接襲われるとは思っていなかった。昨日、自分に襲いかかってきたあの大きなカラスの事を思い出す度に、その姿が頭の中を覆い尽くし、彼女を現実から引きずり出し、幻想の中で追いまわす、そんなイメージがついて回り、その度にはつとして我に帰る、その繰り返しだった。そして、その度に憐と顔が合い、お互いに神経過敏になっている事を知る事になる。

お互い、いつもの倍は疲れる時間を過ごしながら仕事をこなしていた。そんな様子に気がついた尾白が、注意力散漫になっている憐を叱責する。

「おい、憐。今は仕事だから、そっちに集中しろよな。瑞生ちゃんのこと心配なのはわかるけど、それはお目のプライベートなんだから、バイトに持ち込むなよ」

「ごめん。悪かったよ、集中するよ」

「こんな言い方したくねえけど、邪魔になるならいい方がいいぜ。邪魔にならなくて一人前って言うぜ」

「わかったってば。これ、運ぶよ」

「ああ、しっかり頼むぜ」

尾白は、憐の仕事ぶりを心配そうに見ながら、手元の鉄板の上にある具材を調理していた。そこに、二人のやり取りを見ていた針巢が顔を出し、何やら言いたげなニヤニヤした顔を突き出してきた。

「尾白先輩、なかなか手厳しいねえ。人に言うくらいだから、君はもつとできるのは当然だな」

「当たり前っすよ。あれじゃ、客にも迷惑かけかねないよ。一度、きつく言った方がいいんじゃないですか」

「俺が言おうとしたこと、全部言っておいて何を言う。第一、お前さんの言葉、親父さんの受け売りだろう」

「……、わかりましたか」

「伊達に歳はとっていないよ。ま、仲良くするだけでなく、時には厳しい言葉もかけられるのが親友だ。その調子で頼むよ」

「わかってますって。おい、憐。5番テーブル、できあがったぞ」

針巢は厨房に戻りながら、若者二人の仕事をにこやかに見つめていた。まるで、兄弟げんかをする息子たちを見守る父親の様に。

尾白の喝で集中力を取り戻した憐は、いつもの仕事ぶりに戻った。笑顔で対応し、体を止めることなくせわしなく動き回って、仕事を片付けていき、午前の分の仕事を終えることができた。昼休みにはいった憐は、一先ず先に賄いの焼きそばにありつこうとしたが、針巢から、

「憐、汗かいたなら、下着を変えておいた方がいいぞ。冷えるとあつさり風邪ひいちまう。そろそろインフルエンザの季節だからな」

と釘を刺した。確かに、動いている間は気がつかなかったが、動き

を止めると汗を吸った下着がとても冷たく、針巢の言う通りだと憐は思った。憐は早々と食事を済ませると、急いで自分の部屋に生き、着替えを済ませた。そして、再び職場に戻ろうと道を駆けだした憐は、背後に何かの気配を感じた。立ち止まり、背後を振り向くと、その先に広がる街並みの異常な光景を目にした。街の上空には、普段より以上に多いカラスが旋回している。あまりに見慣れた生物のため、人々は以上を見ても見過ごしてしまう。だが、あれがビーストと知っている憐にとっては、それは戦慄すべき光景だった。

憐はエボルトラスターを取り出した。まだ、胎動は弱いままだ。今、自分が行くべきか。だが、光はまだだと示している。思わず、街に向かって足を踏み出しかけたが、彼の脳裏に、「自分を見失うと、誰も守れない」と言う言葉が鮮明に蘇った。ここで感情に任せて飛び立てば、街中で戦う事になる。そうすれば、被害に遭っていない人まで巻き込みかねない。未熟な自分の浅はかな考えではなく、あえて光に身を委ねよう。憐は、後ろ髪引かれる思いで、引き返していった。

「クソつたれめが。あえて俺達の射程距離内に固まりやがって。馬鹿にしてるのか」

小林の、レッドトルーパーの焦燥感が増すばかりだった。クロウシムは攻撃を受け続けながら、本格的に移動をしない。数キロほど移動したかと思えば、レッドトルーパーがまわり込むのを待ち、あえて的になる様な行動をとり続ける。そればかりか、上空を旋回し、他の群れと合流しながらレッドトルーパーにプレッシャーをかけてくる。殲滅どころか、増加しているとしか思えない。

予想以上の数に、デイトガンナーの残弾も少なくなってきた。弾の減り具合とクロウシムの減少は完全に水をあけられ始めた。もしエネルギーが尽きたら……。最悪の事態を指揮官として想定し、

小林はイラストレーターに、撤退の許可を求めることにした。街中の殲滅は無理があると言えない。彼は、パルスブレイガーを起動し、本部に通信を開始した。

「こちら、レッドトルーパー。イラストレーター、聞こえますか」

「聞こえます、小林隊長。何か、変化がありましたか」

「余り、芳しい状況じゃありません。クロウシムは合流を繰り返して群れを大きくしています。予想以上の数に、消耗が激しすぎます。残弾は残り35%。熱光学迷彩もまだ実験段階のせいか、電力消費が激しくもうすぐ残り20%を切ります。撤退の許可をお願いします」

「……、わかりました。効果のない攻撃で消耗し、危険にさらしても、マイナス要素を増やすだけです。新たに採集したデータで、作戦を立て直します。撤退を許可します。そして、補充に向かって下さい」

「了解。……。聞いたな、全員撤退だ。補充をして、体勢を立て直すぞ」

小林は部下に命令を下し、自身も武器をケースにしまい、つなぎを上から着こんでビルを下りていった。普通に歩くだけで、とても特殊部隊の隊長には全く見えなくなる。外に出て、車両に乗り込んだ時には全員がトラックに乗り込んでいた。小林同様、激しい戦闘があつたわけではないのに、皆疲れきっていて、息を切らしながら玉のような汗が浮かんでいた。

「ひでえ任務だ。ただ、カラスを撃つだけでこんなに疲れるなんて」

「まったくだ。訓練を積んだ俺達ですら、ここまで消耗するとは思わなかった。武器はガンナーなのによ」

「中川、塚本。削られたのは体力でも補給でもない。俺達の集中力、精神のスタミナだ。こんな事じゃ、ろくな結果を出せん。弾を補充し、情報を整理して出直した。対策は、イラストレーターが練っている。現場組の仕事は一旦打ち切る」

「本当に精神的に参りましたよ。最期は、マーキングされている標的を捉えるのもきつくなりましたからね。訓練の時は、もっと長時間のぶっ続けの射撃をやったはずなのに……」

「それが実戦との違いだよ、嵯川。最も、日本で実戦を積める奴なんてまず居ないからな。特殊部隊の突入班ぐらいだ、人間相手のな俺だつて参っているんだ。名古屋、車を出せ。今のままじゃどうにもならん」

「了解」

レッドトルーパーの車両は、ゆっくりと発射し、基地へと一時撤退を始めた。その動きを上空からじつと観察する視線があった。上空を旋回するクロウシム達は、じつと彼らの車両を目で追い、そして群れを一旦散開させて移動を始めた。

CICでイラストレーターは、考えあぐねていた。敵は補足しているが、それらが群れをなしていて個体として捉えることができず、リーダー上に移るビーストの反応はまるでアメーバのように分裂と集合を繰り返し、変幻自在に立ち回る。さらに気になるのは、レッドトルーパーに対する反応だった。

生物は自分に危害を加える者に対しては、逃げるか闘争を仕掛ける。生存本能で、自分の命を守るためと言う意思が働くからだ。そ

れは、高等生物になるほど顕著になっていく。ビーストも、優れた生物としての生態を持っている。戦闘力ゆえに人間の攻撃に対して逃げることはないが、防衛行動はとるし、ウルトラマンを相手にした時は逃走だつて行く。にも拘らず、仲間が撃ち落とされていく状況になりながら、クロウシムは逃げようとはせず、寧ろ群れは合流してきた。結果的に、戦力で有利に立っていたレッドトルーパーの方が消耗してしまった。

「まるで軍隊だな。精神的なプレッシャーを与えて、状況を覆す。ビーストはそこまで進化しているのか……。小型化することで都市部に侵入することを覚え、自分達を脅かす僕達に、高度な戦略を持つて対処している。……。待てよ、そこまで高度な戦略を持つているなら、消耗した敵を逃がすだろうか……」

イラストレーターは、気がついた。ビーストの獣性は非常に攻撃的だ。自分を脅かす存在に報復を行った場合、その相手を執拗に狙う。ウルトラマンの介入がなければ、ナイトレイダーも全滅していた可能性は格段に高まる。クロウシムは、レッドトルーパーを撤退させた。しかも、補給を浪費させ、心身を疲弊させた。これは、明らかに攻撃行動。そして、レッドトルーパーは手負いの状態……。
「ナイトレイダーは、緊急出動を。クロウシムの群れを捕捉し、追跡して下さい。彼らは、レッドトルーパーを殲滅させるつもりです。場合によっては攻撃を許可します」

ナイトレイダーにスクランブルをかけたイラストレーターは、レッドトルーパーに回線を切り替え、警告を送った。

「小林隊長、応答をお願いします」

「こちら、小林。どうしました、イラストレーター」

「クロウシムの群れは、あなた方を追跡している可能性が高いです。」

彼らは拡散してますが、少しずつ北上しています。先程の戦いは、消耗戦に持ち込んだ彼らの戦略です」

「わかりました。何とか奴らより、先に基地へ到着します。……、クソつたれがつ、こんなヤバい時に……」

「トラブルですか」

「ええ。最短距離のルートが渋滞しています。このままでは、一般市民に被害を及ぼす可能性があります。迂回するルートに変更しますが、若干距離が延びます」

「わかりました。こちらの兵力を削られるわけにはいきません。必ず、基地に辿り着いて下さい。ルート上の道路は封鎖してスムーズに通行できるよう手配します。ナイトレイダーも上空から援護するので急いでください」

「了解」

小林との通信を終わり、イラストレーターは表情を曇らせた。いやな方向に、事態が進んでいるからだ。破滅的な一つの未来へ。

通信を終えた小林の方は、もっと深刻な顔をしていた。イラストレーターとの会話で、彼はある程度の実感を把握していた。完全にビーストによって一杯食われたと。そして、それは自分達の戦力がビーストに圧倒的に水を開けられた事を意味する。小林は、指揮官として判断を誤った事に、自分自身へ激しい怒りを覚え、傍にあった椅子を蹴飛ばした。

「くそつたれが。ビーストに頭で負けるとは、俺ももうろくしたか。お前ら、ランチャーを組み立てろ。下手すると、戦闘になるかもしれない」

「こ、この状況ですか」

「どうやらビーストのおつむは、俺らより一枚上手だったようだ。さっきの戦闘は、俺達を消耗させるためにあえて捨て駒を撃たせていたんだ。消耗して敗走する俺達を追って、奴らは迫っている」

「げえっ……」

中山以下、他の隊員達は声を失った。ギリギリ残弾はあるが、肉体と精神の消耗はすぐには回復しない。もし、クロウシムのあの群れが一丸となって積極的な攻めに転じたら、極限的な状況に陥る。彼らは無言で、自分達の命を守る命綱であるデイトランチャ―を組み立て、点検を始めた。その様子を見ながら、小林は壁に頭をつけてもたれかかり、ぶつぶつと呟いていた。

「完全に俺のミスだ。もっと早く決断していれば……。こうなったら頼むぜ、和倉。どうやら、借りを作りそうな雰囲気だ」

憐の監視をしていた瑞生だったが、長い間見ているせいか、彼がいつもと様子が違う事に気がついていてた。集中力が欠け、視線がちらちらと街の方に向いている。いつもなら、もっと楽しそうに仕事しているのに、どこか「心ここにあらず」だ。

気になって仕方がない瑞生は、憐がそばにきた時、思い切って訊いてみた。

「何だか、あまり集中してないけど、心配事でもあるの」

「え。べ、別にそんなことはないけど。いつも通りだよ、俺は。瑞生、変なこと言うなよ」

「さつきから、ずっと向こうの街ばかり見ているけど、何か気にしているの」

「えーと、ほら、最近さ、昨日みたいに人を襲うカラスが増えてるって話を聞いてさ。ここ、食べ物を買っているから、集まってくるかもしれないし、子供も多いからさ、注意しないといけないなあって。瑞生、昨日の怪我、本当に大丈夫なの」

「大丈夫、ちゃんと検査も受けて、治療は受けたから」

「そつか。さすが孤門だよな。あんなに手際よく応急処置できるんだから。カッコいいよなあ……」

憐の口から、孤門を褒める言葉が出てくるのは最近である。最初の頃は、年上の孤門に対していくら海外生活が長いと言っても気を使わな過ぎる所があったが、無意識の内に憐の心の中で孤門を兄の様に思っている気持ち、今の様な言葉になって表れていた。

憐の心情面の変化に気がついた瑞生は、あえてそれには触れなかった。とやかく言う事ではないし、良好な人間関係を築いているなら、それはそれでいい事なのだから。風が出てきた、一段と冷え込み始めたので、瑞生はマフラーを取り出そうとした時、彼女の携帯が鳴った。仕事の連絡であるため、憐と反対側を向き、小さめの声で話す。憐もその事はわきまえていて、その場を離れていった。

「瑞生です」

「私よ。今、そっちは大きな変化はない」

「報告通り、今日は何もアクシデントはありません」

「そう。それならすぐに合流しなさい。私が拾いに行くから、そこ

で別のミッションに移行する」

「今からですか」

「ええ。緊急事態が起こったわ。レッドトルーパーの援護に入るために、道路封鎖や目撃者の確保をするためよ」

「わかりました。すぐに合流します」

瑞生は電話を切ると、バッグを持って帰り支度を始めた。首藤リーダーの事だから、よほど大きなアクシデントがない限りは、強引に次のミッションに移行させるだろう。詳細を聞いても、かなり差し迫った状況なのは理解できたので、尚更だ。

その様子を見ていた憐は、勘を働かせ、何か自体が動き出したのを察した。そうなると、自分が行くべき時がすぐに来ることもわかる。憐は、緊張感をみなぎらせていった。

郊外に入り、基地に向かう道が次第に細くなる。しかし、レッドトルーパーの車両はスピードを落とすことなく、必死に道を走行する。次第に、リーダーにクロウシムの群れの反応が追いつき始めているのがわかるからだ。

「隊長、間違いないです。奴らは俺達を追って、合流してきています」

「そんなことはわかっている。気が滅入る事を言っな。もう少しで封鎖地域に入る。そうすりゃまともなスピードで走れるし、民間人を巻き込む心配せずに応戦できる」

「ですが、数が尋常じゃなさそうですよ」

「嵯川、気が滅入るから、必要な情報以外は言っな。各自、武器の点検はしておけ。やり合う覚悟は固めている」

疲労の色が隠せないレッドトルーパーは、栄養補給剤を呑みこみ、必死に体に喝を入れるが、そんなアフターバーナーみたいな事では、体はごまかしきれない。適切な状況判断ができるか、反射的な動きができるか、それが問題である。

「畜生、隊長、完全に追いつかれました。これだけの数にまで増殖していたのか」

中山の報告に、小林は後部ドアの窓を開けて外を似た瞬間、絶句した。街から飛び立ったカラスの群れが、自分達の車両の近くで合流し、まるで黒い塊のように空を覆っていた。そして、クロウシムは次第に高度を下げると一気にスピードを上げ、レッドトルーパーの車両にぶつかってきた。車両内にもすごい音が鳴り響き、壁がどんどん凹んでいく。小林は運転席へ向かい、前方の確認を行う。フロントガラスや窓ガラスにもクロウシム達は体当たりをしてくる。強化ガラスを採用しているため、割れることはないが、次第にガラスにクロウシムの死体の体液がこびりつき、視界が奪われていく。さらに、前方から走ってきた車にクロウシム達が突っ込み、コントロールを失った車は道路を外れて横転した。ドライバーの命はないだろうと言うのは、クロウシムの数と激突の様子で容易に想像がつく。

「名古屋、逃げ切れそうにねえな」

「何とか封鎖地域には入れるでしょうが、基地に着くのは無理ですね……」

「じゃあないな、こうなったら。何とか封鎖地域には辿りつくように頑張ろう……、和倉、聞こえるか」

「聞こえているぞ、小林」

「そつちからも見えてるだろ、このヤバさは。援護してくれと言いたいところだが、無理なんだろ」

「……、すまん」

「俺だって、戦闘機は乗れるんだ。こんな鳥の群れの居る所に突っ込めば、鳥の激突で戦闘機だってイカれてしまう。しかもあいつら、高度を下げてチェスターの攻撃をかわしている。大した奴らだぜ」

「諦めるなよ。まだ打つ手はある」

「当てにしてるぜ……」

小林は、いつになく弱気な口調で話した。それだけ、おかれている状況は危機的な状況なのだ。上空に展開するナイトレイダーは、援護はしたいのだが、あまりに高度が低いため敵に接近できないでいる。無理に接近すれば、クロウシムは固まってチェスターに特攻をかけて、飛行機能を停止させるだろう。かといって、この高度と角度で攻撃を行うのは、レッドトルーパーを巻き込みかねない状況だ。危機が見えているのにも拘らず、何も出来ない忸怩たる思いで皆、唇をかむより他なかった。しかし、和倉はこの状況に突破口を見出した。

「凧、α機とβ機でギリギリまで降下するぞ。失速ギリギリの高度までだ」

「隊長、危険です。いくらクロムチェスターでも戦闘機には変わりありません。この速度で高度をこれ以上下げれば、墜落の可能性が

……」

「危険なのは、わかっている。出来るかできないかを訊いている」

「……、やります。これより指示を待ちます」

「よし……。石堀、平木、孤門。お前達は先行して地上から攻撃しろ。γとδじゃ低速飛行は安定しない」

「了解」

指示を受け、γ機とδ機はスピードを上げて先まわりをする。そして、残ったα機、β機がぴったりとクロウシムの群れを追跡する。
「行くぞ、風」

「了解」

二機はスピードをギリギリまで落とし、地上すれすれの高度を飛行する。そして、群れを後方からバルカン砲で攻撃する。戦闘機に搭載されているバルカン砲だ。通常は威嚇発砲のものであっても、鳥の大きさのクロウシムにとっては肉体が碎け散る威力になる。群れに大きな穴が開き、一気に数を減らしていく。

その様子を車の中から小林も見つめていた。わずかに表情が緩み、盟友の勇氣ある行動に感謝しているようだ。

「やってくれるぜ、和倉よう。相変わらずいい腕だ」

車両への攻撃が幾分弱まり、車はさらにスピードをあげた。もしかしたら、逃げ切れるかもしれない。わずかだが希望がわいてきた。チェスターの攻撃は、まさに名人芸としか言いようがなかった。距離を保ちながら、失速ギリギリの速度と高度で、バルカン砲で撃

ち落とすのだ。機体性能と、二人の技だからこそなしえる操縦だ。テクニクとインサイドワーク、これらが優れているから、彼らが隊長と副隊長と言うポジションにつくのは当然の成り行きである。

しかし、クロウシムの知性は彼らの上を行く。群れの最後尾が突然高度をあげ、チェスターの視界をふさいだ。和倉と凧は心臓が止まるほどの驚きだった。反射的に操縦桿を操作し、高度をあげて回避した。上空からは、まるでこちらの攻撃をブロックする様に群れの後方が厚みを持って飛行している。

「俺達の作戦を理解した上で妨害したのか」

「なんて知能なの。あれはもう軍隊としか言いようがない」

二人は再び接近するべくアタックをかけるが、今度は急制動をかけて体当たりを敢行してくる。胴体部分に当たただけで済んだが、操縦席や機幹部に激突されたら、致命的である。それならばとバルカン砲で攻撃すると散開する。完全にこちらの攻撃を読み、一手先を打ってくる。

レッドトルーパーはようやく封鎖区域に入った。ここから先は攻撃も自由に行える。隊員達は、荷台の壁にランチャーで穴を開け、その穴に銃身を入れて発砲を開始する。少しでも車に張りつくクロウシムを追い払うためだ。封じられたとはいえ、ナイトレイダーの攻撃でクロウシムの群れも拡散し始めている。これなら逃げ切れる、皆がそう思った瞬間、運転している名古屋が悲鳴を上げた。

「クソおお、みんな、床に伏せろっ」

何が起こったのかと、小林は運転席を覗いて絶句した。何十羽というクロウシムが道路のアスファルトの上に這いつくばり、こちらの進路をふさいでいる。カーブの出口だったため、避けるゆとりはなかった。車はクロウシムの上に走り込んだ。当然小さい彼らはいとも簡単に踏みつぶされる。しかし、その死骸がタイヤにこびりつ

き、次第にトラックはスリップしながらコントロールを失っていく。大型車ゆえに、わずかなスリップは致命傷となり、コントロール不能となった車両は道路をはみ出し横転した。

段差があつたため衝撃が大きくなり、荷台にいた隊員達の体は宙に舞いながら鉄板に打ちつけられた。うめき声をあげながらも、皆大きなけがはしていなかった。しかし、運転席にいた名古屋は逃げ場がなく、顔じゅうから血を流して気を失っていた。小林は彼を二代の方に引きずり込んだ。クロウシム達がトラックに殺到してきたからだ。荷台に比べてもろい運転席はあつという間にガラスが破れ、彼らが侵入してくる。間一髪名古屋を後ろに映した小林は扉を閉めた。出血している頭部に、医療道具からガーゼと包帯を取り出し、しっかりと巻きつける。他の隊員達は、先程、攻撃のために空けた穴が仇となり、そこからクロウシムが侵入してくるのを、パルスブレイガーで迎撃はするが、焼け石に水の状態だ。ここには、危険が大きすぎる。

小林は意を決し、名古屋をモニター機器の奥に押し込むと、機材のケースなどで体を隠した。そして、「救援は必ず来る。それまでこいつを守るには、もう打って出るしかなさそうだ」

と、命令した。隊員達は無言で武器をとると、それをドアに向かって発砲した。ドアは吹き飛ばされ、そこにクロウシムが群がってくる。そして、躊躇なくデイトランチャーを発射する。

彼らは外に出て、傷ついた仲間を守るべく、四方八方にいる敵に撃ちまくる。怒涛の攻撃に、クロウシムは彼らに近づくことができない。レッドトルパーはさらに熱光学迷彩を起動し、姿を消すことで相手を攪乱する。

標的の姿が消え、右往左往するクロウシムは格好の標的となり、撃ち落とされていく。さらに上空に和倉と凧のチェスターが駆けつけ、ホバリングしながらクロウシムを撃ち落としていく。形勢逆転も可能と誰もが思ったのだが、敵の知能はさらに上を行く。

地上に降り立ったクロウシムが翼を羽ばたかせ、風を起こす。その風は土を舞い上がらせ、砂埃が辺りに漂う。姿も熱も感知できないが、存在を消したわけではないため、その埃が戦闘服に当たり、次第に人影を浮き上がらせる。そこにクロウシムが一斉に集中する。

「ぎゃあああ」

やられたのは中山だった。必死でランチャーで敵を追い払うが、一羽が彼の腹部に突き刺さり、そこから出血をしている。幸いにも急所は外れたようだが、銃を構えることもままならない。

「中山、下がれ。車で名古屋を守れ」

「了解……」

中山は、必死で車に戻っていった。それを確認した小林は、じりじりと後退を始める。

「よし、塚本、嵯川、下がるぞ。これだけ数を減らせば、上出来だろ」

小林は強がりと言って部下を鼓舞する。とても上出来とは言えない状況だが、絶望的な状況でも気持ちなで萎えたら一貫の終わりである。和倉が上空で援護してくれているし、ナイトレイダーの援護可能な範囲に来たのだ。任務はここまでだと思った。後は、少ない弾薬で我慢しければ……。だが、クロウシムの仕掛けた消耗戦の影響が最悪のタイミングで表面化した。

塚本のディバイトランチャーのエネルギーが切れたのだ。彼は銃を投げ出し、パルスブレイガーに切り替えようとしたが、時すでに遅しかった。光学迷彩が破られているため、その姿を完璧に捕捉された彼の全身にクロウシムが殺到する。倒れ込み、のたうちまわる彼の許に小林と嵯川が駆けつけ、スタンガンモードでクロウシムを払いのける。その瞬間、嵯川のヘルメットに鮮血が飛び散った。

塚本は既に頸動脈を突かれていた……。

目の前で起こった仲間の殉職に、二人は茫然としていた。だが、敵は容赦なく襲いかかってくる。心の底から湧きあがってくる慟哭の声を押し殺し、小林は塚本の体を脇に抱えて車に必死で戻っている。嵯川は、上空に向けて絶叫しながら乱射しまくった。小林の足元に一羽のクロウシムがぶつかり、足をとられて転倒してしまう。その瞬間、動かなくなった塚本の体を守ろうと、小林が彼の体に覆いかぶさった。小林の背中にクロウシムが群がり、口ばしを突き刺してくるが、絶対に小林は塚本から離れなかった。

「てめえら、俺の部下に何しやがる……。こいつは、こいつらは、おめえらには絶対にやらねえぞおお」

嵯川がそこに駆け寄り、二人分の体を車に引きずっていった。合理性ではない、仲間と言う連帯感が、彼らをこの状況にあっても互いを見捨てようとしめない行為に走らせるのだ。

その状況を上空から確認した和倉は、盟友に向かって絶叫した。

「小林いいつ。死ぬなあ」

和倉は普段は見せない激情を表し、危険高度を無視してレッドトルーパーを救おうとする。凧も、普段の彼女であれば和倉を止めるのだが、目の前で起こっている状況になりふり構ってはいられなくなった。その時、レーダーにビースト振動波が現われた。しかも、辺り一帯の森の中から。木々の間から、クロウシムが一斉に飛び立ち、こちらに向かって集合してくるのがわかった。凧はその数を見て、罨にはまったのはレッドトルーパーだけではない事に気がついた。

「ビーストは、ナイトレイダーも潰すつもりで……」

状況を確認していたイラストレーターも、クロウシムの狙いに気がついた。この数で一斉に襲いかかれば、チェスターでも振りきる

のは難しくなってくる。トラップや罠、何重にもひいてきた敵の戦略を見抜けなかったのだ。

「負けた……。僕は、ビーストを相手にしているものと思い込んでいた。罠を仕掛けられたのは彼らだけじゃなく僕にもだったんだ。そのせいで、最悪の事象を確定させて、皆をそこに誘ってしまった。すべての責任は僕にある。相手はビーストじゃない。情報も戦力も完備した軍隊だ。そして、それを指揮しているのは……。M・Pへ。今すぐに撤退して下さい。これは緊急指令です。非戦闘員がそこには危ない」

イラストレーターは必死に呼びかけた。敵は、M・Pも標的、なし崩しにT・L・T・Jすら一気に陥落させようとしているかもしれない、さらなる破滅の事象が頭をよぎるからだ。

「緊急回避ですって」

「それもイラストレーターからですよ」

指示を受診した首藤は、驚きを隠せなかった。しかも、イラストレーターから直接M・Pに指示が出ることは殆どない。大抵は、情報担当の部署を掌握している松永からのトップダウン形式の指示だからだ。首藤と瑞生を乗せたクーペは、三沢や秋山らとちょうど合流した所だった。

「三沢、今の指令は聞いたわね」

「はい。疑問に思っている状況じゃないですね、彼から直接指示が出るなんて」

「すぐに撤退よ」

「はい」

彼らが撤退を始めようとしたその時、何か空の方から物がこすれ合う音が聞こえた。

「リーダー、危ないっ」

瑞生は声よりも先に手が伸び、首藤の腕をつかむとそのまま車に引きずり込んだ。首藤も、瑞生が何を見たのかすぐに察し、瑞生の体の上に自分が覆いかぶさり、かばう様な形で体を重ねた。外にいた三沢も、音のする方向を見た瞬間、その視界に入ったものを見て驚愕した。

クロウシムの群れが、道路すれすれの高さ飛行しながらこっちに向かって来るのだ。三沢は、自分と主塔の車の間に隠れてそれをやり過ごしたが、秋山がその直撃を食らってしまった。

群れをやり過ごした後、彼らは体を起こした。車の中にいた二人は、ガラスの破片を浴びていたものの、奇跡的に傷一つ負っていないかった。

「無事だったようね。ありがとう、瑞生。あなたのおかげで命拾いましたわ」

「いえ、私こそ体をかばっていただいて。ありがとうございます。でも、三沢さん達が……」

二人は車を出て、車体の影に身を隠していた三沢を見つけた。頭部から血を流して言うようだが傷は浅いようだ。首藤は三沢に、体の状態を訊いた。

「三沢、大丈夫だった。怪我は頭部だけなの」

「大丈夫です。傷も浅いはずです。さすがに生きた心地がしません

でしたが……」

「ここはもう戦闘区域と言つことね……」

首藤は三沢に肩を貸し、自分の車に乗せようとした。瑞生も手を貸し、何とか三沢を車に乗せることができた。だが、秋山はかなり重症で、全身が傷だらけで、顔も血で真っ赤になっている。二人は自分の上着やコートで傷口を塞いで、車に運び込み、急いでこの区域を脱出した。危険すぎる上、何とかして、二人に治療を受けさせなければならぬ。

α機とβ機は、何とかレッドトルーパーを助けるためにその場にとどまり続けたが、クロウシムの群れに完全に囲まれた形になった。このままでは、撃墜の可能性が出てくる。機体にクロウシムの体がぶつかると鈍い音が至る所から聞こえ始め、和倉と風は気が気ではなくなってきた。撃墜され、地上に落ちれば、自分達もレッドトルーパーのように餌食になるのが目に見えているからだ。

手に汗がにじみ、口の中がからからになるほど緊張感が高まったその時、γ機とδ機が接近してきた。この状況のため、自己判断でこちらに駆けつけたらしい。二機は、バルカン砲でクロウシム達を撃ち落とし、α機とβ機を上に乗がした。

「あなた達、命令は出ていないはずだけど」

「副隊長、今はそんな事を言っている場合じゃないです」

「孤門隊員の言う通りです。こいつら、今度は俺達が狙いの様ですね」

「命令とか言っている暇はないですよ。現に、相当やばかったし」

「平木隊員、軽口を言ってる場合じゃないわよ。いよいよビーストの狙いが私達に切り替わったわ。上空に逃げるわよ。隊長、急ぎましょう。止まっただけは格好の的です。隊長っ」

「風、わかっているっ。小林、こいつらは俺達がひきつける。死ぬなよ……」

和倉は迷いを振り切り、クロウシムを引きつけながら上空へと高度をあげていった。危うく囲まれかけたが、一旦スピードをあげてしまえば、普通の鳥と変わらない彼らにチェスターに追い付くことは不可能だ。群れに巻き込まれさえしなければ、空中戦はナイトレイダーに分がある。

「α、β、γ。奴らとの距離を作り、メガキヤノンチェスターで奴らを焼き払うぞ。孤門は援護して、合体時にクロウシムが妨害するのを防げ。気をつけるよ、奴らは想像以上に戦略的を行動をとる」

「了解」

クロウシムの群れは、まるで黒い雲のように巨大になっていく。街の近くにこれほどの個体があったとは信じ難かった。その内の一羽を捕獲することができた孤門にしてみれば、一羽がああ集団の規模になるにはどれだけの数が必要なのかが実感できるため、戦慄すら覚える。

「バイオハザードを引き起こし、軍隊のような行動も取る。なんて奴らだ……」

同じようなことを全員が感じていた。一羽は小さいが、集団化すると部隊一つを壊滅させる力を持つビーストに、恐怖を感じていた。距離を稼ぎ、変形するだけの猶予ができたと判断し、和倉が指示

を出そうとした瞬間、前方の空に暗雲が広がり、稲妻と共に中心部に空洞が空いた。

「アンノウンハンドだどつ。こんな時に」

チェスターは旋回し、アンノウンハンドと距離を取ったが、クロウシムがいるためバラバラに飛ぶことを余儀なくされた。彼らがばらばらになるのを待っていたかのように、アンノウンハンドはクロウシムを自らの中に吸い寄せ始めた。クロウシムもまた自らアンノウンハンドに飛び込んでいった。やがて、彼らの体は闇の見えざる手でゆつくりとかき混ぜられ、ブレンドされていく。そして、新たな肉体を持った巨大な怪鳥クロウシム・フュージョンが生まれた。巨大ビーストサイズに生まれ変わり、クロウシムフュージョンはチェスターに襲いつかかった。

バラバラにされた上、ターゲットの性質が突如変異したため、ナイトレイドーは浮き足立つ。攻撃しようにも相手は激しく動き回り、ロックオンさせない。機動力もけた違いになり、スピードの遅い α と β は集中して襲われる。二機を援護するため、 γ と δ がアビロツクを打ち込む。それに気がついたクロウシムは、ものすごい速度で上昇し、アビロツクミサイルを追いつかせない。そして、巨体に似合わない小回りを発揮し、ミサイルに向かって口から光球を吐き、全弾撃ち落とした。

「クソ、このままじゃ速力が足りない。ハイパーストライクフォーマーションに移行するぞ」

和倉の指示にチェスター各機が集まりですが、クロウシムはそれを許さず、再び4機を孤立させる。まるで、チェスターの性能を把握してるかのような行動だ。

孤立させた機体に光球を浴びせかけてくる。それを避けるのに必死で、応戦する余裕がない。これほどまでに高い飛行能力を持つ敵に会ったことのないナイトレイドーは、撃墜を避けるだけで精いつ

ばいだった。

やがて、クロウシムは、機を睨みつけると、集中して攻撃を始め、執拗に追い始めた。速力のある機はギリギリで避けられるが、次第に引き離されていく。やがて、完全に孤門だけを孤立させるのことに成功すると、クロウシムは一層激しく攻撃を仕掛け、上へ上へと追いやっていく。

「孤門、何とか振り切れ。俺達じゃ奴に追い付けん。ストライクフオーメーションで何とかそっちに向かう」

「了解」

孤門は、レバーを前に倒して、噴射ノズルを絞り込む。そして、ペダルを踏み込み、マッハ7と言う機の高速度で上昇を続ける。期待の限界性能を引き出し、少しでも距離を稼ぎたいのだが、信じ難い事に、クロウシムはそれに平然と喰らいついてくる。

「まだ追って来る……。クソ、空気が薄くなってきた……」

行動が上がる度に気圧は下がり、空気も薄くなる。孤門は、フルフェイスにヘルメットを変え、酸素マスクを接続させ、酸欠を防ぐ。しかし、超音速飛行の肉体への負担は想像を絶する。体にかかるGは、オーバーテクノロジーが搭載されているチェスターであっても取り去ることはできない。強烈な重力が肉体を圧迫し、血管を押しつぶし、脳への酸素供給を妨げる。次第に、孤門の視界がぼやけ始め、意識が飛びそうになる。

「駄目だ、しっかりしろ。ここで、気を失えば一瞬で撃墜される……」

そう言い聞かせるのだが、物理的な障害は無視することはできない。目を開けているのもきつくなり、まともな思考ができなくなる。空気は薄くなり、機関系統に異常が発生しているのだが、対応する

事ができない。そして、孤門の意識がなくなるのと同時に、チェスターの機能を停止する。それを待っていたクロウシムは、光弾を狙い撃ちに発射した。光弾がチェスターにぶつかり、大爆発が起こった。しかし、爆風の中から現われたのは、チェスターを携えたウルトラマンだった。

ウルトラマンはチェスターを手にながら、クロウシムから逃げ回る。機動力ではどちらも互角だが、δ機を抱えているため、本気を出して飛べないでいる。意識を取り戻した孤門は、自分が今ウルトラマンに抱えられている事に気がついた。すぐにチェスターを発進させようとしたが、機器がフリーズした状態になっている。パニックになりかけたが、一か八かの覚悟で、孤門はすべての機関をオフにした。そして、数秒間待つて再起動を試みる。狙い通り、初期化された設定値が表示され、機体が息を吹き返した。

「憐、もう大丈夫だ。手を放せ」

ウルトラマンは孤門の声に頷くと、δ機を放し、クロウシムと本気の空中戦を始めた。超音速の超人と怪物が体をぶつけ合い、追いかけ合い、互いのバックを奪いあう。クロウシムの光弾をウルトラマンは腕で受け止め、クロウシムに直進していく。それを避けようと方向転換した所に、孤門のδ機が援護に入って牽制する。そこにウルトラマンが銀の弾丸となってぶつかっていった。そして、その勢いのままクロウシムの体突きあげながら上昇し、ジュネッスブルーに変身する。ぐんぐん上昇し、さらにメタフィールドへ突入していく。それを見届けた孤門はスキャニングパルサーによる位相空間の割り出しを開始する。

「隊長、ウルトラマンが出現し、ビーストとともにメタフィールドに移動。追跡の許可を願います」

「わかった。合流している暇はない。お前が先行しろ。こっちもすぐに追いかける」

「了解」

許可を得た孤門は、メタフィールドへと突入していった。亜空間に移動すると、ウルトラマンが地上にクロウシムを引きずり落とし、地上戦に持ち込んでいた。振り下ろす口ばしを巧みにかわし、マツハムーブで頭上に移動し、頭部にかかとを突き立てる。クロウシムが鳥型であるために、見た以上に軽量なのか簡単に持ち上がり、何度も抱えあげて脳天から落としていく。上空に逃げようとするが、高速移動で先回りして叩き落とす。孤門も、上空からクアドロブラスターを見事に直撃させる。両者の連携は完璧だ。さらに、ストライクチェスターもメタフィールドに到着し、ウルトラマンの援護に加わる。上空からミサイルを降り注ぎ、クロウシムを飛翔させない。圧倒的な展開に、ウルトラマンはアローレイシユトロームの態勢に入る。早々と決着をつけようとするウルトラマンだったが、クロウシムは動きが止まった瞬間っを狙って翼を展開して、衝撃波を起こした。チェスターは突風で一瞬コントロールを失い、ウルトラマンも体をぐらつかせる。それを狙い、クロウシムの光弾がウルトラマンの脇腹に命中した。その場に倒れ込み、激痛に悶絶するウルトラマンを尻目に、クロウシムは飛翔し空中に戦場を移した。

自分のテリトリーに入ったクロウシムは、ストライクチェスターを追い回す。後ろを取られて逃げるしかないチェスターだが、スピードが違い過ぎ、光弾をさばくのでいっぱいはいっぱいだ。孤門も援護でクロウシムをロックオンしようとするが、その動きについていけない。追尾ミサイルも直撃せず、ビーストに翻弄される。お互いに援護し合おうとするナイトレイダーだが、それを見透かすかのように逃げ回り、拳句の果てには射線上に味方を置くことで、同討ちすら狙って来る高度な知能を見せる。

その様子を横たわった状態で見上げていたウルトラマンは、痛む脇腹を押えながら、空中にいるクロウシムに再び狙いを定めようと

する。しかし、あまりに激しい動きのために的を絞れず、必殺の一撃を放てない。アローレイシュトロームは威力は高いが故に、連射ができない弱点がある。結局、この技を諦めるしかなかった。かといって、空中戦では手負いの状態で叶う相手ではない。思案した拳句、ウルトラマンは一つの技に賭けた。

腰だめに腕を組み、全身のエネルギーに集中させながら安定させていく。そして、腕をし字に組んで、光線を照射した。チェスターの間を光線が横断する。巻き込まれないように、距離を置く孤門は、ウルトラマンの構えを見てあつと声をあげた。

「あれは、姫矢さんの技……」

ジュネツスブルーは、姫矢が変身するウルトラマンの技も継承している。このオーバーレイシュトロームをジュネツスブルーが選択した理由は、単発のアローレイシュトロームより、連続照射できるこの技の方が相手を捉える可能性が高い事に賭けたのだ。照射を続けながら、逃げ回るクロウシムを捉えようと車線を振り回す。しかし、それは上空にいるナイトレイダーにも危険が迫ることを意味する。必死に回避行動をとりながら、彼らはウルトラマンのなりふり構わない戦術に対し、悪態をこぼし始める。

「くそ、無茶苦茶やってくれる」

「なりふり構わない、攻めの一手の戦い方にも程があるわ」

「殺す気かよ、あいつ」

「考えは理解できるけど、巻き込まないでよ」

「憐、もうよせ……」

次第に、ウルトラマンとナイトレイダーの連携、そして信頼関係

も崩れていく。それを犠牲にして、遂にオーバーレイシュトロームがクロウシムを捉えた。熱線にさらされ、体が突き上げられていく。しかし、意地でそれを耐えて空中に静止する。やがて、クロウシムの体が光粒子化し始める。ビースト撃破の兆候だ。あと少しでビーストを消滅させられる。誰もがそう思った。

しかし、現実が起こった事態は全く逆だった。クロウシムの体は次第に元に戻り始め、さらにオーバーレイシュトロームの射線を逆流しながら降下していく。まるで効果がないかのように平然と体に光線を受けながら、ぐんぐんスピードをあげ、音速でウルトラマンに激突した。ウルトラマンは体を吹き飛ばされ、メタフィールド内の岩場に叩きつけられた。その瞬間、足を痛めたのか、立ち上がれないでいる。クロウシムは相手の動きを奪ったうえで、さらに追撃し、鋭く硬度のある口ばしをウルトラマンの胸を刺す様な角度で突き立てた。その衝撃はウルトラマンの背の岩場を粉碎させて体を吹き飛ばし、そのままウルトラマンは体を横たえたまま動けなくなった。

クロウシムはそれを見届けると、弾丸のような軌道でスピードを上げていった。

「孤門、奴を追え。こっちはストライクバニッシャーの発射準備。平木、オートじゃ奴を捉えるのは無理だ。お前が撃て」

「了解。さあ、今度こそ逃がさないわよ」

詩織が肉眼でクロウシムに照準を合わせる。孤門は、δ機をクロウシムを追跡し、ストライクチェスターから注意を逸らす。

「ここからは逃げられない。絶対に仕留める……、何っ」

孤門の目の前で驚くべきことが起こった。加速するクロウシムが空間に歪めたかと思うと、メタフィールドを強行突破したのだ。もうメタフィールドの限界時間なのか。

「どこに行っても無駄よ。捉えたっ」

詩織は、引き金を引きストライクバニツシャーを撃ち込んだ。クロウシムを捉えたはずだった。しかし、上空に現われたアンノウンハンドがクロウシム・フュージョンを小型の形態に戻し、クロウシムを拡散させて大部分を逃した上で、残った個体がチェスターに特攻を仕掛けてきた。機関部に直撃し、ジェネレーターが正常に機能しなくなる。エンジン部分も危険な状態になり、クロムチェスターは戦闘力を失った。

「くそおおっ」

孤門は絶叫し、計器パネルに拳を叩きつけた。通信機から、他の隊員達の同様の声が入ってくる。レッドトルーパー全滅、M・Pも負傷者が発生、そしてナイトレイダーは完全敗北し、チェスターを撃破された。言い訳のできない、完膚なまでに叩きつぶされた現実が、つきつけられた。そして、メタフィールド内で倒れ込んでいるウルトラマンは、微動だにせず大地に横たわっていた。

TLT-Jは、設立以来経験したことのない非常事態に陥っていた。レッドトルーパーの全滅、ナイトレイダーのクロムチェスター全機撃墜と言う、前代未聞の敗戦を被ったのだ。チェスターは分離すらできないまま基地に着艦し、直ちに修繕作業が始められたが、機関部まで損傷しており、通常の作業ではいつ戦線復帰できるか予想ができない有様だ。隊員達に負傷者がいない、それだけが唯一の救いだった。

しかし、レッドトルーパーにはその唯一の救いすらない、悲惨な状況だった。小林を含め、四名が重軽傷、塚本隊員は殉職。これ以上ない悲惨な状況である。その報告を聞いた和倉は、小林を探し、彼の許に駆けつけた。和倉はその際、凧も連れて行った。副隊長を務める彼女にも、この状況をしっかり学んで欲しいと言う思いがあったためだ。

彼は霊安室にいた。負傷し、頭部に包帯を巻き、上半身も治療を受けた後のため、上着が膨れていた。足にもきつく包帯が巻かれ、杖がないと歩けない様子だった。そんな状態のまま、彼は亡くなった塚本の遺体のそばに、無言で座っていた。

和倉も凧も、どう言葉をかけていいのかわからない状況だった。命をかけた任務とは言え、実際に殉職者が出ると、それを直視するのはつらいという言葉では表現しきれない。小林は、和倉が来ても振りむこうとはせず、背を向けたまま口を開いた。

「和倉か……。ごらんの有様だよ。全滅とはな……。こいつの顔を見てやってくれ」

全く生気のない、いつもとは正反対の小林の声が、彼の今の心境を如実に物語っていた。打ちひしがれ、立ち上がる気力を打ち碎かれた人間のものに聞こえる。

和倉は、静かに痛いに近寄り、顔にかかっている白い布を静かに

取り払った。顔中に傷ができ、血が黒く固まっている。深い傷口からも出血がなくなっているのが、彼が生命活動を終えていることを示している。首には包帯が巻かれ、致命傷となった頸動脈への傷を隠している。このような傷が全身にあるのだろう。和倉は何とも言えない顔で顔に布をかけ直した。風呂も、塚本の顔や傷を見ることはできたが、目の前の状況で自分が何ができるのかを見いだせず、視線を床に落とすしかなかった。霊安室を重い空気が覆う。誰も、その空気を破って話すことができないでいたが、和倉は静かに口を開き、沈痛な空気を破ろうとあがいた。

「小林、お前もえらい目に遭ったな。レッドトルーパーが壊滅するとは……」

「壊滅ね……。生きてる俺達はいいよ。汚名に耐え、痛みと付き合いだけで済むんだ。だが塚本は、何も戻らない。殉職って言ってもよ、この組織の在り方じゃ、まずは検体サンプルに回される。サンプルって言われるんだ。必死で戦ったこいつが検体サンプルだぜ。司法解剖に回します、この台詞の方がまだ気持ちの整理がつく。それに、こいつにも家族はいる。だが、殉職とは言えないだろ。隠蔽がこの組織を成り立たせている。どんな死に方を与えられるんだろうな。交通事故か、自殺か、遭難か。戦場で必死に戦ったのに、その事実を殺されて世の中も組織も平然とまわっていく。嫌な商売についちまった……。てめえの命令で死んじまった部下の死に様まで隠す組織に属しているなんてよ。情けねえよ……」

「小林、自分を責めるな……」

「お前の口からそんな台詞が出るとはな。俺達は隊長だぞ。俺達の言葉一つで部下は動く。死地に赴く。部下の命を否応なくこの手に握るんだ。部下の負傷、そして死はすべて指揮官にある。それを受け止める覚悟がある奴しか指揮官についちゃいけないのは、お前だつてわかるだろ」

互いに隊長という役職につく者同士、たった二文字で表現される立場に込められた責任、使命をわかり合う二人だからこそ、相手の

つらさや甘さもわかってしまう。だが、だからこそ、言ってやれる言葉が、言わねばならぬものがあると和倉は信じ、小林に語り続ける。

「わかってるさ。だから、自分を責めるのは俺達の役目じゃない。それで部下が生き返るならそれでいいさ。だが、生き残った奴は前に進まなきゃいけない。うじうじしている事が死んだ奴のためになるか。命をかけて戦った部下に報いるために、倒れても立ち上がるしかないんだ。じゃなきゃ、死んだ奴は何のために俺達を信じて戦ったんだ。違うか、小林」

「……、ヘッ、わかってるじゃねえか、和倉。お前に優しい言葉をかけられちゃお終いだ。今みたいに、怒鳴られている方が、よほど心に利く。塚本は俺の命令の結果で殉職した。これは現実だ。それは受け入れるしかない。だからと言って、それに向き合わず、いつまでたつても歩きだせずにいたら、こいつは犬死だ。立ち上がって、再び前に踏み出す気概がないと、浮かばれないからな。じゃないと、その程度の覚悟で俺を殺したのかって呪われちまう」

小林は、杖を使って苦労しながら立ち上がると、毅然とした態度で、塚本の遺体に向かって敬礼した。和倉と凧も、彼にならって敬礼した。命をかけて戦い散った仲間の追悼と、その死に報いるために不屈の心で立ち上がることを誓って。そして、二人の隊長のやり取りを黙って聞いていた凧に向かい、小林は強い口調で伝えるべき事を伝える。上に立つ者は、自らが学んだことを、自分達の後に続く者に教える務めがある。

「凧、この光景は絶対に忘れるな」

「はい、小林隊長」

「お前は副隊長だよな。指揮権は渡されるが、責任はまだ和倉にある。いつか、お前は指揮官になる、そういう器の人間だ。覚えておけ、自分の命令で部下はいとも簡単に死ぬ」

「はい」

「その事を胸に刻んでおけ。死んだ奴は帰ってこない。死は誰にも

一度だけ訪れる。その一度の機会を自分の考えで早めることも出来れば遅くすることも出来る。その権限が指揮官にある。その権限は、個人の感情で動かすものじゃない。お前の感情一つで、人の命を勝手にするな」

「はい」

「勝利することは大事だ。だが、それ以上に部下を無事生還させることも大事だ。両立させる事は永遠のテーマだ。俺も和倉も、それに悩み苦しんでいる。お前も苦しむことになる。その苦しみを、憎しみや怒りでごまかすな。正面から立ち向かって苦しみ抜け。それができりや、……、まあ、ここにいる二人の男よりはましになるさ」

「……、わかりました」

「忘れんなよ。敗北してもそこで屈せず、立ち上がって勝利をつかむんだ。そうすりや、明日が見えるかもな。さ、偉そうな講義は終わりだ。俺も立ち上がって、明日を迎えないとな」

小林は、松葉杖をつきながら霊安室のドアに向かった。風が手伝おうとするが、小林は、自分の意思と足で歩くんだとばかりに、いらないと断った。

「手え借りてたら、一人前に戦えないだろ。塚本は戦士からただの一人の男に戻った。俺は次の戦士を選抜しなきゃいかん。訓練課程をもつすぐ終える奴が二名ほどいる。根上と森次だったかな。レッドトルーパー再建に向けて動き出すことをあいつも望んでいるだろうよ。『柄にもなく泣いてるんじゃないですよ』って言われそうだしな」

「小林、無理はするなよ」

「無理を承知で何とかするのが、俺達レッドトルーパーだ。ナイトレイダーも負けるなよ。チェスターなら、俺達のをスペーパーツで使うように進言した。δ機とのドッキングがある以上、その方が戦線復帰が早くなる」

「礼を言うぞ、小林。ありがとう。俺達も屈しない」

「死ぬんじゃないぞ。その姫じゃまだまだお前の後任は危なっか

しいからな。風、指揮官になるまで死ぬなよ。そして忘れるなよ。現実を乗り越えるために、苦しみを感情でごまかすな。いいな」

「はい、ありがとうございます」

小林はそう言い残して廊下を歩いていった。その後ろ姿は、怪我をしていても力強さを感じさせるたくましいものだった。きつと小林は不屈の心で立ち上がり、レッドトルーパーを復活させる。和倉と風は確信していた。

孤門、石掘、詩織は、チェスターの半壊により、ナイトレイダーの機能が停止したため、一旦休養に入る事になった。最初は24時間だったのだが、修繕が早まりそうなので、12時間に短縮された事情がそこにはあった。廊下を歩きながら、彼らはその事について話あっている。

「石掘隊員。チェスターの修繕つて、そんなに大幅に時間短縮されるものですか」

「通常の修繕じゃ不可能だ。レッドトルーパーのチェスターをばらして、それをスペアパーツにして、ナイトレイダー機に換装させるんだ。色違いだけで、機能は同じだからな」

「それなら、私達がレッドトルーパー機に乗り換えればいいんじゃないの、いっしょ」

「お前な、それが出来ればすぐにそうして決定してるだろ。レッドトルーパーが活動不能の状態だからな。でも、それができないからパーツをこっちにまわすんだよ。じゃあ聞くけどな、レッドトルーパーにないものは何だ」

「えーと、……る機でしょ」

「そのる機があるから、話が簡単じゃないんだ」

石掘の答えを聞いた詩織は、じとーっとした粘着質な目で孤門を見つめた。その視線に突き刺さる様なものを案じた孤門は、顔をこわばらせる羽目になる。

「平木隊員、僕のせいなんでしょうか。確かに、る機も損傷はあり

ましたけど……」

「だって、メインで乗っているのは孤門隊員よ。私だって、たまには乗ってみたいのに」

「二人ともやめろ。たまには乗りたいって、車じゃないんだからな。つまりこうだ。δ機とのドッキングでハイパーストライクフォーメーションになるには、独自のパーツが必要だし、オートパイロットで変形を安定して行うには、専用のプログラムがある。あのでかい機体がマツハでドッキングするんだ。訓練でマニュアル操作もやっているけど、ヤバい作業なのはわかるだろ」

「そりゃまあ」

「そうになると、同タイプの機体同士でも、微妙に機体に誤差が出る。その誤差が衝突や空中分解の要因になりうるんだ。それなら、パーツだけを換装してナイトレイドー機に回した方が修理も速いし、戦線復帰も可能なんだ。それに亜空間突入機能を有しているのは、予算の関係でナイトレイドー機だけだしな。δ機も、後続機でモデルが違っても部品が潤沢にあるから修繕が早くなる。とにかく、ハイパーストライクフォーメーションにならないと、足も火力も足りないからな。わかったか」

理路整然とした石堀の説明に、孤門も詩織もなるほどと言った顔で頷いている。それなら、休養時間が大幅に短くなったことも納得できる。

「よし、納得したら、休養に入ろう。俺も、戦闘データの分析をしたいからな」

「わかりました、それじゃあ」

孤門はそう言って二人と別れると、部屋に戻って着替えをはじめ、バッグには、支給されている救命道具が入ったケースを入れた。

孤門は憐の許に行くつもりだった。メタフィールドから飛び刺した直後に撃墜させられたため、ウルトラマンの姿を確認できなかったが、最後に見た時は、負傷したのか全く動かないまま大地に倒れたままだった。あの様子だと、確実に負傷しているはずだ。だが、

憐の性格だとそれを隠して、普通に振る舞おうとする。手当てをするにしても、自分で適当に済ませかねない。その心配があるので、様子を見に行くつもりなのだ。

準備を済ませた孤門は、与えられた休養時間以内に済ませようと廊下を駆けていった。その姿を、廊下の角で和倉と凧が見つけた。以前にも、孤門は戦闘終了後に解散を待たずにデユナミストの搜索に勝手に向かつていった。その事があつたため、凧は孤門の思惑に気がつき、後をつけようとしたが、和倉は彼女の前に腕を出し、制止した。孤門の行動を黙認する態度をとる和倉の行動に凧は納得できず、抗議の目を向けたが、和倉は彼女をたしなめる口調で語りかける。

「いかせろ、凧」

「何故です、隊長。以前もそうですが、彼は明らかにデユナミストとのコンタクトを取るうとし、それを報告していません。今の行為を見ても、彼はデユナミストを把握しています」

「そうかもしれない。だが、俺達がそれを知ってどうする」

「上層部に報告します」

「じゃあ聞ぐが、上層部は姫矢准に何をした」

「それは……」

和倉が孤門を信頼し、上に心の底で疑念を抱くようになったのは、ウルトラマンとの共闘を本格的に始めた矢先に、ウルトラマンに変身するデユナミストである姫矢准が、ＴＬＴで拘束、いや、捕獲され、人体実験を受けた事を知った時だった。その結果、ウルティメイトバニッシャーと言うウルトラマンと同じだけの戦力を一時的に得ることができた一面はある。だが、たった一人で、誰の力に頼ることなく己の信念に殉じて、自らを犠牲にすることも厭わなかった男の生き様を見た瞬間、和倉の何かが変わった。規約や組織以上に人としてどうあるべきか。矛盾する命題に和倉は足を踏み込んでいくこととなった。その一つの結論は、デユナミストの事は、姫矢の事で一番彼を信頼し光の意味に近づいた孤門が適任であろうし、そ

の責任を最後は自分がとる事が本道ではないか、そう考えるに至っていた。

「組織は、ウルトラマンを戦力、力としか見ていない。だが、俺にはそれが間違っていると思う。姫矢と言う男を見て、お前はウルトラマンをただの力だけの存在と考えられるか。ビースト同じ存在と言えるのか」

「……、私は、ウルトラマンを敵視していました。ビーストと同じ存在として。それは認めます。ですが、姫矢准と言う一人の男の生き方を見て、彼は信じるに値する人間でした。そして、今の青いウルトラマンも、生き方は違えど、思いは姫矢と違いはないと思っています。ですが……」

風の口は重かった。ビーストに対する憎しみだけでここまで来た半生を、その一部でも否定することにつながる怖さと、組織の意向に反すると言う生き方は超えてはならない一線だという常識が彼女を捉えて離さないためだ。一人の人間として、ウルトラマンを信じようとしている。でも、未知のものに対する憎しみを支えに生き、それは今も彼女の奥底に根付いているため、憎しみを全否定することができないのだ。それが、ウルトラマンとデユナミストに対する拒絶に繋がり、孤門の行動も認められない。そして、彼女にはまだ和倉や小林の様な、人としての度量が成長途上であり、未完成である。故に、自分の行動の判断基準に自分の意思以上に組織が大きく存在し、そこに依存してしまう。それにより、規約や秩序を「守る」のではなく無意識に縛られてしまい、和倉とは考えが合わなくなる。「ですが、個人の感情だけで動くのは危険だと言う考えは、私には拭えません。まだ目が行き届く孤門隊員はいいです。でも、デユナミストは強大な力を手にしたまま、市井に紛れています。一人の人間に与えられる力にはあまりに大きすぎます」

「風、力がウルトラマンなんじゃない。光とデユナミストが二つで一つでなくてはウルトラマンにはなれない」

「光とデユナミストが揃わなければ、ウルトラマンにはなれない…」

…」

「斉田リコ、溝呂木真也。彼らが闇に落ちたのは恐怖、力への渴望と言う彼らの心に闇が付け込み、闇に支配された結果だ。俺は報告でしか彼らの経緯を知らないが、そう考えている。だが、姫矢も現在のデユナミストも、力には呑み込まれない。光と彼らは一体となり、支配ではなく光と人が調和し一つとなって超人となる。似ているが、全く違う存在だ。何と言っているかわからないが、信賴、尊重、そして絆で結ばれた存在がウルトラマン、それが俺の考えだ」

「もし、それを誰かが阻もうとすれば、その絆が破壊され、ウルトラマンは消滅し、強大な力だけが残る……」

「そうだ。上は、ウルトラマンと言う存在は欲していない。上が欲しいのはウルトラマンの力だ。それが手に入れば、その存在とデユナミストは不要になる。そういう方針だろうな。だが、心なき力は暴力につながる。だから、俺は孤門を信賴して、やりたいようにやらせる。あいつは、姫矢や現在のデユナミストと無意識に、或は意識的に関係を持ち、それを尊重している。その行動が、光とデユナミスト、人とウルトラマンの絆を結果的に守っている。上の方針に盲目的に従うか、自分で考えて決断するかの違いだ。お前がどちらを取ろうと、ここから先は俺は干渉しない。いずれお前は俺の許を巣立つんだ。自分で決めろ」

最後、和倉は凧を突き放すような言い方で、答えを彼女自身に委ねた。それは、彼女が自分自身の意思で答えを求められるからであり、そして自分自身の意思で決めなければならない時が必ず訪れることをわかっているからである。彼は黙って凧の返事を待った。

凧も、自分の考えで答えを探っていた。いまだにビーストの憎しみからは逃れられないし、この先ずっと変わらないかもしれない。だが、小林の言う通り、自分の感情で物事を決めていいキャリアや立場ではないし、それは許されないことだとも自覚している。答えは一人で探し、決断しなければならない。

「わかりました。私の答えは、現状を維持します。ですが、孤門隊

員の監督責任は私にあります。もし、深刻な問題があった場合は、責任を持って対処します」

「わかった。まあ、お前一人に責任をなすりつけたりはしない。お前が俺の部下で副隊長でいる内はな。さあ、俺達も休養を取ろう。チェスターの修理が終わり次第、ナイトレイダーの活動を再開する」
「了解」

凧は敬礼すると、歩いてきた廊下を戻っていった。その表情は、いつものとげとげしさが和らぎ、表情が柔らかくなっている。彼女も、一人の人間として、隊員として成長する余地がまだまだあるという

事なのだろう。和倉はその後ろ姿を笑みを浮かべながら見送ると、
「まだまだ、楽をさせてもらえないようだ。ま、そういう歳でもないしな」

と言い、笑いながら自室に戻っていった。

二人に見逃されていた事も知らず、孤門は基地を抜け出すと、車を飛ばし連の所へ向かった。夜のため、通行量が少なく、日中にかかる人より大幅に短い時間で辿りつくことができた。運転の間も、孤門は憐の事が気がかりで仕方なかった。メタフィールドに倒れ、そのまま動かない姿は、かつて消耗しきり、戦いどころか、普段立つて歩くのもつらそうになっていった姫矢の姿を思い起こさせたからだ。ウルトラマンとして戦う事は、超人の力を手にしたとはいえ、神になるわけではない。あくまで、一人の人間が巨大な力を手にしたに過ぎない。故に、人としての限界に必ず当たってしまう事を、孤門は自分では体験できなくとも理解していた。ましてや、憐の向う見ずな性格と戦い方を思えば、なおさら心配になる。

遊園地の裏口に到着した孤門は、救急キットを持ち、憐の部屋に向かった。辺りはすっかり暗くなり、しんと静まり返っている。部屋の前についた孤門は、ドアをノックし、呼びかけてみた。

「憐、俺だ。大丈夫か」

しかし、返事はなかった。まだ、帰っていないのか。だが、他に行く場所がないはず。まさか、どこかで生き倒れになっているのではかと思うのがよぎった。不安を押さえながら、孤門はもう一度ノックしたが返事はない。思い切つて、孤門は信に手をかけたところ、鍵はかかつていない。ドアを開けてみると、部屋の中は真っ暗で、何も見えない。そつと足を踏み入れた孤門は、明りを点けようとスイッチ探した。暗い中、部屋を歩き回つち得ると、何かが足に当たった。驚いた孤門は、しゃがみこんで手探りを続けた所、何かを探り当てた。

「憐、大丈夫か……」

憐は床の上に倒れ込んでいた。孤門は何とかして明かりのスイッチを探し出して、電灯をつけた。明りに照らされた憐の姿を見て、孤門は絶句した。

顔には弾の様な脂汗が浮かび、顔面蒼白になっている。そして、ウルトラマンがクロウシムに受けた個所と一致する胸、脇腹、足に傷を負い、服には血がにじんでいる。孤門は、憐の体を抱えてベッドまで運び、彼の頬を叩きながら、必死に呼びかけた。

「憐、憐、おい、目を覚ませつ。憐ッ」

孤門の声は思わず、外に聞こえる程の大声になっていたが、その声に応え、憐はうつすらと瞼を開け、孤門の顔に視線を移し、弱々しい声をあげた。喋るのやつとの状態だ。

「……、孤門、来てくれたんだ。……、カッコわりいなあ、コテンパンに負けちゃった……」

「ふざけるな、一歩間違えば死んでいたぞ。……、軽口利けるだけまだましか。傷の手当てしたやるから、服を脱げ。手伝ってやるから」

孤門は、憐が服を脱ぐの手伝い、傷の具合を確認した。大きな傷口で出血があるのは三か所だが、体中のあちこちにあざが浮かんでいる。どう見ても、昨日今日できたものではなく、随分前からある様に思え、それが孤門には気になったが、とにかく傷口の消毒や治

療をしなければいけない。一先ず、水で傷口を洗浄し、それから消毒を施し、軟膏をすりこんでいった。縫合するほどの深く大きい傷ではないが、完全に治癒するには時間がかかりそうだった。治療が終わると、憐の体は包帯に巻かれて、痛々しい姿になったが、放っておくよりはずっといい。

「憐、何か食うか」

「そうだね……。孤門の顔を見て、ホツとしたら、少し腹減ってきた」

「あるもので、何か作ってやると言いたいところだけど、ろくなものがないだろ。買ってきてやるから、黙って寝て待っている」

「わかった……」

「言う事は聞けよ。しかし、汚い部屋だな。ついでに洗濯もやっておいてやるよ。たく、世話の焼ける奴だ」

孤門は、しょうがないと言う表情で、貯め込んだ洗濯物を選択気に放り込みセットすると、その合間に見せに行き買い物を済ませてきた。それを憐に与えた後、洗い終わった服を部屋中に吊り、ようやく落ち着く事が出来た。負傷した割には食欲はしっかりしており、それを見て孤門はもう大丈夫だろうと判断した。

「それだけ食えりや、もう大丈夫だ。そういや、前にもこんな事があつたな」

「孤門と初めて会った時だよな」

「そうだな……。憐、一度聞いておきたかった事がある」

「何、孤門」

「どうして、お前は自分の事を省みないんだ。人の事は、あれだけ気にかけるのに、自分のことはどうでもいいみたいな戦い方をするんだ」

「それは……」

憐の顔は急に曇った表情に覆われ、視線を落としてしまい、孤門の質問に答えることを避けている、そんな風に見える。無意識の内にはない、意図的にあんな戦い方をしている、孤門は憐の心を見

た気がした。

「お前が、みんなを守るために必死に戦っている、それは見ればわかる。だから、ナイトレイダーもお前を敵視していないんだ。でも、一つだけ理解できないのが、お前の捨て身、いや、やけくそにすら見える戦い方に戸惑っている。はつきり言えば、異様だ、そうとまで思われている。何故、そこまでするんだ」

「だって、みんなの事を守りたいから。みんなが助ければ、それが俺がいた証になるんだ」

「証って……」

「俺はプロメテの子。計画的に誕生し、打算で育てられた存在。……、そんな俺に、この世界に生まれた意味は何かって思った時、光がやってきた。その意味はわからない。でも、この力で、みんなを守る。そうすれば、助かった人の事は、俺がこの世界に生まれた意味になる」

「生まれた意味、存在理由か……」

「だから、俺は生まれてきた意味が欲しい。だから、人を守りたい。ここに住んでいるのも、家族が羨ましかったから。そのそばにいれば、家族ってどんな風に繋がっているのか、わかると思ったから。……、けど、人の見てもやっぱりわからないや。わからないけど、その大切さだけはわかるんだ。だから、大切なものを守り抜くために、光は俺を選んだのかなって、そう思おうとしている。平凡に暮らしている人たちを守ることで、みんなが幸せを守れるなら。俺は戦い続ける。そのためになら、死んだっていい……」

死んだっていい、その言葉を聞いた孤門は、憐を殴り飛ばした。本気で殴った。憐はベッドの上に思い切りたたきつけられた。そして、頬を押さえ戸惑いながら孤門の顔を見上げたが、憐を身大りする顔は、いつもの表情とは全く違う怒りに満ちた顔だった。初めて憐は、孤門が、いや、他人がここまで本気で怒るのを見た。怒りに震えながら孤門は、憐の顔を見据えている。

「死んだっていいだって。馬鹿野郎っ。自分の命を軽く見る奴が、

誰を守れるって言うんだ。憐、それは守りきれなかった命を見ていない奴が言うセリフだ。本当に大切な人を守れない、それがどれだけつらい、いや、つらいどころじゃない、地獄のような苦しみなのか、お前はわかっていない」

「孤門……」

「俺は、前はレスキューをやっていた。救命は必ず成功するものじゃない。目の前で、腕の中で人が死ぬ場でもあるんだ。お前、そんな経験があるか。自分の腕の中で人が死んでいった経験が。つらくて悲しくて、そして怖いんだ……」

「怖い、の」

憐は、意外な言葉を聞いた気がした。失う事が怖いのはわかる。でも、腕の中で人が死んでいく、その怖さとは何をさしているのだろうか。

「怖いさ。人が死ぬ事じゃない。その人が死んでも、自分だけが生きている事がだ。助けを求めた人が死んで、助けられなかった奴が生きていく、その矛盾の中で生きていくんだ。絶対に出ない答えを突きつけられながら次の日も生きていくんだ。次に救いを求められた時、助けられないかもしれない恐怖を抱えながらだ」

「助けられない恐怖……、孤門はそれとどう戦ったの」

「諦めなかった、それだけだ。自分が生きなきゃ救えない命がある、そう信じて救い続け、死に立ち会ってきた。お前も、本当に人を救いたい、守りたいと思うなら、何で死んでもいいなんて言えるんだ。お前が生きていれば救えた命が、次の日に救えなくなるんだ。そう考えたら、お前は死んでもいいなんて言えないはずだ。……、でもな、俺もこう考えることができるようになったのは、最近のことなんだけどな」

「ナイトレイドーに入ってから的事なの」

「ああ。俺には、大切は人がいた。愛した女性がいたんだ。ずっと大切にしていって、そう誓っていたはずなのに、俺は気がついていなかった。……、俺と初めて会った日、彼女は死んだ。殺されたんだ

……」

思いがけない孤門の告白に憐は驚きと同時に、声が出なくなった。いつも優しく、時には今のようになりやうな彼の過去に、それほどまで過酷な事があつたことは信じられなかつた。しかし、孤門は、目を少しだけ潤ませてゐるものの、穏やかな表情で、そして静かな口調で語り続ける。何故かはわからないが、その事を憐に伝えたい、その思いがそうさせるのだ。

「もう付き合つてゐる頃の彼女は、死んでゐたんだ。彼女は、リコは自分が死んでゐる事もわからず、恐怖の合間の夢の中で、俺と一緒ににいた。そして、ルシフェルの様な闇の巨人にされてゐたんだ。何もわからず人形のように操られ、俺達やウルトラマンと戦つた。そして、心も体もボロボロになつて、俺の腕の中で本当に死んだ。一番守りたかつた人を、手を差し伸べる事も出来ずに死なせてしまつた」

「孤門……」

「憐、俺もあの時に死んだんだ。彼女の死を受け入れられずに、目を閉じ耳を塞いだ。死人と一緒にだ。その結果どうなつたかと言えば、助けを求める子供の事が目に入らず、攻撃の巻き添えにした。傍にゐる存在もわからなくなる。そして、そのつらさを憎しみてごまかそうとし、闇に心を委ねそうになつた。生きる屍だつたんだ。でも、俺を助けてくれたのは、やっぱりリコだつた。彼女は、俺が人を救う仕事していることに誇りを持つていてくれた。そして、あんなひどい人生になつても、出会つた事を後悔しないと云つてくれた。だから、俺は闇に足を踏み入れるわけにいかない。人を救つて彼女が誇つてくれた生き方を貫く。そして、もう誰もリコのように悲しませたりしたくないから、俺は戦う。そのためには、死ぬわけにはいかない。生き抜かなきゃ、誰も守れないんだ」

「俺、知らなかつた。普段から孤門を見てゐるのに、そんな過去があつたなんて」

「人の過去なんて、話さない限り、いや、話しても簡単に理解でき

ないよ。今だって、すべて守れているわけじゃない。でも、立ち止まったら、彼女への誓いは守れない。どんなひどい光景を目にしても、俺は立ち止まらず、救えなかった命の分まで救い続ける。それが彼女との約束だし、今の俺の支えだ。憐、人を救いたいなら、救い続けたいなら、死んでもいいなんて言うな。お前にも大切な人がいるだろ。その人を守るためにも、お前は生きなきゃならない。負けても、打ちのめされても、そこで終わるな。立ち上がって、生きるんだ。そうすれば、きつと守れる命がある。人を救うためにある命と光を、粗末にするなよ。生きようとあがいて、苦しみの中で死にそんな人を俺達は守らなきゃいけない」

孤門の言葉に、憐は自分に欠けていた何かが埋められた様な気がした。欠けた心がすべて埋まったわけではない。だが、孤門がぐぐり乗り越えた壮絶な生き様を聞いた今、憐に一つの変化を促すことになった。助けを求める人を助けるために、自分が為すべきことは何なのか……。

「孤門、やっぱ俺、ここで倒れてなんかいられないよね。明日も、あのビーストは人を襲うかもしれない。その時に俺が倒れていたら誰も救えない。今は死ねないよね」

「そうだぞ、憐。お前の命は、救いを求める人の命でもあるんだ。光を継いだ者の宿命かもしれないな。でも、お前は一人じゃない。俺達もついている」

「わかったよ、孤門。俺、もう寝るよ。明日も仕事あるし」

「せめて、明日は休めって言いたいけど、這ってでもお前はいくだろうし、やめるとも言わないよ。ただ、そこに包帯とガーゼと薬は置いておくから、朝晩に必ず取り替えるよ」

孤門はテーブルの上に治療に使う薬や道具を置き、部屋のドアを開けて、出て行こうとした所に憐が、

「孤門、ありがとう。手当てじゃなく、色々な話をしてくれて。こんな風に殴られて怒られた経験ないからびっくりしたけど、聞かせてくれた話は絶対に忘れないよ」

と言った。頼もしい兄を見つめる様な憐の目に、孤門は照れくささは覚えたものの、伝えたことは本心からわかって欲しいことだった。本当に憐が自分のいったことを理解してくれるといいのだが……。孤門は心の中に不安を抱えずにはいあらなかったが、彼を信じることに賭けた。

「本当に忘れるなよ。じゃあ、今日はもう寝て明日に備えろ。お休み」

「おやすみ、孤門」

孤門は明かりを消して、憐の部屋を後にした。彼の足音が消えしんと静まり返ると、憐はもぞもぞとベッドから起き上がり、ベッドの下から腕に装着する機器を取り出し、それを手に巻きつけスイッチを入れた。機械が動きだし、しばらく時間をおくと、ディスプレイに数値が表示され、憐はそれを無表情に読み上げた。

「マイナス、4.05……」

憐は顔をうなだれながら機械を腕からむしり取り、床に放り投げた。そしてまんじりともせず動かずに数分その姿勢を保ち、やがて静かにベッドの上に体を投げ出した。眠っているわけではない。じつと天井を見つめるその目は、静かで悲しげな色を携えている。

「孤門、俺は後どれだけの命を救えるかな。……、俺は怖い、怖いよ。でも、それじゃ人は救えないよね。せめて、目の前で泣いている、脅えている人を救いたい。俺の大切な人を守りたい……。まだ俺は戦える。まだ立ち上げられる。死ぬ瞬間まで、俺は戦うよ。そうして守った命が、俺の命の証に、記録に、記憶になる……」

憐はゆっくりと目を閉じ、傷つき疲れ切った体を癒すために眠りに就こうとした。閉じられた目から、すうつと一筋の涙がこぼれ落ちた。その温かくもあり冷たい涙が頬を伝わるのを感じながら憐は、「もうすぐ、俺の運命が近づいてくる。変えようのない未来が……。なあ、光の巨人。教えてくれよ。どうしてあんたは、俺にこの光をくれたんだ。それとも、俺が欲しかったからなのか。俺はまだ、光の意味をわかっていないのかな。教えてくれよ、ウルトラマン……」

と、声にならない声で呟き、静かに眠りについていく。戦いの合間に与えられる安らかな時間の眠りの中に。その時、枕元に置いてあったエボルトラスターがかすかに光った。迷い続け、答えを探す憐の問いかけに、かすかに囁きかけるように……。

フォートレスフリーダムでは、整備班が夜を徹してクロムチェスターの修繕を行っていた。12時間ではさすがに完了できなかったが、それでも予想以上のスピードで修復作業が進んでいた。やはり、レッドトルーパー機とナイトレイド機の互換性があり、大部分の部品を流用できる事が大きい。表面の装甲のカラーリングまでは手がまわらないが、機能性は八割近くまで回復しつつある。その作業を、イラストレーターはじつと見守っている。自分の立てた作戦がことごとく裏をかかれ、殉職者まで出した結果に、いつもはそれらしい表情を余り出さない彼にも、さすがに自信を失った心がありありと浮かんでいる。

いつもなら、その頭脳に数パターンの作戦が浮かび上がり、その中で彼の望む未来に最も近い作戦だけに絞り込んでいくのだが、その元になる発想が思い浮かばない、いや、表面化しないのだ。クロウシムの知性は、知性の高い野獣と言う範疇を超えており、ヒトに近いレベルの知性を持っているとは思えない。だが、そうであったとしても、それは予測を修正すれば作戦を立て直し、裏をかかれ、作戦行動を理解し、チェスターの性能まで熟知したあの行動は、ビーストの行動とは思えない。高度な知性を持つビーストに、さらなる緻密な指示を与えた存在がいる、彼はそう確信している。そしてその存在は、アンノウンハンドしかあり得ない。

T-LTの技術のブラックボックスであるウルティメイトバニッシャーのすべてのデータを削除し、情報操作によって、M・Pの活動の妨害、そして小型ビーストの都心部への侵入。明らかにこれには

人為的なものが含まれており、自分達の作戦を妨害するものであることを考えると、スパイはアンノウンハンド、或はその意思を組むものでしかあり得ない。クロウシムがあれだけ高度な戦術をとれたのも、盗み出した情報から作戦を組み立てたアンノウンハンドが指示を送り、クロウシムがそれを理解したうえで行動した、そういうからくりなのであろう。

だからこそ、このクロウシム戦には迂闊な情報開示はできないという思いが、イラストレーターの心の中にある。敵はこの組織内の誰か。手に入れた情報を解析し、高度な知能を有するクロウシムに送ることで、ウルトラマンやＴＬＴの上に行く事ができる。つまり、アンノウンハンドがイラストレーター、クロウシムがナイトレイダーでありウルトラマン、そんな逆転の構図が浮かび上がる。これでは、作戦の組み立て様がない。開示した瞬間、敵に餌を与えることになるのだ。どうしようもない堂々巡りに彼は陥っていた。

思考実験を何度も行っているため、いつの間にか隣に松永が来ていた事にイラストレーターは気がつくことができなかった。

「観測者であるあなたが、何も見通すことができない、そんな事もあるんですね」

「……、皮肉のつもりかな」

「いいえ、事実を言ったまでですよ。皮肉はあなたの方がよほどきつい」

互いに相手に気を使わず、媚も売らない二人にとって、その喋りは皮肉や嫌味に満ちているように人には聞こえる。だが、それは彼らが誰よりも事実を認識し、核心をついているからに他ならない。優しい言葉で真実を隠すより、刺々しく毒をまき散らすとしてもあるがままの事実を伝えることで、現状を理解する方が有益だと信じているからである。

「困るんですよ。作戦参謀のあなたに思考停止されるのは。頭脳が動かなければ、手足、つまりナイトレイダーは機能しない。器官であるＴＬＴ-Jも機能不全になる」

「わかってるさ。でも、ここまで作戦を読み切られ、殉職者も出した。思考実験の結果はすべて今回と同じになる」

「だから、立ち止まったままですか。殉職者はそういう人間の許につく程、不幸なことではない。そんなことは背広組の私にわかることですし、世の中の常だ」

「何が言いたいのか」

「まったく。プロメテウスプロジェクトによって生まれた特別な存在とは言っても、人間としてはまだ子供だということですよ。ビーストとの戦いは確かに負けられない。だが、それは最終的にです。その過程で、死傷者が出る。防衛組織としては、それは当たり前だと私は考えている。冷血と言われるようにと何と言われるように、戦いの過酷さを理解した上です。無傷で戦いに勝とうとは、そんな虫のいいことは考えていません。当然、今度の様な耐えがたい、腹立たしい敗北もあります。でも、それで終わりですか。思考停止して終わりですか、あなたは」

腹立たしいを通り越して、人を怒らせるのを目的にしている様な松永の言い方ではあるが、冷徹に彼はこの状況の真実についている。そして、皮肉まみれの言葉で、イラストレーターに大事なことを鋭利な刃物で心に突き刺すように浴びせていく。それは、嫌がらせではなく、一人の大人が一人の少年に、厳しさを持って世の摂理を教えるように。

「偉そうなことを言いたてるつもりはありません。あなたには動き続けてもらわないと困る。負けて終わりじゃ困ります。もう一度再起動してもらわないと、また敗北してしまう。いや、戦いにすらならない。例えば打ちのめされても、また起き上がる気概を持ってもらわないと。脳死状態の組織にして欲しくはありません。さあ、勝利を勝ち取る作戦をその頭脳で考えて下さい。それがあなたの仕事じやありませんか。それとも、これで終わりにしますか。その存在価値を壊されたままでですよ」

きつく皮肉な松永の言葉は、イラストレーターに奮起を促す者で

ある。彼が、それを意図したのかどうかは誰にもわからない。それを受け取る人間の次第で、言葉の価値も意味も変わってしまう。イラストレーターは、天才的な頭脳と裏腹なまだ、未成熟な心でその言葉を受け取り、解釈し、彼なりの決断をした。

「策は、……、あるに決まっているさ。答えは出ている」

「ほう、それは助かります。聞かせていただけますか」

「いいよ。あなたの許可が必要だし、いくつかの関門をくぐらなきゃいけない」

「聞かせてもらいましょう」

彼らの会話は、格納庫の中の修復作業の音で、かき消されるため全く聞こえない。しかし、いつもの表情を取り戻したイラストレーターの表情と、それを聞いて時に眉間にしわを寄せ、頷きながら聞く松永の顔が、わずかながらにでもその会話の内容が、簡単のものではない事だけは物語っている。そして、わずかの間だけ、騒音がやんだ時、彼らの声がこぼれてきた。

「理解してもらえたかな」

「まあ、今回のような状況ですから、致し方ありませんね。しかし、あれを手放すのは実に惜しい」

「惜しんでいたら、勝利はつかめないよ」

「……、いいでしょう。手配しておきます。あなたも立ち会いますね」

「もちろん。では、我々も取りかかりましょう。勝利のために」

力強い言葉を残してイラストレーターの画像は消えた。残った松永は、チェスターの修復作業を眺めながらため息をつき、

「勝利のために、ですか。頭脳は再起動したようですが、やはり私とは住む世界が違う」

と、こぼしながら、格納庫を後にした。先程までの言葉が、皮肉だったのか叱咤だったのか、それは彼らにしかわからない。彼ら自身もわかっているかもわからない……。

一方コマンドルームでも、ナイトレイダーが再起に向けて直しを図っていた。クロムチェスターと言う武器の修繕は、整備班が夜を徹して行っている。自分たちも、負けられない次の戦いに向けて、準備を怠るわけにはいかないという覚悟があった。そのため、反省材料となる先の戦いのデータを分析し、敵に対する対応策を取らなければならない。

「クロウシムが厄介なのは、フュージョン時に群生状態の時だな。クロムチェスターの最終的な損害も、群生状態の奴らにやられたものだ」

「私もそう思います、隊長。航空機は、その機体を飛行させるために精密な機器とバランスの許に飛ぶ。その上、飛行速度が速いこともあって、あの鳥サイズのものが当たるだけで致命的な損傷になってしまう。我々にとっては、寧ろフュージョン状態の方が戦いやすいかもしれません」

風の発言は、航空兵器の意外なもろさを端的に指摘している。旅客機の空港でも野鳥の群れが飛行機にぶつかると、エンジントラブルの原因となり、常に生態は不安材料の一つになっている。旅客機よりさらに複雑な機構を持つ高等技術を持つチェスター故に、このトラブルは深刻なものになるため、的が一つに絞り込めるフュージョン状態の方が戦い安いと言う風の言葉は、誇張でも何でもないのだ。

「でも、クロウシムは高度な知能を持っているわけだから、よほど危機的な状況にならないと合体はしない。散開していた方が安全だし。やっぱり、プレッシャーを与えない限り、合体はしないかも」

「平木隊員、プレッシャーってどんなことですか」

「それは孤門隊員……。つまりあたし達と一緒に。個別に分かれて戦っている時に損害が広がると、一旦集合して防御を固めて、火力を集中させる。だから、クロウシムに甚大な被害を与えれば、奴らは合体せざるをえなくなる」

「でも、彼らは頭がいい。狙い通りに動いてくれるかどうか」

「じゃあ、動かす方法を考えればいいじゃない。いつしー、何かないの」

「簡単に言っなよ。クロウシムに関しては、体の構造しか把握できないし、知能なんて数値化できたとしても、そのデータから次にどんな行動をするかなんてわからない。だが、どうにかして奴らを動かして、そこを大火力で一気に減らすって言うのはありですね、隊長」

「問題は、いかにして奴らをコントロールして、主導権をこっちに奪い返すかだな。こればかりは、俺達じゃどうしようもない。イラストレーターに打診しよう」

「わかりました。それと隊長、我々の作戦とは関係ありませんが、悪い報せがあります」

「何だ、石掘」

和倉は石掘にその事を尋ねるが、彼は浮かない表情をし、深いため息をつきながらキーボードをたたき、モニター画面に映像をまわした。画面にはウルトラマンが映っていた。

「これは前回のウルトラマンの戦闘映像です。今の所は、これまでと変わりません。問題はここからです」

全員が目に向けたモニターには、必殺の一撃を放とうとしているウルトラマンの映像が映っている。ここに、何の問題が隠されているというのだろうか。

「ウルトラマンは激しく動き回るクロウシムに対し、単発でしか放てないアローレイシュトロームを諦め、射線を引いて撃てるオーバーレイシュトロームに切り替えます。こちらに、姫矢が変身したウルトラマンの同じ技を映しましたが、デユナミストが違うせいか、火力に差が見受けられます。それでもビーストを仕留めるには十分な威力です」

「ここにどんな問題があると言っんだ、石掘」

「この後です、隊長。クロウシムを消滅させるまであと一步のところで、クロウシムが盛り返します。我々はこれをクロウシムの生命

力のためだと思っていましたが、実際は違います。ウルトラマンが息切れを起こした、つまり急激に技の熱量が低下したんです。これが証拠の映像です」

画面にはクロウシムが盛り返し、光線を逆流して突き進んでいく映像が映し出されているが、サーモグラフィー上の映像には、ウルトラマンが放った光線の熱量が急激に低下したことを示す変化が表れていた。これが意味するものとは一体何なのだろう。

「これが意味するのは何なの、石掘隊員」

「仮説でしかありませんし、確証は一つもありません。ですが副隊長、姫矢の時も、急激な戦闘力の低下が起こっています。これはその兆候かもしれません。しかも、この直後、メタフィールドは強行突破されます。メタフィールドの継続時間は約3分。この時は、2分30秒を超えていません。亜空間は、ウルトラマンの肉体そのもの。となれば、ウルトラマンのポテンシャルの低下が起こっていると考えられます」

「ちょっと待って下さい。青いウルトラマンが確認されてからの経過日数が、姫矢さんの時に比べて短過ぎませんか」

「そこは俺にもわからない、孤門隊員。赤と青、ウルトラマンのこの体色の違いは、恐らくデユナミストの個体差が具現化されたものだと考えられている。そう考えると、青いウルトラマンのデユナミストは断言はできないが、何か体質的な違いがあるんじゃないかな。どっちにしろ、ウルトラマンに衰弱の傾向がみられる以上、甘えたり、あてにはできなくなってくるという事でしょね」

周りは、ウルトラマンを戦力と言う形で見ているのが大勢だ。だが、孤門にとっては、ウルトラマンの弱体化は、憐の衰弱につながる。思い当たる節はいくらでもある。初めて会った時の疲労の具合、プロメテの子と言う出自、命知らずの戦闘スタイル、ラファエルと言う謎の言葉に対する反応、死んでもいいという投げやりな生き方……。憐はまだ、とてつもない大きなものを隠している。自分にも把握しきれない大きなものを。そして、それは憐の命にすら関わっ

ていくのかもしれない。

孤門は思った。果たして、自分の言った言葉は憐にとって何をもたらすのだろうか。より、過酷な運命に誘うだけなのだろうか。いや、例え過酷な運命であっても、憐が命をかけて守りたいという思いがあるのなら、その命を無駄にして欲しくない。それは、孤門の願いでもある。何度倒れても立ち上がり、救いたい命を守り続けるために憐は戦うつもりだ。そうだからこそ、自分の命を安売りして欲しくない。彼が、光の意味の答えを見つけるためにも、死んで欲しくない……。

孤門が物思いにふけっている間も会議は続いたが、一先ずの結論を和倉は下さなければならなかった。

「ウルトラマンの件に関しては、まだ仮説の域を出ない。だから、不確定なものにとらわれるわけにはいかん。俺としては、今後もウルトラマンとの連携は崩すつもりはない。彼が今まで示してきた姿勢を見ても、敵視することはできないからな。万に一つでも、人類にとって望ましくないものをもたらすなら話は別だが、今は共闘を続ける。いいな」

全員が和倉の言葉にうなずき、賛同した。ウルトラマンへの思いは、皆一緒だ。もはや、無意識の内に仲間意識すら持ち始めている。「クロウシムについては、正直お手上げだが、作戦は伝えられるだろう。こうしている間にも、奴は繁殖を続け、バイオハザードの危険レベルが上昇する。早めに決着をつけなきゃいかんのだが……」

眉間にしわを寄せながら考え込んでいる彼らの許に、松永がコマンドルームに入ってきた。珍しくイラストレーターは姿を見せない。ミッション開始が近づいているのに、松永一人と言うのが妙だった。「管理官、イラストレーターが見えませんが……」

「ええ。彼の代理として、今回は私が参りました」

「代理とは、一体どういうことですか」

「クロウシムは優れた知能を持ち、さらに、イラストレーターの話では、アンノウンハンドが高度な戦略を伝えている。それが事実だ

とすると、こちらの戦力を分析されかねない。この理屈はわかりませんね」

「……、はい」

指揮官としての和倉なら、その辺りの理屈はわかる。クロウシムは、常にこちらの作戦の裏をかき続けた。ビースト単体の意思を超えた、さらに上位の死が働いたと考える方が、すつきりするからだ。それに、基地内にスパイがいるという疑惑も浮上している。まさか、と言う思いが和倉の中に浮かぶ。

「そこで、今回の指示は作戦開始時までとは与えられません。情報の気密度をあげるために、イラストレーターとの接触はできなくなります。火力だけではない、情報を制したものがこの戦いを制します」
「では、我々はどう動けばいいのですか」

「15:00にフォートレスフリーダムから出撃。これだけは伝えます。その後、和倉隊長のみに指令を与えられます。その指令に従い、隊員の配置と指示をお願いします。現場での単独の判断になりますが、やっていただけです」

「……、それが我々の、いえ、指揮官足る私の当然の役目です。では、その指令の伝達方法は」

「申し訳ないが、これも極秘です。しかし、確実にあなたにはその指示が伝達されます。この点は信頼してもらいたい。通信も傍受される、今度の敵はそれを可能にする相手です」

「……、わかりました」

和倉の返事を聞き、その表情を見届けると、松永は、

「では、皆さんの健闘を祈ります。……、レッドトルーパーは殉職者を出しました。あなた方は、全員帰還して下さい。以上です」と、言い残し、コマンドルームを後にした。

命令の概要がわからない中での出撃に、隊員達は不安や戸惑いを隠せないでいる。完全敗北した相手に、何の情報も開示されないまま、戦いを挑むのだ。不安があつて当然である。しかし、そんな血員たちを鼓舞するように和倉は、

「こういう状況だが、相手の特性を考えれば仕方がない。ここは俺を信用してくれ。いや、命を預けてくれ。頼む……」

と、皆に頼みこんだ。和倉にここまで言われては、誰も反論できないし、彼以外にだれが信じるに値するだろう。その思いを代弁し、凧が和倉に覚悟を伝える。

「隊長。私達は、隊長の部隊に属する隊員です。いつでも、命令に従い、命を預ける覚悟で戦います。そして、皆で帰還することを信じます。信じて戦います。もちろん、この戦いもです」

皆の覚悟を聞き、和倉の腹も決まった。生真面目で硬い、いつもの表情に戻ると、隊員に指示を与え始める。

「作戦は伝えられないが、出撃までできることはある。石堀、お前はここに残り、クロウシムの分析をして俺と対応策を立てるぞ。凧、平木、孤門、お前達は整備班の所に行き、修繕したクロムチェスターについてレクチャーを受ける。突貫工事の上にパーツの換装がされている。昨日までと同じ挙動を取らないとも限らない。機体の情報をしっかりと把握しておけ」

「了解」

4人が同時に返事をする、ただちに行動に移る。この一体感こそがナイトレイダーが築き上げた強さであり、財産でもあった。

その頃、憐は傷が治っていないにも拘らず、孤門の予想通り、仕事にいつものように顔を出していた。まだ傷は痛むが、孤門からの手当のいいつけは守って、包帯などはしっかり取り替えている。いつ戦いになるのかもわからないし、孤門が言ったことが身に染みていたからだ。

傷が痛むが、仕事に支障があるわけではない。ただ、気になるのは、いつもならいる瑞生が見当たらないことである。昨日の急な呼び出しがあったことを考えると、あのビーストに関わる事件なのかもしれない。だが、何もわからない以上、自分にできることはない。無事を祈りつつ、次の戦いには勝利して、これ以上犠牲者を増やし

てはならない、そう考えようと努めた。

だが、手ひどくやられたせいなのか、憐は周りにいる鳥が気になって仕方がない。カラスはもちろんだが、雀や鳩の類いにまで過剰に反応し、きよろきよろしてしまい、時折、尾白や針巢に注意されてしまう。だが、仕事に集中しようと心がけても、なぜか鳥の動きに目がいつて仕方がない。神経過敏になっているのではない。何か、彼の目を引く物が関心を向けさせている、そうとは思えないのだ。一体、何なのか……。

予定時刻になり、戦闘準備を整えたナイトレイダーは、シューターブースで搭乗口に向かい、各チェスターに分乗する。凧から、隊員にチェスターの修繕具合がチェック項目として伝達される。

「オプチカムフラージュについては問題なし。推進力の低下は見られませんが、挙動が不安定になる可能性があり、マニュアル操作による補助が必要。攻撃システムは誘導ミサイルに問題なし。レーザーなどは、照準システムのデータ移行が間に合わず、手動で操作。ハイパー스트ライクバニツシャーも、ジェネレーター換装後の調整に不安が残るため、手動で一発のみが可能。以上のチェック項目を記憶せよ」

「了解」

和倉もその通信を聞きながら、座席についたが、何か背中に違和感を感じ、背もたれの辺りを探してみると、一通の封筒が体と座席のシートの間に挟まっていた。

「何だこれは……。小林からだ」と

怪訝に思い、和倉は封を切った。中に目を通した和倉の顔に、驚きの表情が広がっていく。しかし、離陸準備完了のアナウンスが流れ、一旦その封筒をしまい、和倉は離陸態勢に入る。

「いくぞ、各機発進」

和倉の声と共に、偽装されたダムから、四機のチェスターが勢いよく飛び出した。やはり、乾燥されたジェネレーターがまだ不安定

なのか、若干何ぐらつきを見せたものの、すぐに機体の安定を修正し、オプチカムフラージュで姿を消し、ミッションエリアに向かっていった。

その様子を、展望台から小林が見つめていた。まだ、杖なしで歩くことができず、巻かれた包帯が痛々しいが、その顔には精悍さがみなぎっていた。彼は、チェスターが消え去った方向をずっと見つめながら、力強く彼らにエールを送った。

「頑張れよ、お前ら。その機体には、俺達の魂も積んでいるんだ。負けるなよ。勝って生還して、その魂をここに連れ帰ってこい。お前達に何かあった時には、今度は俺が魂を継いでやる。だから、……生きて帰れ」

小林は、いつまでもその場で見送り続けていた。

同じ頃、憐もまた戦いに備えていた。再び傷に手当をしてがつちりと包帯を巻き付けた。外したばかりのガーゼにはまだ赤い血の跡がついている。それでも、自分が行かなければ、救えない命がある。死んでしまえば、明日以降の命を救えない。今度こそ、絶対に勝たねばならない。

ドアを開け、外に出ると、すでに夕日が傾きかけている。その夕日に照らされた街の上空を不気味な黒い鳥が飛び回っている。ビーストだと憐は確信した。だが、戦場はここじゃない。憐は、その時が来るのを待ちながら、太陽に向かって歩き出す。

チェスター各機は、ミッションエリアに到着した。だが、まだ作戦が伝えられていないため、次の行動に移れないでいる。戸惑いを隠せない隊員達に、通信機から和倉の声が流れてきた。

「これより、次の行動を指示する。α、β、γはこの地点でメガキヤノンフォーメーションに移行して待機。δ機は、このまま市街地上空まで進行し、シークレットプログラムを解除しろ。暗証番号は19711112。伝えられるのはここまでだ。各機、行動に移るぞ」

「了解」

情報の開示は、ここに来ても為されなかった。しかし、ナイトレイドーは和倉への信頼を基に、今為すべき事を果たしていく。 α 、 β 、 γ 、の三機はゆつくりと降下しながら、メガキヤノンチェスター形態に移行する。そして、 δ 機は孤門の操縦で市街地上空に向かう。

機体は、オプチカムフラージュで姿を消しているため、一般市民には見えない。上空を旋回しながら、孤門は和倉に言われたプログラムをチェスター内の端末から立ち上げる。そして、19711112の番号を入力すると、プロテクトが解除され、モニターに何やら周波数のような波線が提示されていき、機体の下で何かが動いている音がした。 δ 機の外では、機体の下部が開き、そこからパラボラアンテナの様なものが現われた。

一体この状態で何をすべきかわからない孤門だったが、すぐに外の異常に気がついた。街の上空を飛びまわっていたクロウシム達が集まり始め、じわじわと δ 機に接近してくるのだ。姿が見えないのに何故だと思った孤門は、和倉に連絡を入れ、この後の対処を仰いだ。

「隊長、こちら孤門。現在、市街地上空で……」

「待て、孤門。それ以上は言うな。わかっている」

和倉は孤門の言葉を遮り、有無を言わず中断させた。そして、冷静かつ断固とした口調で孤門に命令を下す。

「孤門、その『状態』を維持しながら、ゆつくりとこっちに向かえ。ゆつくりだぞ。それ以上は言わん。これは命令だ」

「……、了解。指示に従います」

孤門は和倉のいつにない厳しい口調に、完全に吞まれていた。だが、信頼する指揮官の命令に逆らう必要はない。クロウシムが δ 機に向かって殺到するという恐ろしい状況でありながら、彼の心に恐怖や不安が湧いてこなかった。次第にクロウシムの群れは森から飛び発った群れも加わり、黒い塊が空を飛んでいる様な光景が出来上

がっていく。

カラスの大きさであり、身体能力もそれと同じであるクロウシムの速力では、δ機のスピードには追いつけない。次第に孤門の心に余裕が生まれ、落ち着きが生まれる。

「あと少して、隊長達がいるポイントだ。それにしても、ものすごい数だ。どうして、δ機に大人しくついてくるんだ……」

孤門の疑問は当然のものであるが、その疑問を解決することより、今は自分が彼らを誘導することが任務なのだと言い聞かせ、その任務を忠実に続行する。そして、いよいよ山肌に沿って旋回し、メガキャノンチェスターの機体が孤門の視界に入った。そして、控えているメガキャノンチェスターからクロウシムの群れが確認される。

メガキャノンチェスターの機体の上部から伸びる銃身から、メガキャノンが発射され、こう出力のビームがクロウシムの群れを直撃し、多数の個体を一瞬にして蒸発させた。追い討ちをかけるようにチェスターから、さらにビームが発射され、次々とクロウシムを撃破していく。

昨日は完全に裏を搔かれ続けたナイトレイダーが、何故このようにクロウシムを見事にトラップにはめることができたのか。その秘密は、和倉が小林から受け取った封書の中に隠されていた。

作戦決行の数時間前、フォートレスフリーダム内の射撃訓練所に、松永とイラストレーターが会合していた。射撃場は少し手が加えられ、射撃手が立つ場と的がある空間が強化ガラスで仕切られ、彼らがいる側と反対側には、孤門が捕獲してT-LTの貴重なサンプルになっていたクロウシムが飛びまわっていた。彼らの他には誰もおらず、完全に密室空間が出来上がっていた。

松永は、イラストレーターの依頼でこの場をセッティングしていたのだが、貴重なサンプルをこれからどういう扱いをするのかを聞いていたために、あまり浮かない顔をしていた。彼にしてみれば、ビーストに対する抗体を作る上で貴重な生体サンプルは大事にした

いのだが、現在起こりつつあるバイオハザードの危険や、T・L・T・Jに迫る脅威を考えると、そうとも言ってられない現実もわきまえている。その腕の苦渋の決断であった。

「あなたの言う通りのセッティングはしましたよ。で、この後はどうすれば」

「そのスイッチを押して。この後に怒る結果が、今後の作戦を決めてくれる」

「なるほど……」

ホログラム映像しか送れないイラストレーターに変わり、松永がスイッチを押した。その瞬間、クロウシムに変化が起こった。

先程まで勝手気ままに飛びまわっていたクロウシムが、突然強化ガラスに向かって一直線に飛んできたのだ。当然、強化ガラスに阻まれ、弾き飛ばされるのだが、それにひるむことなく強化ガラスにぶつかっていく。あまりの衝撃に、松永はガラスが割れるのではと不安がよぎったが、抜群の強度を誇るガラスはびくともしない。それどころか、ぶつかり続けるクロウシムの体の方が悲鳴を上げ始める。次第に出血がおびたしくなり、骨が碎ける音までしてくるのだが、それでも無意味な体当たりをやめようとはしない。そして、最後は体が砕け散り、べつとりと血や体液をガラスに塗りたくりながら絶命してしまった。

衝撃的な光景に、額に浮かんだ汗をハンカチで拭きとり、眼鏡をかけ直した松永は、この実験の意味と結果を理解した。

「なるほど。アンノウンハンドが発する波長を乗せた電波を発すること、ビーストを強制的に誘導するということですか。ですが、ここまで強烈な効果を発するとは予想以上です」

「自らの命も省みない服従。僕もこれほどまでとは思っていなかった。でも、アンノウンハンドの指示にクロウシムが従うなら、集合をかけ融合を始めた際の周波数を流せば、クロウシムは有無を言わずにそれに従う。アンノウンハンドになり済まし、彼らを騙す。フェイクだ」

「なるほど、この方法であれば、主導権をこちらに維持したまま作戦が遂行できる。ですが、スパイの存在がある以上、ナイトレイドーにどうやってこれを伝えるかです。正式な手続きでは、どこかで情報漏れが起こるかわからない。通信も傍受の可能性が高い。そこが問題です」

松永の指摘は、スパイと言う存在が考えられう状況では、当然の懸念である。この作戦をどうやってナイトレイドーに伝達するかが問題になるのだが、イラストレーターはそこにも案が、いや、トラップを仕掛けてくる。

「もちろん、直接伝えるのはありかもしれない。でも、もしナイトレイドー内にスパイがいるとしたら、全く意味がない。そこで、ナイトレイドーには作戦決行直後まで、作戦内容に対する通信は行わせない。情報開示も行わない」

「では、どうやって彼らに作戦を伝えるのですか。そこが重要です」
「第三者に、アナログな方法でやってもらう。文字媒体は管理がしやすい上、盗み見られる可能性が一番少ない。監視していればいいからね。それを運ぶのは、前回の作戦で最も被害をこうむった小林隊長にお願いしている」

「……、なるほど。もし彼がアンノウンハンドであれば、作戦失敗の時点で容疑者が断定できますからね。作戦が成功すれば、犯人探しは一から出直しますが、ビーストの殲滅に一步近づく。転んでもただでは起きないという表現が日本にあります、あなたの今度の作戦はそれを体現していますね」

「僕だって、欲しいのは勝利だから」

二人の立てた作戦通り、δ機に搭載されたアンノウンハンドの周波数の電波を発生させることで、完全に行動を制御し誘導が可能となった。そして、無防備のまま飛来した群れをメガキャノンチェスターで狙い撃ちにしていく。イラストレーターの思い描いた通りだった。

次第に数を減らしていくクロウシムに、ナイトレイダーは圧倒的有利を掌握しつつあった。しかし、思い通りにはさせようとしない存在がいる。アンノウンハンドは空間に穴を開けて存在を露わにし、クロウシムを集合させる。偽装した振動波より、本物が持つ振動波にクロウシムは当然のごとく従う。こうなると、次に出てくるのはクロウシム・フュージョンだ。火力と機動力を得るため、クロムチエスターはハイパーストライクフォーメーションに移行する。

しかし、ドッキングの間は、機体制御にプログラムが優先されるため、攻撃に対して無防備な状況になる。その隙を、クロウシムが逃すはずはない。アンノウンハンドから飛び出したクロウシム・フュージョンは、チェスターのどうにもならない隙に襲いかかる。だが、クロウシムの巨体を弾き飛ばしてくるものが現われる。ついにウルトラマンもまた、戦線に復帰してきた。

クロウシムは上空に逃れ、ウルトラマンもその後を追う。大空を縦横無尽に飛び回り、二体は有利なポジションを確保しようと旋回を繰り返す。互いの体が火花を散らせて交差し、牽制し合う。やがて、二体は正対し、互いの体めがけて急加速させる。どちらも、衝突する気はない。だが、先に動いた方が相手にバックを与えることになる。音速で接近する二つの巨体。ギリギリまで引きつけ合い、意地を張り合うが、正面衝突の危険に耐えきれなくなったクロウシムは、翼を動かして方向を変えた。衝突寸前の方向転換のため、ウルトラマンにそれは読めなかったはずである。だが、予想外の事が起こった。

ウルトラマンも同じタイミングでクロウシムの動きについていき、顔面にパンチを的確にヒットさせた。予想外の攻撃に、一瞬動きが止まり、失速したクロウシムだったが、すぐに体勢を立て直し、ウルトラマンを振り切ろうとするが、どんなに飛びまわってもウルトラマンを振り切れず、追いつかれる度にスピードの乗った打撃を与えられる。スピードの問題ではなく、クロウシムの拳動が完全に読まれていたのだ。

それは、憐が昼に見た鳥の動きから学んだことだった。鳥は翼に風を受け、それをコントロールすることで高度や方向を調節する。そのため、それらを変更する際には翼の動きが変わるため、筋肉の動きにそれが如実に表れる。それを、鳩やスズメの羽ばたきから観察した憐は、クロウシムも鳥である以上、それが当てはまると気がついたのだ。ビーストと言う巨大さに目を奪われていたのだが、鳥と言う形質を持つ以上、クロウシムも鳥の運動の共通性が当てはまる。ウルトラマンは、クロウシムの翼や筋肉の動きを完璧に読み取り、次の動きを先読みすることを事が出来ている。

夕日に照らされるウルトラマンの体は美しく輝き、その飛行は華麗で力強く、その姿は伝説上の鳥である鳳凰を思わせる。

クロウシムは光弾を吐いてウルトラマンを討ち落とそうとするが、バリアーを発生させられ、決定打を与えられない。やはり、肉弾戦しかない判断し、ウルトラマンに滑空していく苦労しつつ無の背後から、クロムチェスターのビームが直撃する。新しい敵に、クロウシムは一旦間合いを広げようとするが、速度の違いを力バーしながら、クロムチェスターはクロウシムのバックを確保し続け、執拗にビームをヒットさせる。

この戦法は、和倉と石掘が見つけたクロウシムの死角をつくものだった。鳥であるクロウシムは、どうしても頭の後ろにどうしようもない死角を持つことになる。そこを執拗に攻撃すれば、自動照準が使えなくとも攻撃を加えることができる。

しつこく続くナイトレイダーの攻撃に、たまらず逃げだそうとするクロウシムにウルトラマンが側面から体当たりを加える。そしてそのまましがみついたままジュネッスブルーに変身し、メタフィールドに引きずり込んでいく。それを追い、ナイトレイダーもメタフィールドに突入する。

前回の戦い同様、ウルトラマンは地上戦に持ち込んでいる。鳥と言う形態では、格闘には不向きなためウルトラマンに圧倒的な有利な展開になる。身軽に動き回り翻弄しながら、腹部や頭部にキック

を当て、ダメージを蓄積させていく。クロウシムも、光弾を吐いて何とか形勢を逆転させようとするが、頭上からチェスターのミサイルが撃ち込まれ、攻撃を遮断されるだけでなく、飛翔すら阻まれる。空に移動されるとクロウシムに分があるが、飛行する生物である力ラスの形質を色濃く受け継ぐため、あまりに軽量な体になっている。結果として、ウルトラマンやナイトレイダーの攻撃を受け流すことができず、ダメージが蓄積したクロウシムは、ついに倒れ込み、そのまま動かなくなった。

普通の生物であれば死んでもおかしくない状況だが、ビーストにその常識は通じない。類まれな生命力で再び立ち上がってくる可能性は十分にある。ウルトラマンはとどめをさすため、クロスレイシユトロームの態勢に入った。

その瞬間、空に暗雲が広がり、暗黒がメタフィールドを包み込んでいく。ダークフィールドだ。アンノウハンドも、この状況に焦りを感じたのか、介入を始め、ビーストに有利な状況を作り上げた。さらに、空間に空いた穴から稲妻がクロウシムの体に落とされる。クロウシムの肉体は、アンノウハンドの意思によって変異を始めていく。脚だった部分は伸長し、人間の腕のような構造に変わっていく。さらに、下半身からは、新たな二本の脚が発生する。信じ難い速度で、生物として異なる形質を獲得していったクロウシムは、ダメージも回復させ、ゆっくりと立ち上がった。

その姿は、鳥だけではなく、人間の形質も獲得していた。長い手足はまさに人間そのもので、かゝすお頭部と巨大な翼を持つ鳥人、クロウシム・ヒューマンへ変化した。クロウシムは新しく獲得した手足を完璧に使いこなし、ウルトラマンに疾走していった。

その腕から繰り出されるパンチやエルボーは重く、キックは目で見えぬのがやつのスピードを持っている。スピードを武器にするジュネッスブルーですら翻弄されるその攻撃は、フュージョン時とは全く異なる生物から繰り出されるものと言ってよかった。

次第に押され始めるウルトラマンに対し、知性も発達したのでは

と思えるクロウシムは、先日戦いで負傷した個所に的確にダメージを与える。傷口をえぐる様な一撃をくらう度に、ウルトラマンは苦悶の声を上げ、動きを鈍らせながら倒れそうになる。

「憐、深追いするな。お前の傷は浅くはないんだ。今、助けるぞ」

孤門は、クロウシムを牽制しウルトラマンを救うためにクアドラブラスターを発射する。凧も、クロウシムの背後を取ったチャンス逃さずに、バニッシャーレーザーを発射した。しかし、それをどうやって察知したのか、クロウシムは命中直前に飛び上がりこれを回避した。的を失ったビームは、ウルトラマンの近くに着弾し、彼の体は吹き飛ばされてしまう。

「くそっ」

ウルトラマンを助けるどころか、さらに窮地にい込み、クロウシムを空中に逃がすことになってしまった。だが、敵を撃つチャンスがほとんどないため、その判断は間違っではない。クロウシムの反応がナイトレイダーの上を行くのだ。

自分のテリトリーに戻ったクロウシムは、チェスターを追い始める。後ろを取られたナイトレイダーは必死に振り切ろうとするが、スピードに差があるため、すぐに追いつかれる。クロウシムは光弾を発射し、敵を撃ち落とそうとするが、紙一重でチェスターはそれを避け続ける。だが、このままでは撃ち落とされるのは時間の問題である。次第に距離を詰め、確実に仕留められる間合いまで詰め、喉の奥に光弾の光がたまり始める。そして、あと一息で、光弾を発射するという時、クロムチェスターの機影が視界から消えた。敵を見失ったクロウシムはまわりをきよるさせながら敵を探すが、次の瞬間、チェスターはクロウシムの背後をとっていた。オプチカムフラージュによってわずかな時間だけ姿を消して、後ろに回り込んだのだ。

「全砲門、開け」

和倉の声と共に、クロムチェスターのすべての武器がクロウシムに浴びせかけられた。不意に後ろを取られたクロウシムにそれを避

けるゆとりは与えられなかった。ミサイルが着弾して炎に包まれ、チームが追い打ちをかける。炎に包まれクロウシムの姿が見えなくなった事に、ナイトレイダーは、一縷の望みを託した。これで倒れなくて、皆はそう願った。しかし、願いは叶わなかった。

体中が炎が立ちあがった状態で、クロウシムが驍進してきたのだ。真正面からの攻撃に、回避する余裕はナイトレイダーにはない。もはや強制分離かないか、誰もがそう思われた時、ウルトラマンが間に割って入った。チェスターをかばう形で立ちはだかり、その背中にクロウシムのくちばしが激突した。

苦しそうな声をあげ、もがき苦しむウルトラマンを、攻撃を邪魔されクロウシムが首を締めあげて怒りをぶつける。状況はさらに悪化し、ウルトラマンのコアゲージが点滅を始め、いよいよ時間がなくなり始める。ウルトラマンは必死に体を動かし、相手の腕をこじ開けると、器用に体を腕の間から脱出させると、サツカーのオーバーヘッドキックの要領でクロウシムの脳天に蹴りを叩き込み、地上に向かって叩き落とした。

クロウシムを何とか振り払ったウルトラマンだが、先日の負傷に加え、今の攻撃でもう満身創痍に陥っている。だが、その目にはまだ闘志が残っており、彼の不屈の意思が全身から溢れだしてくる。彼は、クロウシムを見下ろすと、今度はナイトレイダーの顔を準に見つめていく。和倉、風、石堀、孤門、そして、なぜか最後に見た詩織の顔をずっと見つめている。

「え、何で私……」

何故自分がウルトラマンに見つめられるかわからない詩織だったが、ウルトラマンの瞳に次第にひきこまれていくような感覚を覚えた。そして、その視線に不思議な感覚を覚える。

——何だろう。この目、私はどこかで見たことがある。奔放で危なっかしい、でも優しさに溢れたこの目をした人間に私は会っている。じっと見つめあった詩織は、その脳裏にウルトラマンの意思が届いた様な気がした。そして、彼が何を望むのかを。

「隊長、ハイパーストライクバニッシャーの発射準備を。引き金は私が引きます」

「それは最初から決めてある。だが、どうやってあいつに当てる。もう、さっきの様な手は使えないぞ」

「大丈夫です。私の腕と、ウルトラマンとの連携があれば」

「ウルトラマンとの連携だと」

孤門がこういう事を言い出すならわかる。だが、なぜ今回に限って詩織がいきなりこういう事を言い出すのか、和倉は理解に苦しんだ。だが、悩んでいる暇はない。地上ではクロウシムが立ち上がり、こちらに向かつて飛びあがってくる構えだ。

「勝算はあるんだな、平木」

「勝算じゃありません。絶対にです。孤門隊員、青いウルトラマンを信じていいんですよ」

「え、……、はい。彼は、僕たちを思いを共にする仲間です」

「それじゃあ、決まり。行きましょう、隊長」

孤門のウルトラマンへの信頼、そしていっになく自信に満ち確信を抱いている詩織。飛翔を始めようとするクロウシム。残り少ない攻撃オプシオン。和倉は指揮官として、決断を下す時がきた。

「よし、いいだろう。お膳立てをさっさとええ」

「クロウシムの正面をキープしてください。そして十分に引きつけてから、一斉にミサイル発射。私とウルトラマンでフィニッシュを決めます」

「よし、風は機体をコントロールしろ。俺と石掘、孤門で引き金を引くぞ」

「了解」

覚悟を決めたナイトレイダーはクロウシムに向かって突撃していく。そして、ウルトラマンのその陰に隠れ、一直線になって弾丸のように飛んでいく。

クロウシムは、相手を攪乱しようとするが、風は見事にその動きについていく。

「ウルトラマンはお前の翼の動きを読み切って、次の挙動を予測した。仕組みがわかれば、私にもできるっ」

わずかな戦闘のチャンスを見逃さず、ウルトラマンの戦い方でその攻略法を盗み出したのは、見事と言う他はない。完璧に動きを読み、チェスターを相手の真正面にキープさせる。無防備な敵にクロウシムは、光弾を吐いて撃ち落とそうとするが、尻は相手の首の動きや視線で弾道を予測し、最低限の動きでかわしてしまう。

次第に、クロウシムとの距離が縮んでいく。和倉はここが勝負所と判断し、石掘と孤門に、

「今だ、撃てっ」

と命じた。残ったミサイルがすべて発射され、クロウシムに向かっていく。さすがに避けきれないと判断したか、クロウシムはミサイルに向かって光弾を発射した。その瞬間、

「今よ、ウルトラマンっ」

と、詩織が叫んだ。その声に弾かれる様に、クロウシムの吐いた光弾がさく裂し、次々と誘爆するミサイルの炎の中にウルトラマンが飛び込んでいく。あつと声をあげて驚く詩織以外のナイトレイダー達だったが、さらに驚いたのはクロウシムだった。

目の前に広がる炎の中から飛び出した来たのは、クロムチェスターではなくウルトラマンだった。体を屈め丸くしながら回転し、しかもその両腕にはシュトロームソードが輝いている。至近距離で、尚且つ不意打ちで高速で接近するウルトラマンを回避するゆとりはクロウシムにはなく、二刀流のシュトロームソードがクロウシムの翼を切り裂いた。ウルトラマンは一気に地表に到達し、足を踏ん張って地面を滑りながら、アローレイシュトロームの態勢に入る。

クロムチェスターも炎を突き破って機体を露わす。目の前に広がるのは、すでに地上に到達し必殺の一撃の態勢を整えている。そしてクロウシムは翼を失い墜落を始めていた。この状況を唯一予測していた詩織は冷静さを失うことなく、口元に笑みを浮かべながら引き金を引く。

「ジ・エンド。レッドトルーパーからのお返しよ」

クロムチェスターから、ハイパーストライクバニッシャーが発射される。その瞬間、詩織とウルトラマンの狙いを理解した孤門は、ウルトラマンに向かって叫び声をあげた。

「今だ。撃てウルトラマン」

その声が聞こえたのかのように、ウルトラマンはわかっているという様な立ち振る舞いで素早く振り向くと、上空のクロウシムに狙いを定め、アローレイシュトローンを発射した。

ウルトラマンとナイトレイダーの不屈の心が放った必殺の一撃を両面から食らい、クロウシム・ヒューマンの肉体は一瞬にして塵一つ残さずに消滅した。

クロウシムの敗北に共鳴する様にダークフィールドが消滅していった。通常食うかに戻り、ナイトレイダーは帰等を始めた。その隣をウルトラマンが並んで飛行している。今までにない行動であった。夕日に照らされながら飛行する彼らの姿は、勇ましく美しいものだった。赤い夕日に照らされたジュネッスブルーのウルトラマンは、ナイトレイダー達を静かに見渡すと、静かにその姿を消していった。その場を去って行ったウルトラマンを、孤門は物憂げながらも、無事に帰還した事にホッとしている様子だった。だが、激しさを増す戦いの中で、消耗を始めた憐にどんな過酷な運命が待ち受けているのか、不安でならない懸念も強く抱いているのも確かである。

孤門とは別の感情を抱いているのが詩織である。何故、あの場面でウルトラマンが自分に語りかけてきたのか、今いち理由がわからなかった。射撃の腕を見抜く力でもあるのだろうか。だが、彼女を見つめるその目に、詩織はどこかで会った様な気がしてならない。

「あの目、どこかで見た様な気がする。いつどこでかなあ、絶対見たはずなんだけど……」

「何、一人でぶつぶつ言ってたんだ」

「ちょっと考え事よ、いっしょ。……、やっぱり、気のせいかなあ……」

どうしても、その眼差しの持ち主を思い出せない詩織。気のせいで片付けるには、あの強さと優しさが共存する純粋なあの目の光は、あまりにも心の中に鮮明に残っている。だが、その眼差しの持ち主を、走馬灯の彼方から、なかなか引き戻すことができなかった。

決して諦めることをしなかった、不屈の魂を持つ者たち。その心がなければなかった勝利だった。クロウシムによって破壊されたものは多かった。だが、一つだけ確実に取り戻した物がある。それは、ウルトラマンとの絆だった。戦いの中で築き上げ、これからの戦いで最も武器になるもの。それを取り戻した戦いを終え、ナイトレイドーは次の戦いに備え、束の間の休息に入っていた。

人が生きる上で、敗北は必ずある。敗北があるからこそ、勝利が存在する。でも、僕達に課されるのは敗北の許されない戦いだ。敗者と勝者を分かつ物。それは何か。負けを認めない悪あがきは、大切なものを失わせていく。本当の勝利をもたらす物、それは何度でも立ち上がり、地に塗れても起き上がる不屈の心。激しくなっていくこれからの戦いに必要なのは、兵器と言う力だけでは生き残れない。不屈の心で困難に立ち向かう時、光は僕たちをも照らし出す。そう信じて、僕らは明日を戦いぬく。闇の恐怖を乗り越える日まで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2213y/>

ウルトラマンネクサス アージュブルー

2011年11月30日20時00分発行